

第一章 聖書

一、聖書の構成

(一) 聖書は神の本である

聖書はすべて神の靈感を受けて書かれたものである(IIテモ 3:16、15~17)。

聖書の預言は、人々が聖霊に感じ、神によって語ったものである(IIペテ 1:20~21)。

イエス・キリストは、聖書が神の言葉であると認定された。その一点一筆もすたることはあり得ない(参考: マタ 15:4、マル 7:8~9、マタ 15:18、ヨハ 10:35)。

主は言われた、「この聖書は、私について証しをするものである」(ヨハ 5:39、ルカ 24:27、44)。

聖書はクリスチャンの信仰の基準である(イザ 8:20、ガラ 1:6~9、使徒 17:2)。

聖書に一言でもつけ加えたり減らすことは許されない(申 12:32、黙 22:18~19、エレ 26:2)。

(二) 聖書構成の過程

<旧約聖書>

旧約聖書は 39 巻あるが、ヘブル語聖書では 24 巻しかない。なぜならば、それらはサムエル記上・下を 1 巻とし、列王記上・下を 1 巻とし、歴代志上・下を 1 巻とし、ネヘミヤ記とエズラ記を 1 巻とし、12 の小預言書を 1 巻としているからである。一番最初の巻・創世記は紀元前 1500 年に、最後の巻・マラキ書は紀元前 400 年に、ユダヤ人によりヘブル語で書かれた。ヘブル語聖書は次の 3 部分に分かれている: すなわち律法、預言書、聖徒伝である。

1. 律法 (Laws or Pentateuch)

第一編の律法書は創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記など 5 書が含まれている。これらは「モーセの律法」又は「モーセの書」と呼ばれている(歴代下 33:18、30:16、35:12)。以前からユダヤ民族の中で使われたが、全集を「経典」として編成したのは紀元前 400 年頃であった。

2. 預言書 (Prophets)

第二編は預言書と言われ、前預言書と後預言書に分かれている。

前預言書はヨシュア記、士師記、サムエル記、列王記が含まれている。

後預言書はイザヤ、エレミヤ、エゼキエル等の書、及び 12 小預言書、即ち: アモス、ホセア、ミカ、ゼパニヤ、ナホム、ハバクク、オバデヤ、ハガイ、ゼカリヤ、マラキ、ヨエル、ヨナ等が含まれている。これらの預言書は 400 年の歳月をかけて選ばれ、紀元前 250 年に初めて「経典」と決定された。

3. 聖徒伝 (Writings, or Hagiographa)

第三編は「聖徒伝」又は「作品」と呼ばれ、性質の異なる文章、計 11 巻で構成されている。ヘブル語聖書では下記のように分かれている:

詩の書: 詩篇、箴言、ヨブ記

5 巻の書: 雅歌、ルツ記、哀歌、伝道の書、エステル記

預言：ダニエル書

歴史：歴代志上下、エズラ記とネヘミヤ記

「聖徒伝」はおそらく「預言書」の後期に編集が行われ、紀元 100 年頃に、エルサレムの陥落及びユダヤ教の分散に伴い、ジャムニア会議（The Council of Jamnia）でユダヤ人は旧約を 24 巻、つまり「モーセの律法 5 巻」、「預言書 8 巻」、「聖徒伝 11 巻」と決定した。（日本語の聖書は 39 巻、並び順は英文聖書と同じ）

<新約聖書>

新約聖書は 27 巻あり、紀元 34 年に「マルコによる福音書」が最初に書かれ、最後にヨハネの黙示録が紀元 90 年にギリシャ語で書かれた。その内容は下記の通り：

1. 四福音書

福音書には、マタイ、マルコ、ルカ、ヨハネが含まれている。最初、ユダヤ人のクリスチャンは、旧約聖書の他にキリストの言葉及び行いをクリスチャン生活の最高権威としていた。それ故、四福音書は日に日に信徒たちに認められ、第二世紀半ば頃に新約聖書の第一組が作られた。

2. パウロの手紙及び使徒行伝

パウロの巡回伝道により、文字による働きが必要となった。13 通のパウロの手紙の中には、ローマ人への手紙、コリント人への第一・第二の手紙、ガラテヤ人への手紙、エペソ人への手紙、ピリピ人への手紙、コロサイ人への手紙、テサロニケ人への第一・第二の手紙、テモテへの第一・第二の手紙、テトスへの手紙、ピレモンへの手紙が含まれる。これらの手紙及び使徒行伝は、第二世紀末に、多教の認可により新約の第二組とされた。しかし、ヘブル人への手紙に関しては見解の違いが依然見られた。

3. その他の書巻

その他の書巻は、ヘブル人への手紙、ヤコブの手紙、ペテロの第一・第二の手紙、ヨハネの第一・第二・第三の手紙、ユダの手紙、ヨハネの黙示録等計 9 巻である。これらの 9 巻は長い間議論を伴い、第二世紀末に新約聖書の大部分の作品が「正典」と見なされたが、紀元 397 年に第三回カルタゴ会議（Council of Carthage）にて正式に全 27 巻が新約聖書として批准された。

(三) 聖書の作者

<旧約聖書>

旧約の作者はイザヤの如き預言者（ルカ 4:17～19）、ダビデの如き王（マタ 22:42～43）、ダニエルの如き政治家（ダニ 6:1～3、マタ 24:15）、アモスの如き農夫（アモ 7:14～15）等約 30 名、すべてヘブル人である（ロマ 3:2 参考）。旧約の原文は、アラム語（古代シリア語）で書かれたエズラ 4:8～6:18、7:12～26、エレミヤ 10:11、ダニエル 2:4 下半句～7:28 を除く全てがヘブル語で書かれた。

<新約聖書>

新約の作者はペテロとヨハネの如き漁師（マタ 4:18～22）、ルカの如き医者（コロ

4:14) マタイの如き収税人(マタ 9:9)、パウロの如き律法学者(使徒 22:1~3)等約 9 名で、ギリシャ語によって書かれた。

(四) 神が御言を伝える方法

聖書の著者は約 40 名いたが、彼らは神によって 40 本の筆として使われただけに過ぎない。彼らは聖霊の感動によって神の御旨を世に知らせた。下記は神が彼らに御言を伝えた様々な方法である：

神は自らの指で十戒を 2 枚の石に書き、モーセに渡された(出エジ 31:18、申 10:2、4)。

神は直接モーセと対面し、モーセに色々な指示を出した(民 12:7~8)。

神は預言者たちに静かな細い声で直接話をした(列王上 19:12~18、サム上 3:10~14)。

神は御使いを遣い彼らに神の御旨を表した(ダニ 9:21~23、ヘブ 2:2、使徒 7:38,53)。

神は夢と幻で彼らに啓示した(民 12:6、黙 1:2,11,19)。

聖霊によって彼らを感動させ、神の御旨を表した(サム下 23:2、II ペテ 1:21、ガラ 1:12、エペ 3:5)。

(五) 正典と外典

正典(Cannor)とは、旧新約聖書合わせて 66 巻(旧約 39 巻、新約 27 巻)のこと。外典(The Apocrypha)とは、旧約と新約の間のもので、その多くは純正な道理ではなく異端な内容であって、「外典」及び「経外書」と呼ばれている。Septuagint(七十人訳ギリシャ語旧約聖書)には聖伝の他、14 巻の外典が加わり、また、Vulgate(ラテン語のウルガタ聖書)には、7 巻の外典が加わった。これらの外典はプロテスタント正典には含まれないが、ローマカトリック教はこれを「正典」と同様に扱っている。

(六) 聖書でもっとも有名な訳本

七十人訳ギリシャ語旧約聖書(Alexandrian Version Septuagint): この訳本はエジプトのフィラデルプス王(紀元前 285~247)の主催の下、ギリシャ語を話すユダヤ人の為に、ユダの各部族から 6 名ずつ、計 72 名によって旧約聖書をヘブル語からギリシャ語に翻訳したものである。また聖徒伝に 14 巻の外典が加えられた。

The Vulgate Version(ラテン語大衆訳本): この訳本は古代最も著名な学者 Jerome 氏によって、紀元 390 年から 405 年まで、15 年間かけて翻訳されたものである。このラテン語訳本には、旧新約全巻以外に、「旧約続編」(外典)が追加された。

Authorized Version 又は King James Version: これは英国王ヤコブ 1 世の許可のもと、54 人の学者により 7 年間を掛けて、1611 年に完成した権威的な訳本である。この訳本は厳選された単語を使用し、本文の意味を忠実かつ完全、正確に翻訳した。この訳本は聖書の研究においては大変大きな役割を果たしている。この訳本は当時のイギリス英語で書かれた。

米国標準訳本(American Standard Version)。

基礎英語訳本(Basic English Version): 簡単な文字を使い、通俗的で分かりやすい現代アメリカ英語で書かれており、初めて英語を学ぶ人に向いている。一方、本文の意味が忠実に反映されていない為、聖書研究における価値はあまりなく、公な礼

拝で使用する事は認められていない。

新英文訳本 (New English Version): これはイギリス人が Authorized Version が難しいということで新しく翻訳したものである。1961 年に現代英語で新約を出版した。

景教訳本: 景教 (紀元 635 ~ 650 年) に中文に翻訳した訳本があると伝えられているが、見つかっていない。

マリシュン訳本: イギリス人ロバートマリシュン氏が広州で原本に基づき、1813 年に新約の翻訳を完成させ、3 年後にミニヤン氏の助けを得て、1823 年にすべての中文訳本を完成させた。

連合訳本 (Union Version): 1890 年に牧師会議で三種訳本 (難しい文章・簡易文章・北京語) を翻訳することが決まった。二種類の文章の翻訳を終えたとき、この二種類にはあまり区別が無いことが分かったため、簡易文章と北京語の 2 種を出版した。

呂振中新約新訳修正版: これは呂振中氏が原文に基づき、現代の話し言葉に翻訳した新約聖書である (1952 年に完成)。直訳の為、内容はとても原本に近く、聖書を勉強するにあたって参考価値がある。

聖書の章・節: 最初、聖書は章ごとや節ごとに分けられていなかった。紀元 1236 年にカトリック教会が聖書を全部章ごとに分け、1660 年にはユダヤ教のラビが旧約をさらに分節し、その後、フランスの印刷屋が新約に分節を行った。新旧両約合計 1,189 章 (旧約 929 章、新約 260 章) あり、31,173 節ある。

二．聖書の真実性

(一) イエスは聖書を証明した

1．主イエスによる聖書の作者の証し

モーセの著作を挙げる (マタ 8:4、19:8、ルカ 16:31、24:27、マル 7:10、ヨハ 5:45 ~ 47、7:22 ~ 23)。

詩篇の作者を引用する時にダビデの名を挙げる (マタ 22:42 ~ 43)。

イザヤの話しを引用 (マタ 13:14 ~ 15、マル 7:6、ルカ 4:17 ~ 19)。

ダニエルが書いたものを引用 (マタ 24:15)。

諸預言者の著作を認める (ルカ 24:27)。

2．聖書が神の言葉と認めた

聖書を引用する時に言われた、「神は言われた。「父と母とを敬え。」」(マタ 15:4)

「死人の復活については、神があなたがたに言われた言葉を読んだことがないのか……」(マタ 22:31 ~ 32)。

旧約の律法をまとめて「神の戒め」としている (マル 7:8 ~ 9)。

ダビデのうたは聖霊の感動によって書かれたものと確めた (マタ 22:42 ~ 43、II サム 23:2 参考)。

3．旧約聖書の出来事を証明

天地万物の創造 (マタ 19:4 ~ 5、創 1 ~ 2 章参照)。

ノアの時代の洪水（ルカ 17:27、マタ 24:37～39、創 6～8 章参照）
ソドムとゴモラの崩壊（ルカ 17:29、マタ 10:15、11:23～24、創 19:12～29 参照）
ロトの妻が塩の柱になった（ルカ 17:32、創 19:26 参照）
しばの中の炎のうちに神がモーセに現れた奇跡（マル 12:26、出エジ 3:2～6 参照）
神が荒野でマナを降らせた（ヨハ 6:31～35、出エジ 16 章参照）
モーセが荒野で青銅の蛇を上げた（ヨハ 3:14、民 21:8～9 参照）
ソロモン王の栄華（マタ 6:29、列王上 10:14～29 参照）
アベルとザカリヤが殺された（マタ 23:35、創 4:3～9、列代下 24:20～22 参照）
ナアマンのライ病が清められた（ルカ 4:27、列王下 5:1～14 参照）
サレプタのやもめがエリヤ預言者を接待したため、少しの油と一握りの小麦粉が絶えなかった（ルカ 4:25～26、列王上 17:8～16 参照）
ヨナは三日三晩大魚の腹の中にいた（マタ 12:39～40、ヨナ 1:17 参照）

（二）預言が成就されたことによって、聖書の信頼性を証明した

「預言」とは神が後に起きることを、預言者を通じて示めた言葉のこと。神はすべてを知り、すべてを把握し、話したことに對し必ず実現させる。聖書中の預言は、時がくれば全て成就する。これによって聖書は神の言葉であることが証明される（イザ 46:9～10、箴 30:5～6）。

以下は成就された預言である。

1. イスラエル人に関する預言

年老いたアブラハムには子がいなかったが、神は彼に子孫が大国になると約束した（創 15:1～5）。

実現：アブラハムは 100 歳の時、果して一人の子（イサク）を授けられ、イサクから多くの子孫ができ、大国となった（創 21:1～7）。

イスラエル人が外国に寄留し、奴隷となり、その後解放されることを預言した（創 15:13～14）。

実現：ヨセフの時代イスラエル人はエジプトに移り住み、その後エジプト王の迫害を受け、モーセの時代に解放され、故郷に帰った（創 46:1～7、26～27、出エジ 1:1～22、出エジ 12:35～41）。

バビロン王がエレサレムを攻撃し、民は捕らえられ、70 年後に帰されることを預言した（エレ 25:8～12、29:10、17:27）。

実現：王、祭司長及び民衆ははなはだしく罪を犯し、神の聖なる宮を汚した。そのため神はバビロン王に彼らを攻めさせたので、神の宮は焼かれ、つるぎを逃れた者どもは、バビロンに捕らえられた。70 年経ってから、エレミヤの口によって伝えられた主の言葉が成就するため、神はペルシャ王クロスの霊を感動させ、イスラエル人に国に帰り主の宮を建てるように命じられた。（歴代下 36:14～23）。

2 . キリストに関する預言

キリストは乙女が身ごもって産まれる (イザ7:14) 彼は「女のすえである」(創3:15)

実現：乙女マリヤは聖霊によって身重になり、キリスト・イエスを産んだ (マタ 1:18 ~ 25)。

ダビデの子孫から出る (エレ 23:5、マタ 22:41 ~ 42)。

実現：イエスは肉体の系図から見ると確かにダビデの子孫である (マタ 1:1,20)。

ベツレヘムで生まれる (ミカ 5:2、マタ 2:4 ~ 6)。

実現：神はマリヤに人口調査の登録をするためにベツレヘムへ帰らせ、そこでマリヤはイエスを産んだ。(ルカ 2:1 ~ 7)。

銀貨 30 枚で売られる (ゼカ 11:12)。

実現：イスカリオテのユダがイエスを祭司長に銀貨 30 枚で売った (マタ 26:14 ~ 15)。

手と足は刺し貫かれた (詩 22:14 ~ 18)。

実現：ユダヤ人は釘でイエスを十字架にかけた (マタ 27:22 ~ 23,26,32 ~ 35)。

死からよみがえる (詩 16:10)。

実現：イエスは果して死からよみがえった (ルカ 24:1 ~ 7、使徒 2:25 ~ 32)。

3 . イエス・キリストの預言

自分の受難場所を預言 (ルカ 13:33、マタ 16:21)。

受難時 (マタ 26:18、16:21)。

彼を裏切る人 (マタ 26:20 ~ 25)。

受難の様子 (ヨハ 3:14、12:32 ~ 33)。

三日目に必ず復活する (マタ 12:40、16:21、17:22 ~ 23)。

上記五つの預言は全てイエスの預言通り成就された。

エルサレムが壊される (マタ 24: 1 ~ 2、ルカ 19:41 ~ 44)。

エルサレムは西暦 70 年にローマの兵隊に攻撃され焼き尽くされた。

天に昇った後聖霊がくだると約束された (使徒 1:4 ~ 5、ヨハ 16:7、14:18)。

主の約束通り、昇天してから 10 日目、即ち五旬節の日に聖霊がくださった (使徒 2:1 ~ 4) 。これによって、主が昇天なされたことが証明され、人々は主の約束は信頼できるとますます信じるようになった (使徒 2:32 ~ 36) 。

彼は弟子たちを天国に迎えるためにご再臨することを預言した (ヨハ 14:1 ~ 3、マタ 24:29 ~ 31、25:31 ~ 46) 。

主のご再臨はまだであるが、過去の預言は実現している為、私たちは主がこの世を終わらせ、信者たちを栄えある天国に迎えてくれることを信じよう (黙 22:20) 。

三 . 聖書の働き

キリストについて証をする (ヨハ 5:39,46、ルカ 24:27,44、使徒 10:42 ~ 43) 。

人に、救いに至る知恵を与えうる (II テモ 3:15 ~ 16、詩 119:98 ~ 99) 。

信仰の基準（イザ 8:20、使徒 17:2、ガラ 1:6～9、II ヨハ 9）
魂の食物になる（I ペテ 2:2、エレ 15:16、アモ 8:11～13）
人の性質を照らし出す（ヤコ 1:23、ヘブ 4:12）
人の心を清くする（ヨハ 17:17、詩 119:9、エペ 5:26）
人を義に導く（II テモ 3:16～17、申 17:18～20）
信者を訓戒する（I コリ 10:11、II ペテ 2:6～8）
霊的な武器になる（エペ 6:17、黙 1:16、12:11）
力の源である（ロマ 15:4、イザ 55:2、詩 19:7～8）

四．聖書の研究

- 1．全部を読み通す：創世記から黙示録まで一通り目を通して、聖書の大体の内容を把握する。
- 2．巻ごとに勉強：巻ごとの目的と教訓を考察する。
- 3．章ごとに勉強：章ごとの意義と節ごとの意味を研究する。
- 4．分類研究：例えば神、罪、救い、天国、地獄、聖霊、パプテスマ、安息日等の教義又は教訓を求める為に分類して調べる。
- 5．預表と預言の研究：旧約の預表している「影」から新約の「実体」を探し出す。あるいは預言の実現について調べる。
- 6．人物の研究：聖書中の中心人物の一生を系統的に考察し、啓発及び訓戒を得る。
- 7．歴史の研究：時代を区分し、その間の出来事をあげ、聖書の歴史を明らかにし、そして、神の計画を知る。

五．聖書を読む時の心構え

信仰を持つ（ヘブ 4:2、11:6、I テサ 2:13、箴 30:5）
聖霊に頼る：読む前、読む時、読んだ後、いつもお祈りを通して聖霊の導きを求める（ヨハ 16:13、I コリ 2:11、I ヨハ 2:27、エペ 1:17、ルカ 24:45）
清い心を備える（ヤコ 1:21、マタ 5:8）
謙虚な心を持つ（イザ 61:4、マタ 5:3、使徒 8:30～31 参照）
毎日聖書を読む習慣をつける（イザ 50:4、使徒 17:11、詩 119:147～148）
説教を聞き、質問をする（ルカ 2:46、使徒 8:34～35）
暗記して思考する（ヨシュ 1:8、詩 1:2、コロ 3:16、申 6:6～9）
御言を心に留め、それを行う（黙 1:3、箴 8:32、ルカ 11:27～28、マタ 7:24～25、エレ 42:6）
勇気を持って人に伝える（マタ 10:27、エゼ 3:1、黙 10:8～11、テト 1:3、ロマ 1:14～16）
書き加えたり、とり除いたりしてはならない（申 12:32、箴 30:5、詩 119:89、黙 22:18～19）

第二章 真の神

一、真の神の本質

(一) 神は霊である

1. 霊には肉や骨はない(ルカ 24:39)

新約聖書では神をたましいの父と呼んでいる(ヘブ 12:9)。モーセも神を「すべての肉なる者の命の神」と呼んだ(民 16:22, 27:16)。

神の霊は、肉でもなければ、物質でもなく、また原質でもない。また彼はどこにでも入られ、どこにでもおられ、どこにでも満ちておられる。(詩 139:7、8、エレ 23:23、24、エペ 1:23, 4:6)

2. 霊は肉眼では見られない

「彼がわたしのかたわらを通られても、わたしは見ない。彼は進み行かれるが、わたしは彼を認めない。」(ヨブ 9:11、参考:ヨブ 23:3、8、9)。

「神は人間の中でだれも見つた者がなく、見ることもできないかたである。」(1テモ 6:16、参考:ヨハ 1:18、ヘブ 11:27)。

「御子は、見えない神のかたちである。」(コロ 1:15)。

3. 霊は自ら現れる

霊は肉眼では見えないものだ。聖書はこう言う、人は神を見るが、それは彼が現した形を見るに過ぎない(出エジ 24:9、10, 33:18~23、創 18:1~3)。

旧約聖書の中ではたびたび主の使いの名で現れている(創 16:7~10、13, 21:17~19, 22:11、12、士師 2:1、2)。

神は霊であるから、礼拝する者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである(ヨハ 4:24)。また神の像を刻んでそれを拝んではならない(出エジ 20:4、5、23、使徒 17:24~25)。

(二) 有って有り、永遠に有る

1. 有って有る

全て造られたものには必ず源があるが、全てのものの源は神である(ヘブ 2:10)。

神は全ての因果の大本であり、始まりのない生きた霊であるから、有って有る者と呼ぶ(出エジ 3:14)。

神は有って有る者であるから生涯の初めがなく(ヘブ 7:3)、全ての初めである(イザ 44:6、黙 1:8)。

2. 永遠に有る

永遠に有るということはつまり終わりもない(ヘブ 7:3)。聖書はこう言う:神はただ一人不死を保つかたである(1テモ 6:16)。永遠の神(創 21:33、申 33:27)。とこしえの神(イザ 40:28)。とこしえに住む者(イザ 57:15)。不朽の神(ロマ 1:23)。神のよわいはよるず代に及ぶ(詩 102:24~28)。世々の支配者(1テモ 1:17)。

真の神は永遠におられ、信者に永遠の慰めと（IIテサ 2:16）、永遠の命（Iテモ 6:12）、永遠の栄光（IIコリ 4:17, 5:1）を賜る。それゆえ、全ての栄光、尊さは真の神に永遠に帰すのである（ロマ 1:25, 11:36、ガラ 1:5、エペ 3:21）。

（三）唯一無二である

1. 聖書は神は唯一だと示している

主は我々の神、唯一の主である（申 6:4、マル 12:29）。

ただひとりの神（Iテモ 2:5、Iコリ 8:6、ヤコ 2:19）。神はひとり（ガラ 3:20、ロマ 3:30）。唯一の神（ユダ 24、ヨハ 17:3）。父はただ一人（マタ 23:9、マラ 2:10）。

2. 他の神はいない

十戒は示している「真の神のほか、なにものをも神としてはならない」（出エジ 20:3、参考：申 5:7、イザ 45:5）。

神は言われた「わたしのほかに神はない」（申 32:39、列王上 8:60）。

二、真の神の偉大さ

（一）全てを知っておられる神

聖書には真の神は全てをご存知であると示している（Iヨハ 3:20、ロマ 16:27）。

1. 神は人の行いをご存知である（詩 139:3）

人の行為は神の御前では隠すことができない（エレ 16:17、箴 15:3）。

神はアカンが滅ぼすべき奉納物を取ったのを見ていらっしまった（ヨシュ 7:10～12、16～26）。

神はダビデが隠れた所で罪を犯していたのを見ておられた（サム下 12:12、参考：11:2～21）。

神はコルネリオの善行を記念された（使徒 10:1～4）。

神はヤコブの苦しみをご存知であった（創 31:38～42、23、24）。

2. 神は人の言葉をご存知である（詩 139:4）

神は人の言葉によって賞罰を与える（マタ 12:36、37）。

スリヤの王が寝室で語られる言葉も聞いていらっしまった（列王下 6:8～12）。

ゆえに、舌を制して言葉を多く語らないべきである（ヤコ 1:26, 3:2、箴 10:19）。

偽りの言葉、罵る言葉、人を裁く言葉は決して語ってはならない（黙 14:5, 22:15、Iコリ 6:10、マタ 7:1、ロマ 2:1, 2）。

3. 神は人の心の思いをご存知である（詩 139:2）

神はすべての心を探られる（歴代上 28:9、使徒 15:8）。

サラが神の約束されたことを心の中で笑ったのを神はご存知であった（創 18:10～15）。

神はアビメレクの心が清いことをご存知であった（創 20:6）。

心が正しくないのは罪悪である（Iヨハ 3:15、マタ 5:28、使徒 8:21）。

あなたの心を守りなさい、神が心を見られるからである（箴 4:23、サム上 16:7）。

4. 神は全てをご存知である

神はもろもろの星の数を定め、すべてそれに名を与えられる（詩 147:4、イザ 40:26）。

被造物は神の御前においては全て裸であり、あらわである（ヘブ 4:13）。

神は未来のことを示すことができる（イザ 46:9、10）。

神の智恵と知識は測り知れない（詩 147:5、ロマ 11:33）。

神の全き智恵は審判を全く正しくさせる（ロマ 2:16、エレ 32:19）。

(二) 万能の神

主は言われた、「人にはそれができないが、神にはできないことがない」（マタ 19:26）。主にとって不可能なことがあるだろうか（創 18:14、エレ 32:17、27）。神は全能者であり（ヨブ 37:23、黙 11:17）、また全能の神と呼ばれる（創 17:1）。

1. 万物について

過去に万物を創造された（ヘブ 11:3、創 1:1）。

万物は主の仰せにより堅く立って今日に至っている（詩 119:91、II ペテ 3:7）。

かつて日と月に一日の間止まるように命じられた（ヨシュ 10:12～14）。

ロバの口を開かせ、バラムに向かって話させた（民 22:28～30）。

大きな魚にヨナを呑み込ませ、三日後に彼を吐かせた（ヨナ 1:17、2:10）。

寡婦のかめの粉と瓶の油を尽きさせなかった（列王上 17:14～16）。

20個のパンで100人のお腹を満たした（列王下 4:42～44）。

2. 人類について

ご自分の御旨を世の人々に行った（ダニ 4:35）。

軍勢の長ナアマンのらい病を清められた（列王下 5:14）。

スリヤ軍の目をくらました（列王下 6:18～20）。

100歳のアブラハムに男の子を授けた（創 21:2～5、18:10～15）。

死人を生き返らせた（列上 17:17～23、列下 4:32～37）。

40年もの間、イスラエル人たちの着物をすり切らすことなく、また足も腫れさせることはなかった（申 8:4、ネへ 9:21）。

エリヤとエノクに死を通らせずに昇天させた（列王下 2:11、創 5:24）。

3. その他について

天使は神の命令に聞き従う（詩 103:20）。

神にはサタンをつなぎおく力がある（黙 20:1～3）。

全ての人は神の前においては虚無に等しい（イザ 40:15～17、22、23、ヨブ 26:14）。

神の大能は測り知れない（ヨブ 11:7～11、ロマ 11:33）。

(三) どこにでもおられる神

「主は言われる、私は天と地とに満ちているではないか」（エレ 23:23、24）。ダビデ王は言った「私はどこへ行って、あなたのみ前をのがれましょうか。」（詩 139:7、8）。

1. すべてのものの上にある（エペ 4:6）

主はその玉座を天に堅く据えられる（詩 103:19）。

神は言われる、「私はいと高き聖なる所に住む」と（イザ 57:15, 66:1）。

主は高き所に座し、遠く天と地とを見下ろされる（詩 113:5、6）。

神は近づきたい光の中に住まわれる（Iテモ 6:16）。

2. すべてのものを貫く（エペ 4:6）

神はあなたの前におられる（イザ 52:12、ミカ 2:13）。

神はその民を囲まれる（詩 125:2）。

神は言われる、「私はあなたがたの間に入り出す」と（IIコリ 6:16）。

神は全てのものの中に満ちておられる（エペ 1:23）。

3. 人々の内に住まわれる

神は言われた、私の霊をあなたがたのうちに授けよう（エゼ 36:27）。

主は聖霊が使徒とともに永遠にとどまることを約束された（ヨハ 14:15～17）。

神は謙虚な人とともにおられる（イザ 57:15）。

神がお与えになった聖霊によって、神が私たちの内におられることを知る（Iヨハ 3:24, 4:13）。

三、真の神の徳性

（一）聖潔の神

1. 聖書の明示

神は言われる：「あなたがたは清くなりなさい、私は清い者であるから」（レビ 11:44）。

ヨシュアは言った：「主は聖なる神であり、ねたむ神である」（ヨシュ 24:19）。

「神を崇めよ、主は聖である」（詩 99:5）。

モーセは言った：神は聖にして栄えあるもの（出エジ 15:11）。

神は光であって、少しの暗いところもない（Iヨハ 1:5）。

神が臨まれる所は聖地である（出エジ 3:5、ヨシュ 5:15）。

神の目には、天も清くない（ヨブ 15:15）。

2. 不潔に対して心を痛め厭われる

神は断じて悪と不義を行うことはない（ヨブ 34:10）。

神の目は不義や悪を見られない（八バ 1:13）。

不義を行う者は、神に憎まれる（申 25:16、箴 15:9、26）。

神は人の悪が地にはびこったのを見て心を痛めた（創 6:5、6）。

イスラエル人は淫乱によって罰を受け、24000人が死んだ（民 25:9～11）。

3. 子が清くなることを切望する

神は言われた、あなたがたは私に対して聖なる国民となる（出エジ 19:6）。

神がわたしたちを召されたのは清くなるためである（Iテサ 4:7）。

あなたがた自身も、あらゆる行いにおいて聖なる者となりなさい（Iペテ 1:15、16）。

霊、心、体ともに清くなければならない（Iテサ 5:23）。

真理に対する信仰と御霊による清め（テサ 2:13）。

4. 罪人を拒絶する

人は清くなければ、主を見ることはできない（ヘブ 12:14、参考：マタ 5:8、詩 24:3、4）。

罪人の求めることを聞き入れない（イザ 59:1、2）。

汚れた所には住まわれない（参考：申 23:9～14、マタ 21:12、13）。

一人の罪によって、神は皆と共におられなくなる（ヨシュ 7:11、12、25）。

罪人は正しい者の集いに立つことはできない（詩 1:5）。

(二) 公義の神

1. 聖書の明示

神は言われた、私は義なる神である（イザ 45:21、ヨハ 17:25）。

その中にいます主は義であって、不義を行われない（ゼパ 3:5）。

義と公平はみくらの基である（詩 89:14、97:2）。

主はそのすべての道に正しい（詩 145:17、黙 15:4）。

2. 立法の正しさ

神のさばきは真実であって、ことごとく正しい（詩 19:9、119:172）。

いずれの大いなる国民にこのすべての律法のような正しい定めとおきてとがあるであろうか（申 4:8）。

あなたは公義とこの上ない真実とをもって、あなたのあかしを命じられました（詩 119:138）。

戒めは聖であって、正しくかつ善なるものである（ロマ 7:12）。

あなたの正しいおきてのすべてはとこしえに絶えることはありません（詩 119:160）。

3. 選民に公義を行わせる

神は人に公義と慈しみと謙虚を行うことを要求している（ミカ 6:8、マタ 23:23）。

公義、敬虔、信心を追求しなければならない（テモ 6:11、テモ 2:22、イザ 56:1）。

審判官は正しく審判しなければならない（申 1:16、17、16:18～20、レビ 19:15）。

富んでいる者を重んじて貧しい者を軽んじたりしてはならない（ヤコ 2:1～4）。

正義は人を救い出して、死を免れさせる（箴 10:2、12:28）。

国の位は正義によって堅く立つ（箴 16:12, 25:5, 14:34）。

4. 義と公平をもってさばく

神は公義に従って万民を審判する（詩 96:10, 98:9, 9:4, 8）。

罰すべき者を決してゆるさず（出エジ 34:7）。

神の裁きは正しい（詩 119:75）。

口から出る言葉は全て正しい（箴 8:8）。

神は、おののちに、そのわざに従って報いられる（ロマ 2:6、黙 22:12、創 18:25）。

5. 罪があれば必ず罰を受ける

罪を犯す者には怒りと激しい憤りが加えられる（ロマ 2:8、9、哀 1:18）。

罪を犯した魂は必ず死ぬ（エゼ 18:4、ダニ 9:7~14）。

アピメレクとシケムの人々は報いを受けた（士 9:53~57）。

レハベアムは神を捨てたのでシシャクの手にわたされた（歴代下 12:1~7）。

主はすべてしえたげられる者のために正義と公正とをおこなわれる（詩 103:6）。

終わりの日に悪人は地獄に投げ入れられる（黙 21:8、マタ 13:36~42、テサ 1:6、7）。

6. 義を行えば賞を得る

善を行う者には光栄とほまれと平安とが与えられる（ロマ 2:10、11、列王上 8:32）。

神は善行を行う者を忘れられない（ヘブ 6:10、使徒 10:4）。

専ら神に従ったカレブに良き報いを与えられた（民 14:23、24、ヨシュ 14:6~14）。

義の道を伝えたノア一家を守られた（ペテ 2:5、創 7:1）。

私達は善を行うことに、うみ疲れてはならない。たゆまないでいると、時がくれば刈り取るようになる（ガラ 6:9）。

末の日に義人は天国に入り、義の冠を得る（テモ 4:8、ロマ 2:7、マタ 13:43）。

(三) 慈愛の神

1. 聖書の明示

神は愛なり（ヨハ 4:8、16）。

「主、あわれみあり、恵みあり、いつくしみと、まこととの豊かなる神」（出エジ 34:6、詩 86:15）。

主はそのすべてのみわざに恵みふかい（詩 145:17）。

主のいつくしみはとこしえに絶えることがない（詩 118:1~4、エレ 31:3）。

2. 神はどういう者を愛するか

神を畏れる者を愛する

主はおのれを畏れる者とそのいつくしみを望む者とをよみせられる（詩 147:11）。

私（イエス）を愛する者は、私の父に愛されるであろう（ヨハ 14:21、23、16:27、17:23）。

神を畏れる者は大いなる恵みを施される（詩 31:9、145:19、103:17）。

私（神）を愛し私の戒めを守る者は、その慈しみを千代に至るまで施される（出エジ 20:6）。

世のすべての人を愛す

神は世の人を愛す（ヨハ 3:16）。

神はすべての人が救われることを望んでおられる（テモ 2:4）。

神は一人も滅びることがないことを望んでおられる（ペテ 3:9）。

主はすべてのものに恵みがある（詩 145:9、マタ 5:45）。

3. 愛の現れ

顧み

人が必要な食物を与えて下さる（詩 23:1、創 48:15、出エジ 16:1～4）。

瞳のように民を守られる（申 32:10）。

ヤコブをラバンの手から救った（創 48:16、31:24、42）。

イスラエル人をエジプト兵の追撃から救った（出エジ 14:19、20）。

主は終日彼らを守られた（申 33:12）。

彼らが苦難の中、神も苦難を共にし彼らを救われた（イザ 63:9）。

懲らしめ

主は愛する者を訓練する（ヘブ 12:6）。

主は言われる、私は彼について語るごとに、なお彼を忘れることができない（エレ 31:20）。

主の心はイスラエルの悩みを見るに忍びなくなった（士 10:10～16）。

神は心から人の子を苦しめ悩ますことをされない（哀 3:32、33、ヨブ 37:23、エレ 29:11）。

懲らしめを受け入れる者は聖潔と平和の実を結ぶ（ヘブ 12:9～13、申 8:2～7）。

ひとり子を犠牲にされた

人がその友のために自分の命を捨てること、これよりも大きな愛はない（ヨハ 15:13）。

神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった（ヨハ 3:16、マタ 20:28）。

キリストは我々のために死なれた。これは神の愛の最大の現れである（ロマ 5:8、ガラ 2:20、ヨハ 3:16）。

罪を赦された

主はあなたのすべての不義をゆるす（詩 103:3、4、ミカ 7:18～20）。

イエスを信じることによって罪が赦され価なしに義とされる（ロマ 3:21～26）。

人々にイエス・キリストによって神の子たる身分を授ける（エペ 1:5、6、ヨハ 3:1）。

神は天上でもろもろの祝福をもって私達を祝福してくださる（エペ 1:3、ペテ 1:3、4）。

神の愛は無限

雌鳥が雛をかばうかの如く（マタ 23:37）。

牧者が羊を愛護するかの如く（詩 23:1～6、ヨハ 10:11、イザ 40:11）。

父親が子供を憐れむように（詩 103:13、ルカ 15:11～32）。

父母の愛に勝る（詩 49:15、27:10）。

神の愛は人知では測り知れない（エペ 3:18、19）。

（四）真実なる神

1．聖書の明示

真実なる神、偽りはない（申 32:4）。

神は信実なかたである（コリ 1:9、10:13）。

主のすべてのみわざは真実である（詩 33:4）。

神は永遠に真実を守る（詩 146:6、117:2）。

2．言葉は真実

偽ることのあり得ない神（テト 1:2、ヘブ 6:18）。

神は人のように偽ることはない（民 23:19）。

神のくちびるから出た言葉を変えることはない（詩 89:34）。

神のおきては真実である（詩 19:9、119:142、151、160）。

神の言葉は炉で練り、七たびきよめた銀のようである（詩 12:6、119:140）。

3．約束を守られる

神は、神を愛し、その命令を守る者には、契約を守り、恵を施して千代に及ぶ（申 7:9）。

神は神とアブラハムの立てた契約を守り、イスラエル人をエジプトから救い出し、カナンの地へ帰還させられた（出エジ 2:24、25、レビ 26:42）。

神はダビデとの契約を守り、アタリヤが王室を滅ぼした時にヨアシを守られたので全ての王室が滅びることはなかった（列王下 11:1、2）。

ダビデの子孫がとこしえに地の王たちのうちの最も高い者とする約束は、イエスが永遠の王になったことによって成就された。イエスは肉体においてはダビデの子孫である（詩 89:27～37、ヘブ 1:8、マタ 1:1、ガラ 3:15、16）。

神の約束はことごとく真実である（コリ 1:20）。

故に信徒の告白する望みを、動くことなくしっかりと持ち続けるべきである（ヘブ 10:23、コリ 1:9）。

4．頼れる

神は信実であるからあなたがたを試練に合わせると同時に、のがれる道も備えて下さるのである（コリ 10:13、テサ 3:3）。

私を苦しめられるのは真実をもってである（詩 119:75）。

自分の思いわずらいを、いっさい神に委ねるがよい（ペテ 5:7、詩 55:22, 37:5）。

神により頼む者は、失望に終わることがない（ロマ 9:33、箴 30:5）。

四、真の神と世界

有って有る者、唯一の真の神は天地の主である（使徒 17:24、25）。古の時に万物を創造され今もなお全てを治めておられ、救いを行い、将来は必ず最後の裁きを行われる。

（一）万物を創造された

1. 聖書の指示

はじめに神は天と地とを創造された（創 1:1）。

万物 - 天にあるもの、地にあるもの、見えるもの、見えないものにかかわらず、全てのもは神が創造された（ヨハ 1:1~3、コロ 1:16）。

すべてのものを造られたかたは神である（ヘブ 3:4）。

創造に関わる重要聖句：（出エジ 20:11、ネヘ 9:6、イザ 44:24、エレ 10:12、黙 4:11。創造の詳細は創一、二章）。

2. 創造の目的

（1）神において

神の大いなる知恵が現れる（エレ 51:15、参考：詩 104:24, 136:5、箴 3:19）。

イエスを通じて万民を救われる、これは更なる神の大いなる知恵である（エペ 3:9~11）。

神の大能が現れる（詩 145:10~12:参考：ロマ 1:20、詩 19:1）。

神の栄えが現れる（詩 8:1、参考：黙 4:11、詩 19:1）

神の名をもってとなえられる者は神の栄光のために造られたのである（イザ 43:7、参考：イザ 60:21、エペ 1:5、6、詩 86:9）。ゆえにクリスチャンは全て神の栄光のためにすべきである（コリ 6:20, 10:31）。

（2）人に対して

地は人のすみかに造られた（イザ 45:18、詩 115:16）。

天の光は昼夜を分け、しるしのため、季節のため、日のため年のために造られた（創 1:14~17）。

野菜、果物、動物等は人々の食べ物として与えられた（創 1:29, 9:3、参考：テモ 4:4, 6:17、創 2:16）。

小羊はあなたの衣料を出す（箴 27:26）。

天使でさえ救いを受け継ぐべき人々のため、つかわされたものである（ヘブ 1:14）。

神は人に万物を治めさせた（詩 8:4、6、創 1:26、28、参考：創 2:15、19、20）。

3. 創造の方法

神の御旨による（黙 4:11）。

神の言葉による（ヘブ 11:3、詩 33:6、9、148:5、参考：創 1:3、6、9、14、20、24）。

神の霊による（創 1:2、ヨブ 26:13、詩 104:30）。

無から万物を創られた（ヘブ 11:3）。

ただ神だけがよろずの物を造られた（イザ 44:24、参考：イザ 45:12、40:13、ヨブ 9:8）。

6日の間に造られた（出エジ 20:11、創 2:1～3）

一日目：光と闇とを分けられた（創 1:3～5、参考：イザ 45:7、コリ 4:6）。

二日目：空気と大空を造られた（創 1:6～8、イザ 40:22）。

三日目：青草、野菜、果樹を造られた（創 1:9～13、参考：詩 104:14）。

四日目：太陽、月、星を造られた（創 1:14～19、参考：詩 8:3、104:19、136:7～9）。

五日目：魚、鳥を造られた（創 1:20～23、参考：詩 104:25、26）。

六日目：昆虫、家畜、けもの、人を造られた（創 1:24～31、参考：エレ 27:5、創 5:1、9:6）。

七日目：創造の作業は全て終えられ、この日を安息なる聖日と定められた（創 2:1～3、参考：出エジ 20:8～11、34:21）。

(二) すべての物を統べ治める

真の神は万物を創造され、全て造られたものを統治される。聖書は言う「主はその玉座を天に堅くすえられ、そのまつりごとはすべての物を統べ治める」（詩 103:19、参考：詩 135:6）。

1. 宇宙に対して

神はその力ある言葉をもって万物を保っておられる（ヘブ 1:3）。

現在の天地はなおその御言によって保存され、審判の日に火で焼かれる時までそのまま保たれている（ペテ 3:7、詩 119:91）。

季節を不変のものとした（創 8:22、参考：エレ 33:20、25、詩 74:17）。

海の境を定められた（エレ 5:22、ヨブ 38:8～11、参考：詩 104:9、箴 8:29）。

風を神の使者とされた（詩 104:4、参考：詩 107:25、29、135:7）。

強い東風をもって海を退かせ、イスラエル人にそれを渡らせた（出エジ 14:21）。

風をもってウズラを海から運んでこられた（民 11:31）。

雨を時に従って降らせる（エレ 5:23、24、参考：ヨブ 38:25～28、詩 147:7、8）。

天から雨を降らせ、実りの季節を賜った（使徒 14:17、参考：ヨブ 5:9、10、イザ 30:23、詩 65:9、10）。

飢饉と豊作は共に神の権威の下にある。神ははっきりあらかじめこう言われた：エジプトに七年の豊作があり、その後七年の飢饉が必ず来るであろう（創 41:25～32）。また、3年半降らなかった雨を降らせられた（ヤコ 5:17、ルカ 4:25、列王上 18:41～45）。

天の父は義人にも不義の者にも雨を降らせられる（マタ 5:45）。

偽りの神は雨を降らせることはできない（エレ 14:22）。

神が雨を降らせるのは、懲らしめのため、あるいはいつくしみのためである（ヨブ 37:11～13）。例として、四十日四十夜の大雨でノア一家に救いを得させ、不信な世の人には滅びに遭わせられた（創 7:11、12、21～23）。

百合の花と全ての植物はみな神が守り管理されている（マタ 6:28～30、ヨブ 38:26、27）。

2．鳥や獣に対して

「主よ、あなたは人と獣とを救われる」（詩 36:6）。

神は獣や鳴く小がらすにも食物を与えられる（詩 147:9、参考：詩 104:14、20～22、ヨブ 39:8）。

山の谷に泉をわき出させ、山の間流れさせ、獣たちに飲ませられた（詩 104:10、11）。

山羊、岩だぬき、大鷹などのためにすまいを用意された（詩 104:18、ヨブ 39:6、27、28）。

主は言われた「空の鳥を見るがよい。まくことも、刈ることもせず、倉に取り入れることもしない。それなのに、あなたがたの天の父は彼らを養っていて下さる。あなたがたは彼らよりも、はるかにすぐれた者ではないか。」（マタ 6:26）。父の許しがなければ、すずめの一羽も地に落ちることはない（マタ 10:29）。

3．国家に対して

国は主のものであり、主は万国を統べ治められる（詩 22:28、参考：詩 66:7）。

神は国を大きくし、またこれを滅ぼし、国々を広くし、また捕え行く（ヨブ 12:23）。

彼は万民の境を定められる（申 32:8、使徒 17:26）。

神は王を廃し、また王を立てられる（ダニ 2:21、参考：ダニ 4:17、5:19～21）。

真の神は大いなる像の夢を通して、バビロンの国家の運命、後の国家の移り変りを指示し、果たしてそれらは歴史上においてことごとく成就された。（ダニ 2:27～35）。

金の頭はバビロンを指す（ダニ 2:38）。

銀の胸、銀の腕（32、39）はメデアペルシャを指す（ダニ 5:31）。

銅の腹、銅のもも（32、39）はギリシャ大国を指す。

鉄のすね（33、40）はローマ帝国を指す。

半分鉄、半分粘土の足（33、41～43）はローマ帝国が分裂してできた諸国を指す。

4．人の生涯に対して

「主よ。私はなおあなたに頼ります。あなたは私の神であられます。私の時はあなたのみ手にあります。」（詩 31:14、15）。

まだ母の胎の内にいる時

神はすでに私をご存知である（詩 139:16）。

私を聖別した（ガラ 1:15）。

一生の盛衰を定められる（創 25:21～23）。

人の歩みは神によって定められる（箴 20:24、エレ 10:23）

エレミヤはまだ生まれていない時、神は既に彼を万国の預言者とした（エレ 1:5）。

ヨセフが幼い頃、神は二つの夢を通して彼の将来が栄えることを示された（創 37:5～11）。後にその通りになりエジプト全国をつかさどった（創 41:37～43、50:19、20）。

婚姻は神が合わせられたのものである（マル 10:7～9）。

家と富とは先祖からうけつぐもの、賢い妻は神から賜われるのである（箴 19:14）。

神は予めリベカをイサクの妻として与える準備をされた。（創 24:7、44～48）。

子供は神が与えられたものである（詩 127:3、参考：創 33:5、48:9）。

イサクは神に子が授かるよう求めた。そして神はその願いを聞かれた（創 25:21）。

ハンナは子が授かるよう求め、その通りになった（サム上 1:10～20）。

富を得る力は神が賜われるものである（申 8:18、歴代上 29:12）。

イサクは百倍の収穫を得た（創 26:12、13）。

ソロモン王に飽き足りるほどの富を賜った（列王上 3:13、10:14、15、21、27）。

栄えは神に在る（サム上 2:7、詩 75:6、7）。

ダニエルは恵を得て総監となった（ダニ 1:9、17、20、6:1～3）。

モルデカイは王に次ぐ者にまでなった（エス 6:1～11、10:1～3）。

生死は神のみ手にある（申 32:39、ヤコ 4:13～15）。

神は予め人々に時代を区分し、定めて下さった（使徒 17:26、28、ヨブ 14:5）。

神は人を守られ死から逃れ得させる（詩 68:20、91:3～7、121:3～8）。

神は人の寿命を延ばすことも自由にできる（ヒゼキヤ王に15年を与えた：イザ 38:1～8。ドルカスを復活させた：使徒 9:36～41。主を恐れることは人の命

の日を多くする：箴 10:27。親孝行する者は地上でながく生きながらえる：エペ 6:1～3）。

時に将来の災いを免れるため、それは縮められ幸となる（イザ 57:1）。

「神の曲げられたものを誰もまっすぐにすることはできない（伝 7:13）、生、死、幸、不幸とは人にはそれらを決定できない。パウロは言った：「それは人間の意志や努力によるのではなく、ただ神のあわれみによるのである」（ロマ 9:16）。故に、人は神のみ手の下に、自らを低くすべきである（Iペテ 5:6）。自分の知識にたよってはならない（箴 3:5）。称賛される事があれば、栄光を全て神に帰すべきである。バビロンの王のように懲らしめを受けてから初めて悟ることのないように（詩 115:1、ダニ 4:28～37）。

（三）特別な守り

1. 悪人に対して

引き止める：人の犯罪を阻止するため、或いは悪人から神の民を救うために、いかなることにおいても人の本能のままにすることは許されない。

神はアビメレクがサラを汚すことを許さなかった（創 20:1～7）。

神はラバンがヤコブに害を与えることを阻止された（創 31:24、42）。

メシャク、アベデネゴ、シャデラクはバビロン王によって焼かれなかった（ダニ 3:19～27）。

忍耐と寛容：神は罪人に寛容で耐えておられるが罪悪には反対される。神は聖なる方であり、罪悪は神の憎むところである。事実、罪を犯した者は必ず刑罰を受けなければならない。しかし凶悪な者、無知な者に対しては時に罪悪を以って罪悪に刑罰を与え、彼らを悔い改めに導くため、一時的に忍耐をもって寛容される。（ロマ 2:3、4）。

神はすべての国々の人が、それぞれの道を行くままにしておかれた（ロマ 1:24～28、使徒 14:16）。

イスラエル人は神に聞き従わなかったため、神は彼らの欲するままにまかせた（詩 81:11～13、ホセ 4:17）。

神がいまだに世の裁きに来られないのは、人を悔い改めさせ、救いを得させるためである（Iペテ 3:7、9）。

転機：神は人の悪をことごとくご存知であり、時には直接それを阻止され、時にはそれによって神の御旨を全うされる（詩 76:10）。

パロは心を頑なにし、イスラエル人をエジプトから出させようとしなかったが、神は十度の奇跡を行い、神の名が全地に宣べ伝えられた（出エジ 9:13～17、ロマ 9:17、ネヘ 9:9、10）。

ヨセフは奴隷として売られ（創 37:28）、主人の妻に無実の罪で投獄され（創 39:19、20）、また給仕役に忘れられ、さらに二年獄に入れられたが（創

40:22, 41:1)、後にパロの前に出ることが出来、そして宰相とさせられた(創 41:37~43, 50:20)。

ユダヤ人はイエスを十字架につけたが、真の神の救いの働きを全うされることとなった(使徒 4:27, 28, 2:23, 24)。

制限：神は時に試験或いは選民の信心を鍛錬するために、サタンの試みと悪人の攻撃を許される。しかし制限を与え限度を超えることはさせない(参考：コリ 10:13)。

真の神はサタンのヨブに対する攻撃に制限を加えられた(ヨブ 1:12, 2:6)。

神はダビデをサウロの手に渡さなかった(サム上 23:14, 23:7~13, 24~29)。

主が天使に命じ疫病を広めることを許さなかった(歴代上 21:27, 参考：歴代上 21:13~26)。

イエスの時が来ていなかったのも誰もイエスを捕らえることはできない(ヨハ 7:30, 8:20)。

2. 善人に対して

助ける：「王の心は、主のうちにあって、水の流れのようだ。」(箴 21:1)。神は人の心を感動させ支配することができる。大能によって愛する人を助け、神の御旨を全うされる。

神の霊がアマサイを感動させダビデに帰させた(歴代上 12:18)。

主はすべての国民にダビデを恐れさせた(歴代上 14:17)。

神はユダヤ人に一つ心を与えて、ヒゼキヤ王が主の言葉によって命じたことを行わせた(歴代下 30:12)。

静かに見守られている：「主の使いは主を恐れる者のまわりに陣をしいて彼らを助けられる(詩 34:7)」。人は自覚がないが、イスラエルを守り居眠りさせず導かれた(ゼバ 3:17)。

幼子モーセを守り、王女の息子とならせ、王宮でエジプト人の全ての学問を学ばせ、後に神のために仕えるための準備をさせられた(使徒 7:18~22, 出エジ 2:1~10)。

イサクをゲラル人による攻撃から救った(創 26:24, 参考：創 26:12~31)。

ヤコブを全ての難から救い出した(創 28:13~15, 48:15, 16)。

道を切り開いてくださる：神は誠実な方であるから、選民が困難に遭った時、常に彼らに道を切り開いてくださる。

イスラエル人のために紅海を分け、道をつくれエジプト軍隊の追っ手から逃れさせた(出エジ 14:10~31)。

民が荒野にいる間、餓死しないようマナを降らせた(出エジ 16:1~5, 申 8:2, 3)。

不思議な力によりスリヤ人を追い払ってサマリヤ人を救われた(列王下 7:1~20)。

答えられる：主は言われた、「求めよ、そうすれば与えるであろう」（マタ7:7）。神は聖徒の祈りを聞き入れてくださることを約束される（ヨハ5:14）。彼らの願いを満たされる（詩145:19）。

神はヨシュアの祈りを聞き入れ、選民が勝利を得るまで太陽と月を止めさせた（ヨシュ10:12～14）。

エズラたちは断食の祈りをし、神に正しい道を示してエルサレムへ帰れるようにと求めた。果たしてその通り目的地に着くことができた（エズ8:21～23、31）。

エリヤは切に祈り、神に雨が降らないよう求めたため、雨は三年六ヶ月もの間、地上に降らなかった。しかし彼はまた祈ったところ神はすぐに雨を降らせた。（ヤコ5:17、18、列王上17:1、18:41～46）。

ダビデは神にアヒトペルの計略を愚かなものにするよう求めた（サム下15:31）。真の神は彼の祈りを聞き入れ、アブサロムにホシャイの計りごとを取り違いさせ、アヒトペルの良き計略を使わせなかった（サム下17:1～14、23）。

真の神による守りの働きは神の公義、誠実、慈愛によるものである（詩145:17）から、パウロは信心深くこう言った「神は、神を愛する者たち、すなわちご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さることを、わたしたちは知っている。」と（ロマ8:28）。

五．神の聖名

（一）神はいかにして自分の名を人にあらわしたか

1．神はモーセに示された（出エジ3:13～15）

神はモーセに答えて言われた：「私はあつてある者……また言われた、あなたはイスラエル人にこう言いなさい。『わたしは有る』という方が私をあなた方のところへ遣わされましたと。」神はまたモーセに言われた「…これは永遠に私の名、これは世々の私のよび名である」（出エジ3:14、15）。

「自らある者」のヘブルの語の発音は「エホバ」であり、従って神がモーセに話して言われたのは「これは私の名」である（出エジ3:15、34:5、6）。

2．イスラエル人に現れた

シナイ山にて十戒を示して言われた「私はあなたの神、主である」（出エジ20:2、5、7、11）。

3．異邦の王たちにも告げる

ペルシャの王クロスに言われた「私は主であり私のほかに神はいない」（イザ45:1、5、6）。クロスもそのように認めた（歴代下36:23、エズ1:2、3）。

（二）「神」の字の使用法

1．「神」という字はヘブル語の音は「エル」（EL）

「イスラエル」の原文は「イスラ、エル」(Isra-el)であり、これは「神と、力を争った」の意味である(創 32:28)。

「イシマエル」の原文は「イシマ、エル」、「イシマ」は「聞かれた」、「エル」は神、であるから「神は聞かれた」の意である(創 16:11)。

2. 「エロヒム」(Elohim)は「エル」の複数形である

「エル」と「エロヒム」は同義であるが単数、複数の区別がある。

「エル」は単数を表すが「エリ」(Eli)、「エラ」(Elah)などもある。

3. 「エル」と「エロヒム」は真の神と偽の神を共用する

「エル」は単数または複数であっても、旧約聖書においては主、真の神を指すだけでなく、偽の神、多くの神、及び神々の「神」をもそれを使っている。

創 31:32、レビ 19:4、申 6:14 の「神々」と「神」の原文は全て「エロヒム」である。

4. 単数と複数の使用法

原文によれば、申 7:9「主あなたの神」の「神」の字は「エロヒム」、「神にましまして」の「神」の字は「エロヒム」であるが、「信実の神」の「神」の字は区別のある字「信実」の連用の「エル」を用いている。21 節の「主あなたの神」の「神」の字は「エロヒム」、「あなた方のうちにあられる大いなる畏るべき神」の「神」の字は区別のある字「大いなる畏るべき」の連用の「エル」を用いている。

ヨシュア 22 章 22 節の原文は「エル、エロヒム、主、エル、エロヒム、主」中国語は「大能者なる神、主、大能者なる神、主、」それゆえ、原文学者はこう言っている、この聖句から証明される：「神」この字の原文の「単数」「複数」と意味は無関係であり、ただ用法の区別があるだけである。

5. 「神」の字はヘブル語の音では「ディオス」(Theos)と略され、これは「エル」と同じ使用法である。

6. 中国人の言う「上帝」とは唯一無二の真の神のことを指すのではなく、偶像の名である。例えば、「玉皇上帝」、「玄天上帝」、であるから「上帝」を真の神の名としてはならない。

(三) 主は「神」である

1. 主はアブラハムに言われた：「私は全能の神である」(創 17:1)。「神」の原文は「エル」である。

2. モーセは創世記二、三章で神のことについて言った：「主なる神」、原文は「主、エロヒム」である(創 2:4、5、7、8)。

3. 「神」の原文は「エル」、単数であれ複数であれ「神類」を指すときはこのように言われ、これは「類名」である。一つ或いは多数の偽の神を指す場合も「類名」になるが、唯一無二の真の神を指すときのみ「本名」である。英語の頭文字が特別に大文字で書かれている場合がそれであり「God」と表記されているが、

「類名」の「神」の場合は小文字で「god」と表記されている。なお、創一章以下 31 節に用いられている「エロヒム」は本名である。

4. 「エル」及び「エロヒム」は偽の神や偶像を指すこともあるが、それらは神ではない。真の神は言われた「私以外に他の神はいない」（イザ 44:6, 45:5、6）。
5. 主は世界で唯一無二の真の神である（詩 83:18、イザ 54:5、創 14:19、列王下 5:15～17）。

（四）神の品性を顕わす名

全能の神（創 17:1）

いと高き神（ヘブ 7:1～3）

人を顧みられる神（創 16:13）

真実なる神（申 32:4）

ねたむ神（出エジ 34:14）

義なる神（イザ 45:21）

聖なる神（ヨシュ 24:19）

永遠の神（創 21:33）

主（詩 16:2, 62:12、使徒 6:15、ヨハ 6:68）

万軍の主、万軍の神（イザ 1:9、雅 5:4）

（五）「イエス」は神の名である

1. 「主」は神の本名ではない

万軍の主、万軍の神（イザ 1:9、雅 5:4）

「主」の原文は「名詞」ではなく動詞の「自ら有る」の意味である。

「自ら有る」のヘブルの発音は「主」である。

神は言われた、アブラハムはかつて私の名を知らなかった（出エジ 6:3）。

もし「主」という名であったら彼は既に知っている（創 12:7、8, 13:18, 15:1、2, 22:14）。

神はヤコブにご自身の名を示さなかった（創 32:29、参考：士 13:18）。

十戒では神、主の名をみだりに唱えることを固く禁じている（出エジ 20:7）。

預言では必ず主の名によって来ると言っている（出エジ 23:20、21、詩 118:26）。

2. 神の名は「イエス」である

「イエス」はギリシャ語であり、ヘブル語ではすなわち「ヨシュア」である。

意味は「主は救い主である」。神は天使によって名づけられた。（マタ 1:12、ルカ 1:30、31）。

彼（イエス）は主の名によって来たる者である（マタ 21:9、ルカ 19:37、38）。

主（父なる神）の名は「イエス」である

イエスは言われた：「あなた（父なる神）は世から選んで私に賜った人々に、み名をあらわしました。また彼らにみ名を示されました（ヨハ 17:6、26）。

「イエス」という名は「神が私（イエス）に賜った、あなた（父なる神）の御名である」（ヨハ 17:11、12）。（参考：英、日訳）

聖書を調べると、イエスは決して「主」或いは他の別の神の名を弟子たちに知らせていなかった。ペテロが言ったように「『イエス』以外に天下の誰にもこの名は与えられていない」と。（使徒 4:12）。

「イエス」という名は「すべての名にまさる名」（ピリ 2:9～11）。これは神の真の名である。父、子、聖霊はもともと同一なのである（ロマ 8:9、ヨハ 10:30）。それゆえ、主は弟子たちに「父、子、聖霊」の名によって洗礼を授けるよう命じたが、弟子たちはただ「イエス」の名によって洗礼を授けたのである。（マタ 28:19、使徒 2:38、8:16、19:5、参考：イザ 9:6）。

神の名は唯一であり、私たちは神の名によって事を行い、神の教会において神の聖なる名を高く掲げ、神の名—イエス—を尊び、聖なるものとし、また大いなるものとすべきである。（ゼカ 14:9、コロ 3:17、申 12:5、列王上 8:43、マタ 6:9）。

第三章 天使

一、天使の来歴

1. 聖書に天使の存在が記されている

そのふたりのみ使は夕暮にソドムに着いた（創 19:1）。

エリヤがれだまの木の下に伏して眠ったが、天の使が彼にさわった（列上 19:5）。

主は言われた「彼らの御使たちは天にあって、天にいますわたしの父のみ顔をいつも仰いでいるのである」（マタ 18:10）。

キリストは天に上って神の右に座し、天使たちともろもろの権威、権力を従えておられるのである（Iペテ 3:22）。

2. 天使は神によって造られた

その天使よ、みな主をほめたたえよ。その万軍よ、みな主をほめたたえよ。これらは主が命じられると造られたからである（詩 148:2、5）。

あなた（天使）は造られた日から、そのおこないが完全であった（エゼ 28:15、13、14）。

万物は、天にあるものも地にあるものも、見えるものも見えないものも、位も主権も、支配も権威も（天使も含む）みな御子にあって造られたからである。これらいっさいのものは、御子によって造られ、御子のために造られたのである（コロ 1:16）。

天使は天地を創造される前に造られた（参考 ヨブ 38:6～7、創 3:1）。

3. 天使の名称

ケルビム（創 3:24、エゼ 11:22）。

セラピム（イザ 6:2、6）

主の使（詩 34:7、ダニ 6:22）。

御使（使 12:7～8）。

聖なる者（詩 89:5～7、ダニ 4:13）。

天の万軍（列上 22:19、黙 19:14）。

天の軍勢（ルカ 2:13）。

仕える霊（ヘブ 1:14）。

4. 天使の住むところ

“彼らは天にいる御使”。これから分かるように天に住んでいる（マタ 22:30）

仕事を終えて天に帰った（ルカ 2:13～15）。

天の万軍がそのかたわらに左右に立っている（列上 22:19、ダニ 7:10）。

天にあるエルサレムに住む（ヘブ 12:22）。

いたるところに遣わされている（マタ 18:10、詩 34:7）。

二、天使の組織

1. 天使の数

彼に仕える者は千々、彼の前にはべる者は万々（ダニ 7:10）
神はちよろずの聖者の中からこられた（申 33:2）
天にあるエルサレム、無数の天使の祝会（ヘブ 12:22、黙 5:11）
天使の数は無数（詩 68:17、参考 ヨブ 25:3、列王下 6:17）

2. 天使は組織されている

御使のかしらはミカエル（Iテサ 4:16、ダニ 12:1、ユダ 9）
位、主権、支配、権威などは天使の階級（詩 82:1、ロマ 8:38～39、エペ 1:20～21、3:10、コロ 1:16、Iペテ 3:22、ユダ 8）
わたしが父に願って、天の使たちを十二軍団以上も、今つかわしていただくことができないと、あなたは思うのか（マタ 26:53）。当時のローマ帝国の軍は一軍団六千人で組織されていた。これから分かるように、天使には組織がある。

三、天使の性質

1. 御使たちは造られた霊である（ヘブ 1:14）

天使は人の形にもなるし、他の姿にもなる（創 18:1～2、イザ 6:1～3、ヨハ 20:12）
天使は人と会話をし、食事もする（創 19:1～3、12～22）
天使は霊である為、死ぬことは無い。また、結婚しない（マタ 22:30、ルカ 20:35～36）

2. 天使は聖潔なるもの

天使は聖なる者あるいは聖なる御使と呼ばれる（詩 89:5、マル 8:38）
光の天使とも呼ばれる（IIコリ 11:14～15）
その姿は稲妻のように輝き、衣は雪のように白い（マタ 28:3）

3. 天使は謙虚で従属

天使を拝すべきではない（黙 19:10、22:8～9）
天使は神を賛美する（イザ 6:2～3、黙 5:11～12）

四、天使の役目

1. 天にて神に仕える

天使は御座のまわりで主を賛美する（黙 5:11～13）
神の前に侍り仕える（ダニ 7:9～10）

2. 権威を授かっている

天使は選ばれた者に警告し救う（創 19:12～22）
天使は神のおきてを知らせる（使徒 7:38、53）

天使は人々に神のメッセージを伝える（ルカ 2:10～11）。

天使はサタンと戦い、聖徒を助ける（ダニ 10:21、黙 12:7～8）。

天使は人間の戦争を司る（使 7:1～3、9:13～15）。

3．救いを受け継ぐべき人々に奉仕する（ヘブ 1:14）

聖徒を守られる（出 23:20、詩 34:7、91:11）。

危険から救い出す（使徒 5:17～20、12:6～11）。

聖徒を慰める（マタ 2:12～13、19～20、使徒 27:23～24）。

聖徒を天の家に連れて行く（ルカ 16:22）。

五、天使の力

1．天使は超越した力をもつ

ししの口を閉ざす（ダニ 6:21～22）。

天使は獄の鎖を外す（使徒 12:6～10）。

ひとりの主の使いが十八万五千人を撃ち殺した（列下 19:35、歴下 32:21）。

2．天使はサタンより力がある

ミカエルがペルシャの国の君を打ちやぶる（ダニ 10:13～21）。

サタンをつなぐ権威をもつ（黙 20:1～2）。

3．天使の力は神には及ばない

勇士の主の使（詩 103:20）。

天使は知恵に満ち、美のきわみである（サム下 14:17、20、エゼ 28:12）。

天使は全知でも全能でもない（ヨブ 4:18、マタ 24:30、I ペテ 1:10～12）。

天使を仲保者としてはならない。また天使を拝してはならない（I テモ 2:5、黙 19:10、22:8～9）。

六、天使と人の比較

1．天使は神に仕える者（ヘブ 1:5、14）

人は神の子（ルカ 3:38、I ヨハ 3:1）。

2．天使は娶ったり、嫁いだりすることはない（マタ 22:30、ルカ 20:35～36）

人は結婚する（創 1:28）。

3．天使は罪を犯すが許されることはない（参考 II ペテ 2:4）

全うされた義人は永遠に罪を犯さない（ヘブ 12:23、黙 3:12）。

第四章 悪魔

一、悪魔の由来

1. 本来は天使であった

神の園エデンにいた（エゼ 28:13）。

油そそがれた守護のケルブと一緒に置かれた（エゼ 28:14）。

黎明の子、明けの明星と呼ばれる（イザ 14:12）。

2. 罪のために追放された

あなたは造られた日から、あなたの中に悪が見いだされた日までは、そのおこないが完全であった（エゼ 28:15）。

あなたは自分の美しさのために心高ぶる（エゼ 28:17）。

自分たちの地位を守ろうとせず「わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、...いと高き者ようになろう」（イザ 14:13～14、ユダ 6）。

罪を犯したために神の山から投げ出された（イザ 14:14～15、エゼ 28:16、ルカ 10:18、II ペテ 2:4）。

3. 一国を成している

主は言われた「もしサタンがサタンを追い出すならば、それは内わで分れ争うことになる。それでは、その国はどうして立ち行けよう」（マタ 12:26）。これによりサタンは一国を成していることが分かる。

4. 悪魔の名称

悪魔（マタ 4:1）は「悪口を言う者」、「非難する人」、「だます人」の意で、人の前で神の悪口を言い（創 3:1、4～5）、また神の御前で人の悪口を言う（ヨブ 1:9、11、2:4～5）。また、神の御前で人を訴える（黙 12:10）。

サタン（ルカ 10:18）は「抵抗するもの」、「反対するもの」、「対抗者」の意で、考えや行動は常に真の神に対抗して正義に抵抗する（参考：マタ 16:22～23）。

年を経たへび（黙 12:9）は原文では「きらめく」、「そそのかす」という意味でもあり、ずる賢くあざむく性質がある（参考：II コリ 11:3、I テサ 3:5）。

巨大な龍（黙 12:9）：「食い尽くす」、「残忍」の意。神の子らを食い尽くそうとする（黙 12:4～5、I ペテ 5:8）。

この世の神（II コリ 4:4、I ヨハ 5:19）、この世の君（ヨハ 12:31、14:30、16:11）。

悪しき者（マタ 6:13）、敵（マタ 13:39）。

二、悪魔の性質

1. おごり

あなたは自分の美しさのために心高ぶり（エゼ 28:17）。

あなたはさきに心のうちに言った「わたしは天にのぼり、わたしの王座を高く神の星の上におき、...いと高き者のようになろう」(イザ 14:13~14)。

ごう慢な者はみな悪魔のわなに掛かり、将来悪魔と同じ審判を受ける(I テモ 3:6、I ヨハ 2:16)。

2 . 不誠実

心の中に真理が無い為、彼は偽り者の父である(ヨハ 8:44、創 3:4~5、9)。

人をだまし、擬装している(II コリ 11:3、13~15)。

不誠実な言葉や行いはすべて悪魔から出ている(マタ 5:37、使徒 5:1~3)。

3 . 汚れ

汚れた霊と呼ばれる(ルカ 4:33、黙 16:13)。

汚れた霊につかれた人は清潔を好まない(マル 5:2)。

不品行、汚れ、好色等の悪事はすべて悪魔の働きである(ガラ 5:19~21、エペ 2:2~3)。

4 . 残忍

サタンは初めから人殺しであった...先祖を殺し、アベルを殺した(ヨハ 8:44、創 2:17, 3:19, 4:8)。

至る所に戦いを挑む(黙 16:13~16)。

神の子を食い尽くす(I ペテ 5:8、黙 12:4~5)。

5 . 罪惡の源

すべて正しい者の敵(使徒 13:9~10)。

すべての罪惡はサタンから来た(ヤコ 3:14~16)。

罪を犯す者はすべて悪魔から出た(I ヨハ 3:8)。

三、悪魔の仕事

1 . 真の神に敵対する

神の創造したものを破壊する(創 3:1~6)。

神の救いを阻止する(マタ 2:13, 16:22~23)。

神のまっすぐな道を曲げる(使徒 13:10、ガラ 1:6~9)。

神の教会に抵抗する(使徒 8:1, 12:1~4)。

2 . 人を害に陥れる

人の幸福を破壊する(創 2:8~16, 3:16~24)。

人の肉体を苦しめる(ルカ 13:11~16、マタ 17:14~15、18)。

人が主を信じることを阻害する(使徒 13:10~13、マタ 23:13~14)。

信者が主から離れるように惑わす(マタ 24:11、23~24、エレ 10:14~15、マタ 4:5~7)。

四、悪魔の力

1 . 人を統制する

人は罪のために悪魔の支配下におかれた（ヨハ 8:34、Iヨハ 3:8）
全世界は悪魔の配下にある（使徒 26:18、Iヨハ 5:19）
人は自分の力で悪魔の支配から逃れられない（マル 5:2~4、ロマ 7:15~24）
しかし、悪魔が神の子に手を触れるようなことはない（民 23:23、Iヨハ 5:18）

2．不思議なことや奇跡を行う

魔術師によって奇跡を行う（出エジ 7:10~12、20~22）
偽預言者や偽キリストによって奇跡を行う（マタ 24:23~24）
不法な者によって奇跡を行う（IIテサ 2:9）
火を天から地に降らせた（黙 13:12~13）
しかし、彼らの力は真の神には及ばない（出エジ 8:16~19）

3．神の制限を受ける

一度目、サタンはヨブに害を加える事がゆるされなかった（ヨブ 1:12）
二度目、サタンはヨブの命を奪う事も出来なかった（ヨブ 2:6）
一切の権威はすべて真の神にある（マタ 6:13、ルカ 4:6）

五、悪魔の最後

1．主イエスはすでにサタンに勝つ

主は言われた「わたしはすでにこの世に勝った」（ヨハ 16:33）
主御自身の死によって、悪魔を滅ぼした（コロ 2:15、ヘブ 2:14）

2．サタンとそれに服従するものは裁きを受ける

主は彼らを裁く（IIペテ 2:4）
火と硫黄との池に投げ込まれる（マタ 25:41、黙 20:10）
悪魔は自分の残された時間が短いことを知っている（黙 12:12、参考：マタ 8:29）

六、悪魔に勝つ方法

1．主イエスにたよる

主の血にたよる（黙 12:11、コロ 1:13~14、ガラ 3:27）
主の霊にたよる（マタ 12:28、ロマ 8:13）
主の御言葉に従う（ヤコ 4:7、マタ 4:7~11）

2．へりくだる

虚栄に生きてはならない（ガラ 5:26）
人を自分よりすぐれた者としなさい（ピリ 2:3）
神の力強い御手の下に、自らを低くする（Iペテ 5:5~6）

3．誠実でうそをつかない

心にいつわりがない（ヨハ 1:47）
真実を語る（ゼカ 8:16、エペ 4:15）

人に対して誠実である（ダニ 6:4、22、ピリ 2:15）。

4．全く潔く

邪念をもたない（創 39:7~10、マタ 5:27~28）。

この世をむさぼらない（ルカ 4:5~8、Iヨハ 2:15~16）。

不正をしない（Iコリ 6:9~10、IIテモ 2:19）。

5．自分を愛するように人を愛する

ねたまない（Iコリ 13:4、Iヨハ 3:12）。

人に害を加えない（ロマ 13:10、Iコリ 13:5）。

喜んで自分を捨てる（ロマ 15:1~2、Iヨハ 3:16）。

6．死ぬまで忠心をつくす

死ぬまで信仰を変えない（IIコリ 11:2~4、黙 2:10）。

死ぬまでキリストから離れない（ヨハ 6:68、ロマ 8:35~39）。

主のために死をも恐れない（使徒 20:22~24、黙 12:11）。

第五章 人 類

一、 人類の由来

1 . まことの神によって創造された

神は第六日目に男と女とに創造された（創 1:27、31）。

アダムは神から生まれた神の子（ルカ 3:38）。

主イエスは神が人をお造りになったことを証明された（マタ 19:4、マル 10:6）。

2 . 一人の人からあらゆる民族を造った

神は一人の人からあらゆる民族を造り出した（使徒 17:26）。

エバはアダムのあばら骨から造られた（創 2:21～23、Iテモ 2:13）。

神は敬虔な子孫とするように、ただ一人の人を造った（マラ 2:15）。

二、 人類の始めの状態

1 . 人は神のかたちをもっていた

神は自分のかたちにかたどって人を造られた（創 1:26～27）。

神の姿とは、真の義と聖とである（伝 7:29、エペ 4:24）。

人は罪の為に神のかたちを失った。そして、キリストによって新しく人を造り、神のかたちに回復させる（II コリ 5:17、3:18、コロ 3:9～10）。

2 . 人は神の子としての尊厳があった

アダムは神の子と呼ばれた（ルカ 3:38）。

人は神との交わりの特権を持つ（参考 創 2:16、3:8）。

人は万物を治めることを託された（参考 創 1:26～28、2:19）。

3 . 人は快適で幸福な生活を送っていた

食べ物や衣服に煩わされなかった（参考 創 2:8、16、25、3:7）。

アダムとエバは睦まじい生活をしていた（参考 創 2:18、22～24）。

死の恐怖のなかった生活（創 2:9、3:22）。

三、 最初の祖先が犯した罪

1 . 聖書に書かれている犯罪の事実

神は言われた「彼らはアダムで契約を破り、かしこでわたしにそむいた」（ホセ 6:7）。

ヨブは言う「わたしがアダム(あるいは人々)の前に自分のとがをおおい、悪事を胸の中に隠したことは決してない」（ヨブ 31:33）。

パウロは言う「ただ、エバが蛇の悪巧みで欺かれたように、あなたがたの思いが汚されて、キリストに対する真心と純潔とからそれてしまうのではないかと心配している。」（II コリ 11:3、参考 Iテモ 2:13～14、ロマ

5:14、I コリ 15:22)。

2. 犯罪の経過

サタンの誘惑

まず、サタンは人に神の言葉を疑わせた。「神は本当に言ったのですか？」と女に言った(創 3:1、参考 創 2:16~17)。

サタンはまた神の言葉を否定して、「あなたは決して死ぬことはないでしょう」と言った(創 3:4、参考 創 2:17)。

サタンはエバの肉の欲、目の欲、持ち物の誇りで以ってエバを誘惑してその心を動かした(創 3:5~6、I ヨハ 2:16)。

エバがサタンに従った

エバは喜んでサタンと話をしたので、誘惑される機会を与えてしまった(創 3:1~2、参考 ヤコ 4:7)。

エバは神の言葉を堅く守らず、それを変えてしまった(創 3:2~3、比較 創 2:16~17)。

エバはサタンの試みに陥り、神の命令に背いた。そして、サタンに従って果実を食べ、またアダムにも食べさせた(創 3:4~6)。

3. 犯罪の結果

神の呪いを受けた

エバは産みの苦しみを大いに増され、苦しんで子を産む(創 3:16)。

アダムは一生、苦しんで地から食物を取る(創 3:17~19)。

楽園から追い出された

神は言われた「彼は命の木からも取って食べ、永久に生きるかも知れない」(創 3:22)。呪いを受けた人が永遠に生きることは不幸なことである。こうして彼らをエデンの園から追放し、命の木に至る道を守るために、エデンの園の東にケルビムと回る炎のつるぎとを置かれた(創 3:23~24)。

霊と肉体の死

神はすでに言われた「それを取って食べるときと死ぬ」(創 2:17)。彼らは罪を犯した時、霊の命が死んだばかりか、神と断絶し、肉体も土に帰ることとなった(創 3章、イザ 59:2)。

ひとりの人の不従順によってすべての人は罪びととなった(ロマ 5:12~19)。

四、 人類の終局

1. 人はみな罪を犯している

隣人を愛さない罪

神の律法は二つのことに尽きる。即ち(マタ 22:36~40):

a 「心を尽くし、思いを尽くしてあなたの神である主を愛せよ」

b 「隣人を自分のように愛しなさい」

人を愛さない：父母を敬わない。家族を顧みない。隣人を愛さない。これらはすべて罪となる（出エジ 20:12、I テモ 5:8、ルカ 10:28～37）。

人に害を与える：人の体を傷つける。人の利益を犯す。人の心を傷つける。これらはもっと大きな罪である（出エジ 20:13～17、ロマ 1:28～32）。

まことの神を愛さない罪

かりに自分を愛するように隣人を愛することが出来たとしても、私たちの創造主である神を愛さない。また私たちの救い主、イエスを認めないなら、神の御前においてすでに大きな罪を犯していることになる（ロマ 1:19～20、ヨハ 3:16～18、伝 12:1、13～14）。

偶像を拝みイエスに逆らう者は、さらに大きい罪を犯すのである（出エジ 20:3～5、ロマ 1:21～25、イザ 2:8～9）。

先祖が残した罪 原罪（自ら犯した罪はモラル罪という）

聖書には「ひとりの人の不従順によって、多くの人が罪人とされた」（ロマ 5:19）とあり、また、「アダムにあって全ての人が死んでいる」（I コリ 15:22）とある。これは、アダムの後世代が事実上彼の罪を受け継いでいることを示す。

詩篇の作者はこう書いている「見よ、わたしは不義の中に生まれました。わたしの母は罪のうちにわたしをみごもりました」（詩 51:5、参考 58:3、ヨブ 25:4、14:4、ロマ 7:17～18）。

アダムが罪を犯した後、死が全人類に入り込んだ。これによって人には原罪があり、罪によって死ぬのである（ロマ 5:12、14、17、6:23）。

以上三点より、人はみな老若問わず罪の中にいることが分かる。「全ての人は罪を犯した」（ロマ 3:23）。

2 . 罪びとの結末

悪魔に属する（I ヨハ 3:8 , 5:19）

罪の奴隷になる（ヨハ 8:34、テト 3:3）。

平安がない（イザ 48:22、ロマ 3:13～17）。

希望がない（エペ 2:12、箴 11:7）。

神の裁きを受ける

一生の労苦（創 3:16～19、詩 90:10）。

肉体が必ず死ぬ（ヘブ 9:27、ロマ 6:23）。

永遠の滅び（黙 21:8、II テサ 1:8～9）。

第六章 イエス

一、イエスの誕生

「イエス」(ギリシャ語)という名は、真の神から名づけられた(ルカ 1:31)。ヘブル語では「ヨシュア」と称して「救い主」の意味である。(参考: マタ 1:21)「キリスト」(ギリシャ語)はヘブル語において「メシア」と呼び、油そそがれた者の意味である。

1. キリストの誕生は早くから預言されていた

キリストは乙女によって生まれる(イザ 7:14)。彼は「女のすえ」である(創 3:15)

実現: 乙女のマリアは聖霊によって身重になり、救い主イエスを産んだ(マタ 1:18~25)

イエスはダビデの子孫から出る(エレ 23:5、イザ 11:1、マタ 22:41~42)

実現: キリストは肉体の系統から見るとダビデの子孫である(マタ 1:1、20、マタ 15:22, 9:27)

イエスはベツレヘムに生まれる(ミカ 5:2、マタ 2:4~6)

実現: 真の神はマリアが戸籍届けをするためにベツレヘムに戻り、そこで救い主を産むように取り計らわれた(ルカ 2:1~7)

2. 誕生前後の神の指示

真の神は天使を遣わしてマリアに「あなたはみごもって男の子を産むでしょう。その子をイエスと名づけなさい」と言いつけた(ルカ 1:31、26~38)

主の使者はヨセフに言った「心配しないでマリアを妻として迎えるがよい。その胎内に宿っているものは聖霊によるのである」(マタ 1:20、18~25)

イエスが生まれた晩、天使は羊飼いに現れて、「今日はあなた達のために救い主がお生まれになった」という大きな喜ばしいニュースを彼らに告げた(ルカ 2:8~20)

3. 誕生後の経歴

預言者シメオンとアンナは聖なる宮で幼な子イエスを見た時、みんなに「彼は選ばれた民たちの救い主だ」と紹介した(ルカ 2:22~39)

東方の博士はその星を見たので、わざわざ拝みに来た(マタ 2:1~12)

幼な子イエスとヨセフとマリアは神の啓示を受け、ヘロデの迫害から逃れてエジプトへ行った。ヘロデが死んでからユダヤのナザレに戻り、イエスはそこで育った(マタ 2:3、13~23)

二、イエスの御業

1. 天国の福音を宣べ伝える (マタ 4:23, 9:35)

イエスが伝道を始めしたのは 30 歳ぐらいだった (ルカ 3:23)。

イエスの宣べ伝える中心的な教えとは、「悔い改めよ。天国は近づいた」である (マタ 4:17、マル 1:14~15)。彼は「天国」が来るというよい知らせを伝えたので、その教えを「福音」と称する。イエスはこの為にこの世に来たのである (ルカ 4:43)。

イエスの教えはすべて、人々がどうやって天国へ入るか、或いは天国がどういう状況かを教えるものである。以下にその一部を簡単に挙げる。

天国の存在：主は「私の父の家には住まいがたくさんある」と言われた。(ヨハ 14:1~3、参考：マタ 25:34)

天国の状況：主は「復活の時、人間はめとったりとついだりせず天に
いる天使のようだ」と言われた。(マタ 22:30、参考：マタ 25:46 下、
13:43)。

天国への道：「私は道であり、真理であり、命である。だれでもわたしによらないでは、父のみもとに行くことができない」と主は言われた (ヨハ 14:6)。又、「誰でも水と霊とから生まれなければ、神の国へ入ることが出来ない」(ヨハ 3:5)。

天国の律法：「私は新しい戒めをあなた方に与える。互いに愛し合いなさい」(ヨハ 13:34)と主は言われた。主は律法を二つにまとめた。すなわち、a.力を尽くして神を愛せよ。b.自分を愛するように隣人を愛せよ (マタ 22:36~40)。主のうちに人を愛するなら、神を愛することになる。ゆえに、主の愛を見習って兄弟を愛するならば天国の律法を全うするわけである。

天国の賞与：「私の名の為に、家、兄弟、姉妹、父母、子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍をも受け、また永遠の生命を受け継ぐであろう」(マタ 19:29)。これだけを見ても、天国の御働きに伴う犠牲は大いに価値のあるものと分かる (参考：マタ 25:19~23)。

2. 様々なしるしと奇跡を行う

イエスがこの世の至る所でしるしと奇跡を行ったのは、人々を苦痛から救い出し、彼らの困難を解決し、そして自分が救い主であることを証明するためである。これによって人々が自分を信じるように導いた (参考：ヨハ 15:24, 11:41~42、45, 3:1~2)。

イエスの行ったしるしと奇跡は以下の通りである。

病人を癒す

役人の息子を癒す (ヨハ 4:46~54)。

女の長血を癒す (マル 5:25~34)。

目の不自由な人を見えるようにする（ヨハ 9:1～11）
耳が聞こえず口のきけない人を癒す（マル 7:31～37）
水腫の人を癒す（ルカ 14:1～6）
祭司の僕の耳を治す（ルカ 22:49～51）
十人のらい病人を癒す（ルカ 17:11～19）
中風患者を癒す（マル 2:1～12）
手がなえた人を癒す（ルカ 6:6～11）
三十八年間の持病を持つ人を癒す（ヨハ 5:1～9）

悪魔を追い出す

口のきけない人の悪霊を追い出す（マタ 9:32～33）
てんかんの悪魔を追い出す（マル 9:16～27）
汚れた霊を追い出す（マル 1:23～26）
悪魔の群（レギオン）を追い出す（マル 5:1～13）
病気の霊を追い出す（ルカ 13:10～16）

死人を生き返らせる

ヤイロの娘を生き返らせる（マル 5:35～43）
ナインの町の寡婦の息子を生き返らせる（ルカ 7:11～15）
亡くなってから四日たったラザロを生き返らせる（ヨハ 11:39～44）

様々なしるし

魚の口から銀貨を取って納税した（マタ 17:24～27）
不思議な能力を表して、シモンに魚を得させた（ルカ 5:1～11）
実らないいちじくの木が呪われて枯れてしまった（マタ 21:18～22）
水をぶどう酒に変わらせた（ヨハ 2:1～11）
五つのパンと二匹の魚で五千人を満腹にさせた（マル 6:32～44）
七つのパンと少しばかりの魚で四千人に腹一杯食べさせた（マル 8:1～9）
嵐を止めた（マル 4:35～41）
海の上を歩いた（マル 6:35～52）

三、イエスの品性

1. 聖潔の極み

彼には罪がない

イエスは自分には罪がないと証した（ヨハ 8:46）
ピラトはイエスが無罪だと証明した（ルカ 23:4、14、22、マタ 27:24）
イエスを裏切ったユダは、彼には罪が無いと言った（マタ 27:3～4）

善を好み悪を憎む（ヘブ 1:9）

至る所へ行って善を行った（使徒 10:38）

常に神の喜ぶ事をした（ヨハ 8:29）。

厳しく偽善者を責めた（マタ 6:2、5、16、23 章）。

弟子たちに聖潔を保つよう命じる

弟子たちに、専ら聖潔になるよう命じた（マタ 5:21～28）。

弟子たちの聖潔のために祈る（ヨハ 17:17）。

人類の罪が清められるよう自ら犠牲となる（マタ 20:28）

イエスは私たちの罪を償うために死なれた（I ペテ 2:21～24）。

罪の知らない方を私たちの為に罪とされた（II コリ 5:21）。

人の罪が清められるようにイエスが自分の命を捨てたのは、彼が神聖であることを示す為である。なぜなら、罪無き者だけが罪人を救い出す事ができるからである。

2. 愛の極み

父を愛する心

天の父の命令を守る（I ヨハ 5:3、ヨハ 6:38）。

天の父の御旨に従う（マタ 26:39、42、ピリ 2:8）。

専ら天の父の栄光を求める（ヨハ 7:18、17:4）。

人を愛する心

かん難と病にあえぐ人々を哀れむ（マタ 8:17、マル 1:40～41）。

生活を顧みる（マタ 24:15～21、15:32～38）。

悪人を優しく扱う（マタ 5:43～48、26:49～50）。

人の過ちを許す（マタ 5:44、ルカ 23:34）。

人の為に命を捨てる（ヨハ 15:13、マタ 20:28）。

3. 柔和で謙虚（マタ 11:29）

柔和

容易に怒らない（マタ 5:22、ルカ 9:51～56）。

人と争わない（マタ 26:62～63、I ペテ 2:22～23）。

いじめと侮りを忍耐する（マタ 5:39、26:67～68、イザ 50:6）。

謙虚

罪人を受け入れる（ルカ 5:27～32、15:1～2）。

謙虚で人に仕える（マタ 20:28、ヨハ 13:12～17）。

自分を誇らない（ヨハ 5:41、8:50、ピリ 2:6）。

四、イエスの受難

1. 主が死を受ける預言と預表

旧約の預言

彼は友達によって銀三十シケルで裏切られる（ゼカ 11:12～13。成就

マタ 26:14～16, 27:3～10)

彼は子羊のように殺し場に連れられて行く(イザ 53:7。成就 マタ 27:12～14)。

彼はとがのある者と共に数えられた(イザ 53:12。成就 ルカ 23:33)。
十字架で苦しみを受けて血を流して死なれた(詩 22:13～18。成就 ヨハ 19:17～24)。

主は予め言明した

「イエス・キリストは自分が必ずエルサレムへ行き、長老、祭司長、律法学者たちから多くの苦しみを受け、殺され、そして三日目によみがえるべき事を弟子たちに示し始められた」(マタ 16:2、参考:マタ 17:22～23) 主は言った「人の子が来たのも、仕えられるためではなく仕えるためであり、また多くの人のあがないとして自分の命を与えるためであった」(マタ 20:28)。

死を受ける預表

出エジプト記十二章には、ユダヤ人は正月の十四日の夕方(十五日は過越し祭で、十四日は予備日) 長男の死の変わりに、どの家でも子羊を殺し、その血を門の枠につけて始めて天使の殺しを逃れることが出来た(出エジ 12:6～14) とある。

イエスは世人の罪を取り除くため神の子羊となった(ヨハ 1:29) そして、彼も正月の十四日に死を受けた事によって、彼の尊い血によるバプテスマを受けた人が永遠の処罰を免除する事が出来る。

2. 主が死を受ける目的

世人の罪をあがなうため

主が死を受けるのは自分の罪のためではなく(ヨハ 19:6) 世人の罪をあがなうためである(ロマ 8:3、マタ 20:28、ヘブ 9:28、I コリ 15:3)。

律法を成就するため

律法に従って世の中の者はほとんど血で清められた。このように主イエスがもし血を流さなければ、世人は許されることがない(ヘブ 9:22、レビ 17:11) 主が十字架で死を受けて血を流すことは、神の律法を全うするためである(マタ 5:17、ヘブ 10:1～10)。

3. 主が受けた死の効力

一般の人に対する効力

すべての人の父である神に帰させる(ヨハ 12:32～33)。

人類の罪のあがないの供え物となる(Iヨハ 2:2、ロマ 3:25)。

信者に対する効力

律法の呪いから離れる(ガラ 3:13、ロマ 7:1～6)。

罪が許される（ヘブ 9:13～14、10:10、エペ 1:7）
死から解放される（ヘブ 2:14～15、ルカ 1:74～75）
神とやわらげる（エペ 2:13、ロマ 5:10）
義と称することが出来る（ロマ 5:9、II コリ 5:21）
神の国へ導く（コロ 1:13～14、エペ 2:19）

悪魔に対する効力

悪魔を滅ぼす（ヘブ 2:14、I コリ 15:55～57）
悪魔を追い出す（ヨハ 12:31～32）
あらゆる敵に打ち勝つ（コロ 2:14～15）

五、イエスの復活

1．復活の預言と預表

旧約の預言

「あなたは私を陰府に捨ておかれず、あなたの聖者に墓を見させられない」（詩 16:10、参考：使徒 2:31）

主は予め言明した

主は何度も弟子たちに死後三日目に自分が復活することを預言した（マタ 16:21、17:23、20:19、26:32）

ヨナの預表

ヨナは魚の腹に三日三夜いた後吐き出されたことは、主が死んだ後、埋葬されて三日目に復活される事を預表している（ヨナ 1:17、マタ 12:40）

2．主が復活する証

マグダラのマリアの証（マタ 28:1～10、ヨハ 20:1～2）
ペテロの証（ヨハ 20:3～8、使徒 2:24～32）
天使の証（マタ 28:5、7、ルカ 24:5～8）
兵卒の証（マタ 28:4、11～15、参考：マタ 27:62～66）
パウロの証（II テモ 2:8、I コリ 15:3～8、参考：使徒 9:3～8）

3．主が復活した結果

神の子であることを証明する（ロマ 1:4）
死を滅ぼして永遠の命を明らかに示される。（I コリ 15:54～55、II テモ 1:10、I コリ 15:22）
裁きが必ず来ることを証明する（使徒 17:31、参考：ヨハ 5:22、27～29）
信者は必ず復活することを証明する（I コリ 15:13～14、I ペテ 1:3～4、I テサ 4:14）

六、イエスの昇天

1. 主が昇天した事実

手を挙げて弟子たちを祝福しているうちに天にあげられた(ルカ 24:50~51)。
弟子たちが天を見つめていた時、突然二人の天使が現れて、彼はもう天に上げられたと証明した(使徒 1:9~11)。

イエスは既に天に上り、能力のあるものは皆彼に従う(1ペテ 3:22、ヘブ 4:14)。

2. 主が昇天なされた結果

人間に神の偉大な能力を知らせる(エペ 1:18~21)。

天と地のすべての権力を掌握する(マタ 28:18、ピリ 2:9~10)。

約束した聖霊を賜る。昇天なされてから十日目の五旬節の日に、聖霊が初めて下った(使徒 2:33、ヨハ 7:39、16:7、使徒 1:5、ヨハ 14:16~17)。

主の昇天は聖徒たちを迎え、世界を裁判する為、後の日に天使たちと共に栄光の中に再臨するのである(黙 22:12)。

七、イエスは真の神である

1. イエスには神の名称がある

始めであり、終わりである(黙 1:17, 2:8, 22:13、参考ヨハ 8:57~58)。

アルファであり、オメガである(黙 1:8, 21:6, 22:13)。

主(使徒 2:36, 3:15, 10:36、マタ 22:43~45、ロマ 10:12)。

インマヌエル(マタ 1:23、イザ 7:14)。

真の神(ヘブ 1:8、ヨハ 20:28、使徒 20:28、ロマ 9:5、1テモ 3:16、テト 2:13、

1ヨハ 5:20、イザ 9:6、参考：ヨハ 14:9~11, 18, 10:30)。

2. イエスは神の性格を有する

全能

病人を癒す(マタ 9:27~30, 14:14, 35、ヨハ 9:1~3, 6, 7)。

人間を生き返らせる(ルカ 7:14~15, 8:54~55、ヨハ 11:43~44)。

悪魔を制する(マタ 8:14, 12:22、ルカ 13:10~13)。

万物を支配する(マタ 8:26~27, 14:24~32, 17:24~27, 21:18~19)。

万物を保つ(ヘブ 1:3、コロ 1:17)。

大きな権力を掌握する(マタ 28:18、ヨハ 3:35、エペ 1:20~22、ピリ 2:9~11)。

全知

人間の過去を知っている(ヨハ 4:5~19, 1:47~48, 11:3~14)。

人間の考えを知っている(マタ 9:3~4、マル 2:8、ルカ 6:7~8、ヨハ 2:24~25)。

人間の未来を知っている(ルカ 5:4~6, 22:10~13、ヨハ 20:18、マタ 26:30~35, 74~75)。

遠いところの事を知っている（ヨハ 1:48、マル 14:12～16）

イエスは知恵と知識の根源である（コロ 2:3、I コリ 1:24, 2:7）

普遍の存在

イエスは地上にいた時でも天にいた（ヨハ 3:13、14:9～11、17:21）

イエスは各地の弟子たちと一緒にいる事ができる（マタ 28:20、18:19～20、使徒 18:9～10、23:11）

信者のうちにいる（ヨハ 14:20, 17:21～23、II コリ 13:5）

万物に満ちる（エペ 1:21～23, 4:10）

3 . イエスは神の職権を有する

創造（ヨハ 1:3、コロ 1:16、ヘブ 1:2、10）

罪を許す（マル 2:5～10、ヨハ 5:14、ルカ 7:40～49）

裁き（II テモ 4:1、II コリ 5:10、黙 22:12）

死人を生き返らせて栄光を得させる（ヨハ 6:39、44、ピリ 3:21、I コリ 15:52～53）

4 . イエスは旧約の主である

主は創造主である（創 1:1、イザ 42:5、ネヘ 9:6）

イエスは創造主である（ヨハ 1:1～3、コロ 1:16、ヘブ 1:10）

主は救い主である（イザ 43:11、ホセ 13:4）

イエスは救い主である（使徒 4:12、ルカ 2:11、ユダ 24）

主は王である（詩 10:16, 96:10）

イエスは王である（黙 11:15）

主は栄光ある主である（詩 24:10）

イエスは栄光ある主である（I コリ 2:8）

主は神の神、主の主である（申 10:17、ダニ 2:47）

イエスは主の主、王の王である（黙 17:14、19:16）

主は命の主である（申 32:39、エレ 38:16）

イエスは命の主である（ヨハ 1:4, 11:25, 14:6）

主は最初であり最後である（イザ 44:6, 48:12）

イエスは最初であり最後である（黙 1:17, 22:13）

第七章 救い

一、救いの内容

(一) 消極面

1. 死から人間を救い出す

人間は罪を犯したため、魂は既に死んでいる(創 2:17、エペ 2:1、ルカ 9:60)。

もし救われなければ必ず永遠の死に入る(黙 21:8、マタ 25:41、46)。

主は私たちを死から救い出すことが出来る(II コリ 1:10、黙 20:6)。

主は死によって、死の力を持つ悪魔を滅ぼした(ヘブ 2:14、I コリ 15:54~57)。

2. 人間を罪から救い出す

死は罪から来たため、罪を許さなければ死から逃れられない(ロマ 6:23、5:12)。

律法に従い血を流すことなしには、罪のゆるしはあり得ない(ヘブ 9:22)。

イエス・キリストがこの世に来たのは、罪人を救うためである(I テモ 1:15、マタ 1:21)。

主は世人のために自らの血を流して命を捨てたゆえに、人間の罪をあがなうことが出来る(テト 2:14、ヘブ 9:12~14)。

3. 人間を律法から救い出す

死のとげは罪で、罪の力は律法である(I コリ 15:56、ロマ 5:13)。

主が律法の下に生まれたのは、律法の下にいる人間をあがなうためである(ガラ 4:4~5)。

イエスは私たちのために呪われて十字架に付けられた。これによって、律法の呪いから私たちをあがなわれた(ガラ 3:13、コロ 2:14、16~17)。

クリスチャンがあがなわれた以上もはや律法の下にはいないので、律法の束縛から逃れることが出来る(ロマ 6:14、7:4、6)。

4. 人間を悪魔の権勢から救い出す

悪魔は人を罪に誘い、人を死に至らせる悪者である(ヨハ 8:44、ヤコ 3:14~16、黙 20:10)。

世人はみな悪しき者の配下にある(Iヨハ 5:19)。

主はあらゆる事において悪魔に打ち勝った(ヨハ 16:33、黙 3:21、ヘブ 2:14、4:15)。

主を信じ主に頼る者は、必ず悪魔の権勢から逃れることが出来る(使徒 26:18、Iヨハ 5:4~5、18)。

(二) 積極面

1. 人間を天国へ導く

主イエスが宣べ伝えたのは“天国の福音”である(マタ 4:17)。

イエスの弟子も同じように“天国の福音”を宣べ伝えた(マタ 10:7)。
福音を信じる者は、主によって必ず救われ、天国へ導かれる(II テモ 4:18)。
聖霊は天国を受け継ぐための保証である(エペ 1:13~14)。

2. 永遠の命が与えられる

主の言は“永遠の命の言”と称される(ヨハ 6:68、使徒 5:20)。
救いは“命の恵み”とも称される(I ペテ 3:7)。
主が命を捨てて私たちに与えたものは“永遠の命”である(I ヨハ 2:25、ロマ 5:21、ヨハ 3:16、36)。
主に与えられた聖霊によって、永遠の命を得る(ヨハ 4:14、黙 22:17、ヨハ 7:37~39)。

3. 栄光が与えられる

神のご恩は無限のもので、彼に召された者はみな義と称されるばかりでなく、
栄光を与えられる(ロマ 8:30、ヘブ 2:10)。
主は私たちの卑しいからだをご自身の栄光のからだと同じ形に変えてくださる
(ピリ 3:21)。
天にある栄光の資産を聖徒に与える(I ペテ 1:4、コロ 3:24)。
永遠にしほむ事の無い栄光の冠を与えられる(I ペテ 5:4、10)。

二、救いの計画(参考: II テト 1:9~10、エペ 1:3~5)

1. 神が人間を救う必然性

世人は自分の力で罪と死から逃れられない

全世界は悪しき者の配下にある(I ヨハ 5:19、エペ 2:1~3)。
人は罪に縛られている為、自ら自分を救うことが出来ない(エレ 23:23、ロマ 7:14~15、24)。
人は最終的に裁かれて、永遠の処罰に入る(ロマ 6:23、黙 21:8)。
神は愛であるから人類の滅亡を放っておくことが出来ない
神は自分の創造した人間を大事にする(詩 8:3~4、144:3)。
神は自分の創造した人間が滅ぼされるのを喜ばない(エゼ 33:11、II ペテ 3:9)。
慈悲ある神は、滅亡する人間のために救う方法を設けている(I ヨハ 4:8、16、
イザ 49:15、詩 103:13、箴 24:11~12)。

2. 神からの救いの約束

神は悪魔に向かって、女の子孫がきっと彼の頭を砕くと宣告した(創 3:15)。
神は選ばれた民の祖先アブラハムに彼の子孫から救い主が必ず現れ、また、万国は必ず彼によって恵みを得られると約束した(創 22:18、12:1~3、17:1~6)。
神はイスラエル人に救い主を賜る約束を何度も持ち上げた
シロ(平安を賜る者)が必ずユダから出て、万民は必ず神に帰する(創 49:10)。

必ずイスラエルから彼らを救う預言者であるモーセを起こす（申 18:15～19）、世の中の最高の君主が必ずダビデの子孫から出る（詩 89:27～37、エレ 23:5～6）、「一人のみどりごがわれわれのために生まれた。その名は、“大能の神、とこしえの父、平和の君” ととなえられる」（イザ 9:6）、地のすべての果ては、われわれの神の救いを見る（イザ 52:10）。

3. 救いの預表

皮で作った着物（創 3:21）

神はアダム夫婦のために罪の無い動物を殺して、彼らの恥を隠すためにその動物の皮で服を作った。これは神が罪人のために罪の無いキリストの血を流して死なれたことを預表する。私たちはそれによって罪が許され、義とされる（参考 ヨハ 1:29、I ペテ 3:18、II コリ 5:21、ガラ 3:27）。

モーセは青銅の蛇を挙げた（民 21:9）

神はモーセに青銅の蛇をさおに掛けさせ、火の蛇に噛まれて死にそうになった人は、神の指示を信じ、それを仰ぎ見て生きた（民 21:4～9）。これは、主イエスが世人の罪の為に十字架に付けられたことによって、彼を信じ仰ぐ者なら滅亡から逃れられるばかりか、永遠の命を得る事が出来るようになる事の預表である（参考：ヨハ 3:14～15）。

モーセはイスラエル人を救うために遣わされた

神はモーセをエジプトへ行かせ、イスラエル人をパロの迫害から救われた。これはキリストがこの世に来て、彼の民を悪魔の抑圧や迫害から救うことの預表である（参考 使徒 3:22～23、申 18:15～19）。

各預表を簡単に挙げると...

モーセが生まれた頃にパロの迫害を受けた事は、イエスが生まれた時にヘロデの迫害を受けることの預表である（出エジ 1:15～16、22、マタ 2:16～18）。

モーセが神の民の為に贅沢なくらしを捨てた事は、キリストが私たちの為に裕福にならず、貧しくなることの預表である（ヘブ 11:24～27、II コリ 8:9）。

モーセが民を率いてエジプトを出て紅海を渡って彼に帰することは、キリストが私たちをエジプトのような罪悪の世界から救い出して、バプテスマを通して彼に帰することの預表である（出エジ 14:21～23、I コリ 10:1～2、ガラ 3:27）。

モーセが荒野で神の為に幕屋を築いたことは、キリストが命を捨ててこの世で神の教会を立てることの預表である（出エジ 25:8～9、使徒 20:28、ヘブ 8:1～2）。

モーセが神の家で忠誠に尽くした事は、キリストが神の家である教会に死ぬまで忠誠に尽くす事の預表である（ヘブ 3:5、民 12:7、ヘブ 3:2、ピリ 2:4～8）。

三、イエスは救いを全うする

1. 救いはイエスによって明らかになる

恵みとまこととはイエス・キリストを通して来たのである（ヨハ 1:15～17）。

恵みはみなキリスト・イエスから賜る（II テモ 1:9～10、エペ 2:7）。

イエス以外に救いはない（使徒 4:12、ヨハ 14:6）。

イエスを見ることは、神の救いを見ることである（ルカ 2:29～32、3:6）。

2．イエスが血を流した事によって救いを全うした

神の律法によると、「血を流すことなしには、罪の許しはあり得ない」（ヘブ 9:22）とある。しかし、牛ややぎの血は人間の罪を取り除くことが出来ない（ヘブ 10:1～4）ので、イエスは救いを全うするために身を捨てて血を流さなければならぬ（ヘブ 10:5～10）。

主の血の主な効果とは...

主の血によるあがない

人間は罪の下に売られている為、罪の奴隷である（ロマ 7:14、ヨハ 8:34）。

罪のあがないにはキリストの尊い血によるしかない。なぜなら、イエスの血には命があるので、罪をあがなうことが出来る（I ペテ 1:18～19、エペ 1:7、マタ 20:28、レビ 17:11）。

クリスチャンは主の血によってあがなわれた（使徒 20:28、黙 5:9、I コリ 6:20）。

主の血によって罪が清められる

旧約時代は牛ややぎの血によって清められたが、それは影にしか過ぎない（ヘブ 10:1～4）。

ただ、主の清い血によってのみ人の罪をきれいに洗い流すことが出来る（ヘブ 9:14、I ヨハ 1:7、黙 1:5）。

主の血はバプテスマを通して人の罪を許す（ロマ 3:25、使徒 2:38、22:16）。

主の血によって神に会うことが出来る

人間は罪を犯した為に、神との間を隔てた（イザ 59:2）。

主の血によって神と和解して、神に近づけるようになった（コロ 1:20、エペ 2:13）。

主の血によって聖所に入ることができた（ヘブ 10:19～20、9:7～9、マタ 27:50～51）。

四、救いの施しとその受け入れ

1．神の救いは全ての人へ

神は一人も滅びずに、全ての人々が救われることを望んでおられる（I テモ 2:4、II ペテ 3:9）。

神は種族の分け隔てなく人々を愛しておられる（ヨハ 3:16、黙 7:9、ガラ 3:27～28）。

主は弟子たちにすべての造られた者に福音を宣べ伝えよと言った（マル 16:15、マタ 28:19、I ヨハ 2:2）。

神は罪を犯した御使いたちを助けることはしない(ヘブ 2:16、II ペテ 2:4)。

2 . 救いは神からの賜物である

救いは自分から出たものではなく、神からの賜物である(エペ 2:8~9)。

私たちは主に選ばれたのであって、私たちが主を選んだのではない(ヨハ 15:16、エペ 1:5~6)。

神は慈しもうとする者を慈しむ(ロマ 9:14~18)。

神には言い尽くせない賜物がある(II コリ 9:15、ヨハ 1:16)。

3 . 救いはただで得られる

働く人に対する報酬は、恩恵として認められない(ロマ 4:4~5)。

救いを得ることは、人の行いによるものではない(エペ 2:9、ロマ 4:6~7)。

律法の行いによるのでもない(ロマ 3:28、20)。

救いは神によって値なしに人々に与えられる(ロマ 3:24、黙 22:17)。

4 . 救いは信仰によって受け入れる

救いはイエスの血による、人の信仰をもって受くべきである(ロマ 3:25、エペ 2:8)。

すべて信じる者が救われる(ロマ 1:16~17、10:13)。

信仰による義人は生きる(ロマ 1:17、ヘブ 11:6)。

真の信仰には行いが伴う(ヤコ 2:20~26)。

5 . 今はまさに救いを受けられる時期である

いまや後の雨である聖霊が降り、神が人を受け入れる恵みの時である(ヨエ 2:28~29、32、ゼカ 10:1、ルカ 4:18~19)。

まだ大水が押し寄せていない為、裁判の日がまだ来ていない(詩 32:6、69:13)。

今主イエスを信じなければ、いつまでも後悔することになる(詩 95:7、ヘブ 2:1~3、ルカ 16:22~31)。

見よ、今は救いの日である(II コリ 6:2、イザ 49:8、箴 27:1)。

第八章 信 仰

聖書より：「信仰がなくては、神に喜ばれることはできない」（ヘブ 11:6）。また、「神の義は、その福音の中に啓示され、信仰に始まり信仰に至らせる」（ロマ 1:17）。以上の聖句から見ても、信仰は救われる面において非常に重要な意味を持っている。

一、 何を信じるのか

1 . 真の神を信じる（ヨハ 14:1）

神はただひとりしかいないことを信じる（マル 12:29、ヨハ 17:3、I コリ 8:6）。

万物は神によって創造されたことを信じる（ヘブ 11:3、3:4、創 1:1）。

人間の生死、幸、不幸はみな神によって決められることを信じる（サム上 2:6～7、申 32:39、イザ 45:7）。

全知、全能、遍在の神であることを信じる（ロマ 16:27、マタ 19:26、エペ 4:6）。

神は深く世人を愛し、万民に恵みを与えることを信じる（ヨハ 3:16、ルカ 6:35、詩 145:9）。

2 . イエスを信じる（ヨハ 14:1）

イエスは聖霊によってみごもった乙女マリアから生まれたことを信じる。言が肉体となり、その後世人の罪の為に十字架に付けられて葬られた。また、聖書の言うとおりに三日後復活され、四十日後昇天され、天国へ戻られた。後の日、イエスは必ず天から降り、人に対しそれぞれの行いによって万民に報いるのである（マタ 1:18～23、ヨハ 1:1～2、14、I コリ 15:1～4、使徒 1:3～9、I ペテ 3:22、使徒 17:31、マタ 25:31～34、41、46）。

イエスは唯一の救い主であり、彼の尊い血に頼って初めて救われて神の御前に進むことが出来る事を信じる（ルカ 2:11、使徒 4:12、ヨハ 14:6、ヘブ 10:19～20）。

イエスと父とは一つであり、イエスは真の神であることを信じる（ヨハ 10:30、ロマ 9:5、イザ 9:6）。

3 . 聖霊を信じる

聖霊は神の霊であり、神ご自身でもあることを信じる。なぜなら、主が“神は霊である”と言ったからである（ヨハ 4:24、マタ 3:16）。

“父の霊”や“イエスの霊”とも呼ばれる聖霊が、同じであることを信じる。なぜなら、父とイエスとは一つだからである（エペ 4:4、I コリ 12:4、マタ 10:26、使徒 16:7）。

クリスチャンは必ず主イエスの約束の証印である聖霊を得ることが出来ることを信じる（ヨハ 7:37～39、エペ 1:13～14、ルカ 11:13）。

聖霊が人に降ったときに異言を語ることを信じる（使徒 10:44～46、19:6～7、I コリ 14:2）。

4 . 神の言である聖書を信じる

聖書は神の靈感を受けて書かれたものである事を信じる（II テモ 3:16、II ペテ 1:21）。

神の言葉はみな真実で頼りになり、また、力がある事を信じる（箴 30:5、ルカ 1:37）。
神の約束は必ず成就される事を信じる（イザ 46:10、エゼ 12:26～28、ロマ 4:20～21）。

神は必ず自分の言ったその言葉が、この世をさばくことを信じる（ヤコ 2:12、ロマ 3:19、ヨハ 12:48）。

神の言葉は添削する事が出来ない（申 12:32、黙 22:18～19）。

5. 神が設立した真の教会を信じる

教会に従うことはキリストに従うのであり、教会を拒むことはキリストを拒むのである（ルカ 10:16、マタ 18:17）。

昔ユダヤ人は主を信じたが、神が肉体となってこの世に来られたイエスを信じようとしなかった。それは、悪魔に惑されたからである（ヨハ 8:37～45）。

イエスを信じるが、彼の聖霊によって設立した真の教会を信じないのは間違いである。なぜなら、教会はイエスの体だからである。真の教会に反抗することは、すなわちイエスを拒むことである（使徒 9:4～5、エペ 1:23）。

真の教会には次の条件が必要である。すなわち、キリストの聖霊がともにいる（ロマ 8:9、I コリ 12:13）。しるしと不思議が伴う（マル 16:17～20、ヘブ 2:3～4）。伝えられるものが聖書と一致する（ガラ 1:6～9、II コリ 11:2～4、4:6）。真の教会は主が聖霊によって罪を許すことと、罪をそのまま残すことを行うところである（ヨハ 20:21～23、マタ 18:17～18）。

二、 真の信仰

1. 心から信じる（マル 11:22）

神の言葉が真実であり、正確であることを信じる（黙 21:5、ヨハ 4:50～53、創 15:5～6）。

心から神の言葉に賛成する（ロマ 10:9、I テモ 1:15、4:8～9）。

神の言葉を疑わず、心から信じる（ロマ 4:20～21）。

2. 絶対服従する（ヨハ 12:36）

信じるがそれに従わないのは本当の“信仰”ではない。例：ナアマンはエリシャに従わなかった（列王下 5:10～12）。金持ちの青年は主の言葉に従わなかった（マタ 19:21～22）。

従順は信仰の表れである。例：アブラハムの従順さと盲人の従順さ（ヘブ 11:8、17、ヨハ 9:6～7）。

行いの無い信仰は死んだものである（ヤコ 2:19～26）。

3. 完全に神に託す

信じるが頼らないのは薄い信仰である（マタ 8:23～26、マル 4:35～40）。

神が顧みるのを深く信じる(ヘブ 11:6、I ペテ 5:7、マタ 6:30~32、I コリ 10:13)。
すべてを主に託す(詩 37:5、ピリ 4:4~7、イザ 26:3)。

三、 信仰の効果

1 . 神に喜ばれる

アベルは信仰によっていけにえを捧げたので神に喜ばれた(ヘブ 11:4)。
エノクは信仰によって神と共に歩み、神に喜ばれ、共に移された(ヘブ 11:5)。
信仰がなくては、神に喜ばれることができない(ヘブ 11:6)。

2 . 信仰によって義とされる

人が義とされるのは律法の行いによるのではない(ロマ 3:28、ガラ 2:16)。
人が義とされるのは良い行いによってではない(エペ 2:8~9、ロマ 4:4~7)。
人が義とされるのはイエスによるあがないによるのである(ロマ 3:24~25、28、
使徒 13:39、ガラ 3:7)。

3 . 魂が救われる

信仰の効果は魂の救いを得ることである(I ペテ 1:9)。
主の御言は、魂を救うことができる(ヤコ 1:21)。
福音はすべて信じる者を救う(ロマ 1:16、ヨハ 3:15~16、36)。

4 . 将来を見ることが出来る

イサクは信仰によって、来るべき事についてヤコブとエサウとを祝福した(ヘブ 11:1、20、創 27:27~29、38~40)。
ヨセフは信仰によってイスラエル人が将来エジプトへ行くと指摘し、自分の骨について指図した(ヘブ 11:22、創 50:24~25)。
私たちも信仰によって万物の結末と、天国の栄光を知るようになった(II ペテ 3:8~13、I コリ 2:9、ロマ 8:17~18)。

5 . 祈りが聞き入れられる

主は言った「祈りの時、信じて求めるものは、みな与えられるであろう」(マタ 21:22、
マル 11:24)。
信仰による祈りは病気が治る(ヤコ 5:14~15、マタ 9:20~22)。
疑う人は主から何も得られない(ヤコ 1:6~7)。

6 . 神の加護を得る

ノアは信仰によって箱舟を用意しておいた為、家族全員が救われた(ヘブ 11:7、
創 6:13~22、7:17~23)。
イスラエル人は信仰によって過越の祭を守っていた為、長男絶滅の災いを逃れる
ことが出来た(ヘブ 11:28、出エジ 12:1~13、21~29)。
ラハブは信仰によって使者をもてなしたので、エリコの町の人々と一緒に滅びる
ことがなかった(ヘブ 11:31、ヨシュ 2:12~14、17~21)。

7 . 絶望からの生還

信仰によってサラは出産期を過ぎたにもかかわらず、妊娠して子供を産むことが出来た（ヘブ 11:11、ロマ 4:19~21）。

アブラハムは信仰によって、イサクを捧げようとしたが、真の神は彼を死から救った（ヘブ 11:17~19、創 22:9~14）。

イスラエル人は信仰によって乾いた地のように渡ることができ、エジプト兵の追撃から逃れることができた（ヘブ 11:29、出エジ 14:13~30）。

8．勇敢になる

モーセの両親は信仰によって王の命令を恐れず、モーセを三ヶ月間隠した（ヘブ 11:23、出エジ 1:22、2:1~2）。

エズラは信仰によって王に兵隊を出して自分たちを守ってもらうように頼まず、専ら神に頼って四ヶ月間危ない道を歩きながらも安全にエルサレムについた（エズ 8:21~23、31~32、7:9）。

信仰によって信者は危険な生活や患難を恐れない（ヘブ 13:5~6、詩 46:1~3、使徒 21:13）。

9．真心を持って捧げる

アブラハムは信仰によってひとり子を捧げた（ヘブ 11:17~18、創 22:15~17）。

ザレパテのやもめの女は信仰によって預言者エリヤをもてなすために、貴重な食物を捧げた（列王上 17:8~16）。

初期教会の信者たちは、信仰によって教会に畑と財産を捧げた（使徒 2:44~45、4:36~37）。

10．喜んで苦しみを受ける

モーセは信仰によって、喜んで贅沢な生活を捨てて神の民と一緒に苦難を受けた（ヘブ 11:24~26）。

信仰によって聖徒は拷問にかけられ、あざけられ、むち打たれ、縛り上げられ、投獄されることもあるほか、命まで捨てた（ヘブ 11:35~38）。

信仰によって古代聖徒は、主のために苦しみを受けることを喜びとし、栄光とした（マタ 5:10~12、Iペテ 4:12~13、ロマ 8:17~18）。

11．敵に打ち勝つ

イスラエル人は信仰によってエリコの城壁を七日間回ったため、城壁は崩れた（ヘブ 11:30、ヨシュ 6:11~20）。

ダビデは信仰によってペリシテの勇士ゴリアテに打ち勝った（サム上 17:31~51）。

この世に打ち勝たせるものは我々の信仰である（Iヨハ 5:4、Iペテ 5:9）。

四、 信仰の源

1．説教を聞く

パウロは言った「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」（ロマ 10:17）。

五旬節に説教を聞いたエルサレムの人々は心を強く打たれ、三千人がイエスを信じバプテスマを受けた（使徒 2:37~41）。

神の真理は人に信仰と望みをもたせる（ヨハ 20:30~31、ロマ 15:4、II テモ 3:15）。

2 . 神からの賜物

信仰は神が各自に分け与えたものである（ロマ 12:3、I コリ 12:9、使徒 3:16）。

「信仰は人の知恵から出たものではなく、神の力である」（I コリ 12:4~5、エペ 2:8）。

信仰が強くなるよう、主に求めるべきである（ルカ 17:5、マル 9:24）。

3 . 試練を受けて信仰が強まる

「信仰はためされて、火で精錬されても朽ちる外はない金よりもはるかに尊い事が明らかにされる」（I ペテ 1:7、ヤコ 1:2~4）。

アブラハムはイサクを捧げた経験から「アドナイ・エレ」と言う断固とした信仰によって、彼は年をとった僕に故郷への嫁探しを命じた（創 24:2~7、40、参考 創 22:13~14）。

ヨブの信仰は試練によって強まった（ヨブ 23:10、42:1~5）。

五、 不信仰の不幸

1.生前の刑罰

イスラエル人は不信によって、大半が荒野で死んだ（ヘブ 3:19、I コリ 10:5、民 14:11~12、26~30）。

サマリヤの軍長は預言者エリシャの話を聞かなかったので、踏まれて死んでしまった（列王下 7:1~2、17）。

ザカリヤは天使の言葉を信じなかったので、口がきけなくなってしまった（ルカ 1:19~20）。

2.死後の滅び

信じない者は罪に定められる（マル 16:16、ヨハ 3:18）。

硫黄の火の湖に投げ込まれる（黙 21:8、19:20）。

永遠の滅びに至る刑罰を受ける（II テサ 1:8~9）。

3.神の言に対するあやふやさ

ただ、信仰によって私たちは堅く立つことができる（II コリ 1:24、ロマ 11:20）。

だから少しも疑ってはいけない（ヤコ 1:6、ヘブ 3:12）。

十分な信仰を保たなければならない（コロ 2:2、I テサ 1:5）。

第九章 悔改め

一、悔改めの重要性

(一) 旧約時代の悔改め

1. アダムが罪を犯した時

神はアダムとエバに問いただし、彼らに過ちを認めさせ、悔改めを要求した(創 3:11)。

しかしアダムは自分の過ちをエバに被せ、エバは自分の過ちを蛇に被せた。このように、アダムとエバは言い訳をして自分たちの罪に対して心から悔改めなかった(創 3:12~13)。

それだから聖書には、アダムは自分の悪事を胸の中に隠した人とある(ヨブ 31:33)。

2. ノアの時代

ノアの時代、世の中は悪と暴虐に満ちていた(創 6:5、11~12)。

神はノアに一隻の箱舟を造らせ、よこしまな者たちに正しい教えを伝えさせた。それは、彼らが悔改めて生きることを神は望んでいたからである(II ペテ 2:5)。

惜しい事に、神の寛容が下された時、誰も悔改めることはしなかった。その結果、ノアの一家族以外みな滅びた(創 6:3、7:21)。

3. ソドムとゴモラ

神の目から見て、ソドムとゴモラの罪ははなはだ激しかった(創 18:20、19:13)。

神は彼を恐れる人々を救う為に、二人の天使をソドムに遣わした(創 19:12~14)。

彼らが火で焼かれたのは、彼らが罪を犯しても悔改めなかったからである(II ペテ 2:6~8、ユダ 7、創 19:23~25)。

4. ニネベ町の人々

彼らの悪が神の前に上ってきた(ヨナ 1:1~2)。

神はヨナを通して 40 日後にニネベの町が滅びると人々に命じた。彼らにこれらの期間を与えたのは、彼らが罪を認めて悔改めに至ることを神は望んでいたからである(ヨナ 3:1~4)。

その後、ニネベの人々は悔改めた為、神はこの町を滅ぼさなかった(マタ 12:41、ヨナ 3:5~10、4:11)。

5. 不誠実なイスラエル人

イスラエル人が神の律法にそむいた時、神は預言者を遣わして再三にわたって彼らに警告した。神は彼らが悔改めて神に立ち返ることを望んでいたからである(エレ 8:6、17:27、26:12~13、エゼ 14:6、18:30~32)。

しかし彼らは心が頑なで、不正な行為から離れなかった。その結果、彼らのほとんどが殺され、また残された者はバビロンへ奴隷として捕虜となった(歴代下 36:11~20)。

聖書にこう書いてある「あなたがたの先祖たちのようであってはならない。先の預言者たちは、彼らに向かって叫んで言った“万軍の主はこう仰せられる。悪い道を離れ、悪い行いを捨てて帰れ”と。しかし、彼らは聞き入れず、耳を私に傾けなかったと主は言われる」(ゼカ 1:3~4)。

(二) 新約時代の悔改め

1. バプテスマのヨハネは人々に悔改めを勧めた

ヨハネは言った「悔改めよ、天国は近づいた」(マタ 3:2、8、11)。

多くの人々がヨハネのところに来て自分の罪を告白した(マタ 3:5~6、マル 1:5)。

ヨハネはイスラエル人に悔改めのバプテスマを授けた(使徒 13:24、19:4)。

2. 主イエスは悔改めを重視した

イエスが教えを宣べはじめた頃、人々に悔改めを勧め、また昇天後でさえ教会に悔改めるよう勧めた(マタ 4:17、黙 2:5、16、21、3:3、19)。

イエスは言った「罪人が一人でも悔改めるなら、大きい喜びが天にあるであろう」(ルカ 15:7、10)。

もし悔改めなければ必ず滅ぼされる(ルカ 13:1~5)。

3. 使徒たちは悔改めを強調した

五旬節の日にペテロは人々に「悔改めなさい」と言った(使徒 2:38)。

パウロが神の言を宣べ伝えていた時、悔改めて神に立ち帰れと説き勧めた(使徒 26:20、17:30)。

人々の悔改めを望んで、神は寛容の心で忍耐しておられる(ロマ 2:4、II ペテ 3:9)。

二、悔改めの意味

1. 罪の自覚

罪を自覚することは悔改めの始めである(列王上 8:47、ルカ 10:13)。

自分を義人とする者は悔改めを知らない(ルカ 18:9~12、エレ 2:35)。

神の御前では、完全な人は誰もいない(ヤコ 3:2、伝 7:20)。

2. 罪の悲哀

罪のために涙を流して悲しむ者は、自分の弱さを自覚している証拠である(詩 38:18、ルカ 7:36~38、ヨエ 2:12~13)。

神の御心に添う悲しみは、悔いのない悔改めに至る(II コリ 7:9~10、ルカ 22:61~62、32)。

神は砕けた悔いた心の者を軽しめられない(詩 51:17、イザ 57:15、66:2)。

3. 罪の許しを求める

自分の罪を認め、神に許してもらえるよう求める（詩 32:5、レビ 26:40、民 14:39~40）。

互いに罪を認め合い、許し合う（ヤコ 5:16、マタ 5:23~24、使徒 19:18）。
その罪を隠す者は栄える事がない（箴 28:13、使徒 5:1~10）。

4. 真の神に立ち返る

偶像と他の神々を捨て去り、心を主にに向けて主にのみ仕えよ（サム上 7:3、使徒 26:20、Iテサ 1:9）。

へりくだって神の命令に従順でいる（歴代下 32:26、33:10~13、使徒 2:38、41）。

表面上では罪を認めるが、心の底から神に対して従順でないのは、本当の悔改めにはならない（出エジ 9:27、サム上 15:24）。

5. 悪を憎み不正から離れる

悪を憎む（詩 97:10、アモ 5:15、ヨブ 42:6）。

悪事を止め、悔改める（イザ 55:7、ヨナ 3:8~10、歴代下 7:14）。

あらゆる悪から遠ざかる（Iテサ 5:22、詩 34:13~14、19:13）。

6. 良い実を結ぶ

悔改めにふさわしいわざを行う（使徒 26:20、マタ 3:8）。

罪を犯したらその償いをする（民 5:5~7、ルカ 19:8）。

「神を恐れ、人を愛する」という良い実を結ぶ（ルカ 7:37~38、3:11、19:8）。

三、悔改めの効果

1. 罪の許しを得る

人は新約時代では主を信じ、悔改め、イエスの御血と神の霊によるバプテスマによって過去の罪はすべてきよめられる（Iコリ 6:11、Iペテ 3:20~21、使徒 2:38）。

入信してからあやまちを犯した場合、必ずそれを認めて悔改める必要がある。そうすれば、主に許してもらえる（ヤコ 5:15~16、Iヨハ 1:9、5:16~17）。

悔改めは罪の許しを得るための必要条件である（詩 32:5、歴代下 7:14、ルカ 7:37~38、47）。

2. 刑罰から免れる

人がもし悔改めて主に帰るなら、神は災いを思い返される（ヨエ 2:12~13）。ヒゼキヤ王と民はへりくだった為、神の怒りが彼らに臨まなかった（歴代下 32:26）。

ニネベの人々が滅びから逃れられたのは、彼らがひたすら悔改めたからである（ヨナ 3:8~10、マタ 12:41）。

3. 神から顧みられる

もし人が罪から離れ、一心に神に立ち返るなら、神は彼を敵の手から救い出される（サム上 7:3）。

ザアカイは悔い改めた為、救いを受けた（ルカ 19:8-9）。

教会がもし悔い改めなかったら、立つことはできない(黙 2:5、3:19)。

四、悔い改めの力

1．真理による教化

ネヘミヤの時代のイスラエル人は、神のおきてに聞き従い悔い改めた。その為、彼らの信仰が復興した（民 8:8-10、18、9:1-4）。

ニネベの人はヨナが宣べ伝えた神の言を信じ悔い改めた（ヨナ 3:1-5）。

神の言はもろ刃の剣よりも鋭く、精神と靈魂、関節と骨髓とを切り離すまでに刺し通せる。ゆえに、神の言によって自分の罪を自覚できる(ヘブ 4:12、使徒 2:37、I コリ 14:24-25)。

2．神の奇跡を見た

エリヤの時代の人々は、神の奇跡を見た後悔い改めた（列王上 18:21-23、37-39）。

人は神の力あるわざを見た後、悔い改めるべきだと主は言った（マタ 11:20-24）。

神は奇跡によってパウロを悔い改めさせた（使徒 9:1-9、I テモ 1:13-16）。

3．主によるせっかん

災害を降らす事は、人を悔改めに導く一つの手段である（列王上 8:46-50、黙 9:20-21、16:9）。

士師時代の人々は、敵からの虐待に遭う時、神に向かって助けを求めた（士 3:7-9、12-15、4:1-3、6:1-6、10:6-10）。

逆境の日には考えて悔い改めよ（黙 2:5、伝 7:14）。

4．神の恩恵

悔改めの心は神から与えられたものである（使徒 5:31、11:18）。

聖霊が罪とさばきとについて世の人の目を開く（ヨハ 16:8）。

自分の過失を自覚できるよう神に求め、道から逸れてしまった時戻れるように神に祈るべきである（列王上 18:37、詩 19:12、エレ 31:18、II テモ 2:25）。

第10章 バプテスマ

一、バプテスマの由来

1．旧約時代のバプテスマ

イスラエル人は、汚れたら洗濯をしたり、水で入浴したりしなければならなかった。これによって初めて清められた(レビ 15:5～13、16、16:26、28、17:15～16)。この清めの儀式が、旧約聖書に書かれてあるバプテスマである。

旧約聖書には、異邦人が入信した記載がある。例えば、ケニズ人カレブ(ヨシュ 14:6)、カナン人の遊女ラハブ(ヨシュ 6:25)、モアブ人ルツ(ルツ 1:22)等がいる。言い伝えによると、古代ユダヤ人は異邦人の男の子を受け入れる時、まず割礼を受けさせ(創 17:12～13、出エジ 12:43～44、48～49)、それから水の中で全身を浸すバプテスマを受けさせた。

2．バプテスマのヨハネの洗礼

主イエスは祭司長や律法学者たちにこうたずねた「ヨハネのバプテスマは、天からであったか、人からであったか」(ルカ 20:4)。この聖句から見ても分かるように、主は、ヨハネのバプテスマが神の意志からであったと認識していた。ヨハネのバプテスマの目的は、人々を悔い改めさせ、後に現れる救い主を待つ準備をさせることにあった(マタ 3:1～12、ルカ 3:7～17、7:29)。彼の洗礼方式は、浸礼である(ヨハ 3:23、マタ 3:15～16)。

3．新約時代の教会のバプテスマ

ヨハネのバプテスマは、旧約時代の清めの儀式とユダヤ教が弟子を受け入れる時に行われた洗礼の影響を受けたかどうか、また新約時代の教会におけるバプテスマはヨハネのバプテスマの影響を受けたかどうかは問題ではない。知っておかなくてはならないのは、ヨハネのバプテスマは自分の意志によるものではなく(ルカ 20:4)、また教会のバプテスマは、主がはっきり弟子たちに行うよう命令したものである(マタ 28:19、マル 16:15～16)。しかし、ヨハネのバプテスマと教会のバプテスマとは、意義と効能が違う(参考—使徒 19:3～5)。

二、バプテスマの効能

生まれ変わる

主は言った「だれでも新しく生まれなければ、神の国を見ることができない」(ヨハ 3:3)。

水と霊とから生まれることが、神の国に入るための必要条件である(ヨハ 3:5)。バプテスマを受ける事は、水によって生まれ変わることである。その為、パウロはこの事を「再生の洗い」と言った(テト 3:5)。

アダムは主イエスを預表している(ロマ 5:14、I コリ 15:45)。神はアダムを熟睡

させ、彼のあばら骨（流血）を取って、エバを創った（創 2:21～25）。これは、主が死を受け、脇を刺されて尊い血を流し、バプテスマを通して人間を作り直し、教会である新婦を立てることを表している（ヨハ 19:30～35、エペ 5:25～27、使徒 20:28）。

罪が許される

罪の許しは、主イエスの御血によるのみである（エペ 1:7、I ペテ 1:18～19）。主の血は、水（バプテスマ）によって人の罪を洗い流す。（ヘブ 9:13～14、10:19～22、ゼカ 13:1、I ヨハ 5:6～8）。

だからバプテスマは、私たちの罪を許し、罪を洗い落とすことができる（使徒 2:38、22:16）。

バプテスマは主の死に歸し、古き人（罪人）と主が共に十字架に付けられ、罪のからだは滅び、私たちが再び罪の奴隷になることがない為だとパウロは言った。なぜなら、既に死んだ者は、罪から解放されているからである（ロマ 6:3～7）。これを見ても、“罪のからだの滅び”はバプテスマに頼るより他ならない。

救われて義とされる

「救われる」とは、罪の権勢と滅亡の穴から救われるという意味がある。バプテスマには、罪を許す効能を持っている為、主は「信じてバプテスマを受ける者は救われる」（マル 16:16）と言われた。

ペテロは言った「この水はバプテスマを象徴するものであり、イエス・キリストの復活によって、今やあなた方をも救うのである」（I ペテ 3:20～21）。

主の御血によって、私たちの罪がきれいに清められた以上、私たちは真の神の御前で義とされる（ロマ 5:9、3:25）。

キリストに歸する

私たちは以前、キリストを知らず、イスラエルの国籍がなく、約束されたいろいろの契約に縁がなかった（エペ 2:12）。

主は自らの血で、あらゆる部族、国語、民族、国民の中から人々をあがない、神に歸するようにされた（黙 5:9～10）。

バプテスマを受けた私たちは、キリストを着、キリストに合い、キリストにあずかった。これによってアブラハムの子孫となり、約束の嗣業を得られるのである（ガラ 3:27～29、ロマ 6:3）。

アダムのあばら骨から創った女エバはアダムの骨と肉であって、彼ら二人は一体とならなくてはならない（創 2:22～25）。同様に、主の尊い血によって生まれ変わった子こそ、主の新婦であって、彼女は主に歸するばかりでなく、主と一体化しなければならない（使徒 20:28、II コリ 11:2、エペ 5:29～32）。

神の子となる

人は元々神の子であったが（ルカ 3:38）、罪を犯した為、この尊い身分を失った（ヨハ 8:44、I ヨハ 5:19）。

「律法の下にある者をあがない出し、わたしたちに子たる身分を授ける為である」(ガラ 4:4~5)。わたしたちがあがなわれたのは、キリストの尊い血によるのである(1ペテ 1:18~19)。主の御血は、わたしたちをあがない、真の神に帰するようにするばかりでなく(ヘブ 10:19~22)、さらに、わたしたちを神の子と成らせるのである(エペ 1:4~5)。

主イエスがバプテスマを受けて水から上がられたとき、神の霊は彼の身に降り、天から「これはわたしの愛する子」という声がした(マタ 3:16~17)。もし、わたしたちが受けたバプテスマが聖書に合っているならば、罪は必ずあがなわれ、神の子となる。そして、神が下さる聖霊によって、神が受け入れて下さった子であることを証明して下さる(ガラ 4:6、ロマ 8:15~16)。

三、バプテスマの方法

1. 全身を水に浸す

預表によると...

ノアの一家が水によって救われた預表

「この水はバプテスマを象徴する」(1ペテ 3:20~21)。当時、大雨と洪水によって、箱舟の周りが完全に水で包囲された(創 7:17~20)。

イスラエル人が紅海を渡って救われた預表

紅海を渡ることはバプテスマを預表する。当時、神はイスラエル人の為に、一つの逃げ道を開いてあげた。そして彼らは、海へ入り、乾いた道を歩いた。水は高く上げられ、彼らの両側に壁となった(1コリ 10:1~2、イザ 43:16、出エジ 14:21~22)。

預言によると...

「神は我々のもろもろの罪を海の深みに投げ入れる」(ミカ 7:19)。

「その日には、罪と汚れとを清める一つの泉が、ダビデの家とエルサレムの住民とのために開かれる」(ゼカ 13:1)。

海の深き所をあがなわれた者の過ぎる道(イザ 51:10)。

旧約時代の清めの条例によると...

旧約時代の清めの規定は、新約時代のバプテスマと関連がある。もし体が汚れたら、きれいに洗わなければならなかった。では、その洗い方はどうであったか? レビ記 15:13には“流れ水に身をすすぐ”とあり、レビ記 15:5~8、10~11、18、16:4、民 19:7~8、19には“水に身をすすぐ”とある。また、列王下 5:10には“身を洗う”とある。これらの節には『水を使う』事が書かれてあり、これを原文のヘブル語で見ると“rachats, Rachats”すなわち、“水の中に浸る”との意味で書かれてある。更に、“Baptize”(洗礼を施す)という言葉にも“浸す”や“沈める”の意味がある。これは、初期の教会が行っていた事である。

原文学者の研究によると...

バプテスマを“施す”、“受ける”、また“洗礼”等の原文(ヘブル語とギリシャ語)によると、「浸かる」、「沈む」、「漬ける」との意味がある。(ギリシャ語にも“注ぐ”、“洗う”、“振り撒く”、“清める”等の動詞があるが、これらの言葉はバプテスマを表す言葉として聖書に使用されていない。)その為、バプテスマの時に全身が水の中に浸ることによって、始めて原文の意味に合うのである。

ギリシャ語聖書のみを使うギリシャ教によると...

原文(ギリシャ語)によるバプテスマの正しい方法を知っている彼らは、初めから今に至るまで常に浸礼を施してきた。それは、バプテスマはもともと浸礼であることを物語っている。

主イエスと使徒たちの手本によると...

「主イエスはバプテスマを受けるとすぐ、水から上がられた」(マタ 3:16)。「イエスはヨルダン川でヨハネからバプテスマをお受けになった。そして、水から上がられ...」(マル 1:9~10)。ヨハネはサムリに近いアイノンでバプテスマを施していた。そこには“水がたくさんあった”からである(ヨハ 3:23)。ヨハネがバプテスマを施した所は、水が多くある所であった。もし浸礼でなければ水が多くある必要はないのだから、イエスが受けたバプテスマも浸礼なのだと分かる。

ピリポは宦官にバプテスマを施した時、「二人とも水の中に降りて行き、ピリポが宦官にバプテスマを授け、二人が水から上がった...」(使徒 8:38~39)。もし、滴礼であるなら、二人が一緒に水に入る必要はない。

浸礼の規則について一つの証拠がある。それは1923年に、エチオピアの王子はアメリカへ行った。そこで彼は、「現在にいたるまで、彼らはピリポから伝えられた教えを変えずに守っている。彼らが受けたものとは即ち、洗礼と土曜日と安息日として守る事である。彼の国には 3600 万人が皆安息日を守っている。」と言った。(ペキンアッセンブリ会報より)

バプテスマに対するパウロの解釈

パウロはバプテスマについて、「主と共に葬られ、共によみがえられる」(コロ 2:12、ロマ 6:4)と解釈した。葬る以上、全身を葬らなくてはならない。もし、水を掛けたり、或いは水を撒く礼ならば、埋葬と復活の象徴にはならない。

三千人が浸礼を受けた事について

五旬節に三千人がバプテスマを受けたことについてある者は疑問を抱いている。もし、浸礼であるなら、エルサレムのどこにそれほど多くの水があるのかという事である。しかし、聖書の記載によると、エルサレムには、王の池(ネヘ 2:14)、シロアムの池(ネヘ 3:15、ヨハ 9:7)、ヒゼキヤ池(列王下 20:20)、ベテスダの池(ヨハ 5:2)、上の池(列王下 18:17、イザ 7:3、36:2)や下の池等がある。城外には、ケデロンの谷(ヨハ 18:1)がある。

2 . 顔を下に向ける

主が死んだ時の形状に見習う（ロマ 6:5、8）

主が亡くなった時の形状は、頭を下げた状態である（ヨハ 19:30）。

罪人が許しを求める時にあるべき態度

人の罪は頭を超える為、顔を上げることはできない（詩 38:4、エズ 9 ; 6）。

罪の重荷によって頭が上げられない（詩 40:12、ルカ 18:13）。

罪人は強情になってはいけない（使徒 7:51、ヨブ 10:15）。

3 . 主イエスの御名による

主の託け（マタ 28:19）

父、子、聖霊の名とは即ち「イエス」である。

使徒はこの奥義を知っていた為、主の御名によってバプテスマを施した（使徒 2:38、8:16、10:48、19:5）。

「イエスの名によって罪の許しが受けられる」（使徒 10:43、4:12）。

四、バプテスマを受ける人と施す人

(一) バプテスマを受ける人の条件

1 . 信じる（マル 16:16）

イエスは唯一の救い主であることを信じる（使徒 4:12、16:31～33）。

イエスが私たちのために亡くなり、そして三日目に復活したことを信じる（I コリ 15:3～4、ロマ 10:9）。

バプテスマを通し、イエスの尊い血によって私たちの罪が清められることを信じる（I ペテ 1:18～19、ロマ 3:25、ヘブ 9:13～14、22、ヨハ 19:34、I ヨハ 5:6～8、ゼカ 13:1）。

本教会のバプテスマを施す時、バプテスマの水の色が血の色に変わるのをよく目の当たりにすることがある。これは、主の御名によるバプテスマの水が、主の尊い血であることを証しする。バプテスマの後、体の不自由な人が歩けるようになり、精神病や難病にかかっていた人が水から上がると平安を得るようになった。これらの事実は皆、神の証明であり、私たちをより深く信じさせ、バプテスマが単なる形式的なものではなく、神の権能であり、必ず罪を許す恵みがあると信じさせるのである（参考—マル 5～12 章）。

聖霊が共にいる真の教会を信じ、そこで主に仕え、離れてはならない（ロマ 8:9、エペ 1:23、4:4、ガラ 4:26、ヨハ 15:1～6、I ヨハ 2:19）。

2 . 悔い改める（使徒 2:38）

自分の罪を認める（マタ 3:6、詩 32:3～5、使徒 19:18～19）。

罪から離れる（使徒 3:26、ヨナ 3:5～10、詩 37:27）。

真の神に立ち帰る（イザ 55:7、使徒 26:20、20:21）。

善を行う決意をする（ルカ 3:7～14、ミカ 6:6～8）。

3 . 志を立てる

- 1 十字架を背負って、主に従う覚悟をする（ルカ 14:25～33）。
- 2 神の国に入るのには、多くの苦難を経なければならない（使徒 14:22、I テサ 3:3）。
- 3 手をすきに掛けてから、後ろを見てはならない。志を立ててあらゆる困難を克服し、主に頼って最後まで忍耐し、全行程を歩き終えなければならない（ルカ 9:61～62、マタ 24:13、使徒 20:24）。

心から信じて確実に悔い改め、断固とした意志をもっている求道者なら、いつでもその要求に応じてバプテスマを施してよい（使徒 2:37～41、8:36～38、16:15、30～33）。

（二）バプテスマを施す人の資格

1 . 身の清い人（民 19:18）

バプテスマを行う人は正しい方法でのバプテスマを受けてから初めて清い人になれる（使徒 2:38）。自分が清くなってから、初めて清くない人にバプテスマを施すことが出来るのである。祭司が聖職に就く前も、必ず水で洗わなければならない（出エジ 29:4）。主イエスが御働きに出かける前、彼自身には罪が無いにもかかわらず、私たちの模範としてバプテスマを受けられた（マタ 3:13～16）。

2 . 主に遣わされた人

「遣わされなくては、どうして宣べ伝えることがあるのか」（ロマ 10:15）。人間によって立てられ、また遣わされるだけでは、神の御働きに参加することは出来ない。主は言った“父が私をお遣わしになったように、私もまたあなた方を遣わす”と言って、彼らに息を吹きかけて仰せになった。“聖霊を受けよ”（ヨハ 20:21～22）。父は聖霊を借りて、イエスを遣わした（ルカ 4:18～19、ヨハ 1:32～34）。だから主も聖霊に頼って弟子たちを遣わした。聖霊を持っていない人は、主に遣わされていないことになる。そうである以上、罪を許すバプテスマを施す権能がない（ヨハ 20:22～23）。主は昇天なさる前に弟子たちにエルサレムから離れないで、聖霊が彼らの上に降るのを待ち、それから伝道に行くように言った原因はここにある（使徒 1:4～8）。

バプテスマが罪を許す効能は、キリストの血と、人の信仰と、主の名と聖霊の力によるのである（ロマ 3:25、I コリ 6:11）。その為、バプテスマを施す者がもし聖霊を受けていなかったなら、神が彼と共にいない為（Iヨハ 3:24）、即ち神に遣わされていない為、彼の施したバプテスマは無効になる。

バプテスマは一度しか受けられない。しかし、もし間違ったバプテスマを受けた場合は、エペソの信者のようにもう一度正しい方法でのバプテスマを受ける必要がある。こうして初めて彼の罪が許される。これによって、初めて約束の聖霊を受けることが出来る（エペ 4:5、使徒 19:1～7、2:38）。

五、嬰兒のバプテスマ

- 1．生まれただけの嬰兒にも既に原罪がある（詩 51:5、ロマ 5:13～14）。
- 2．イスラエル人が紅海を渡った時、誰一人子供をエジプトに残さなかった（出エジ 10:10、民 14:31）。
- 3．イスラエルの男の子は聖別する為に、生まれてから八日目に割礼を受けなければならなかった（創 17:9～14、コロ 2:11～12）。
- 4．聖書に「全家族がバプテスマを受ける」事が記載されている為、当然嬰兒もその中に含まれる（使徒 16:15、32～34、18:8、I コリ 1:16）。
- 5．神の恵みは子供にまで及ぶ（詩 115:13、使徒 2:38～39）。
- 6．主イエスは子供を拒まない（マタ 18:13～15、ルカ 18:15～16）。

嬰兒がバプテスマを受けるのは、親の信仰による（参考—マタ 15:28、ヨハ 4:49～51）。

嬰兒がバプテスマを受けた後、親が指導する責任を負う（エペ 6:4、箴 22:6、創 18:19、申 6:6～7）。

バプテスマを受けてから、再び罪を犯してはならない（ヘブ 10:26～29、6:4～8、ヨハ 5:14）。

第十一章 洗足

一、 洗足式の由来

1. 主の洗足はユダヤ人の習わしと違う

最後の晩餐の時、主は水をたらいに入れて弟子たちの足を洗った（ヨハ 13:1~5）。この聖句を元に、今日教会では洗足式が行われている。当時主が言われた幾つかの言葉から、主の洗足はユダヤ人の習わしとは違うことがはっきり分かる。それと同様に、ヨハネによる福音書 13 章では聖餐の設立について書かれてあるが、最後の晩餐で行われた聖餐と普段過越の祭で行われる聖餐は別のものであることがはっきり分かる。（参考—ルカ 22:19~20）。主はペテロに言った「もしわたしがあなたの足を洗わないなら、あなたはわたしとなんの係わりもなくなる」（ヨハ 13:8）。又言った「あなた方はきれいなのだ。しかし、みんながそうなのではない」（ヨハ 13:10）。もし主の洗足が普段、習わしとして行われている洗足と同じなら、それが“（心の）きれいさ”と“主との係わりをもつ”ことと何の関係があるのか。

2. 主は弟子たちに同じようにしなさいと命じられた（ヨハ 13:5）

主は弟子たちの足を洗ってから彼らにこう言った「わたしがあなた方にしたとおりに、あなた方もするように、わたしは手本を示したのだ」（ヨハ 13:15）。また、主が昇天なさる時にも弟子たちにこう言った「あなた方に命じておいた一切の事を守るように教えよ。見よ、わたしは世の終わりまで、いつもあなた方と共にいるのである」（マタ 28:20）。洗足は主の言い付けである以上、軽んじてはいけない。

3. もし行えば幸いだと主が約束してくださった（ヨハ 13:16~17）

数多くある主の命令を私たちはみな軽んじたり、断ったりしてはいけない。従順な神の子として私たちは、勤勉に、かつ注意して洗足式を行わなくてはならない。主イエスは私たちに、「もしこれらの事が分かっている、それを行うなら、あなた方は幸いである。」（ヨハ 13:17）と言われた。もし、これが主からの命令であつたら、それを行わないでいられるであろうか？

二、 洗足式の意義

1. 主の大きな愛を表す（ヨハ 13:1）

主イエスは愛によって弟子たちを選んだ。しかし、弟子たちは自分たちの中で一番えらいのは誰かと争った（マル 10:30~45）。もっと悲しい事は、十二弟子の一人であるユダは、サタンの惑わしによって主を裏切ろうとした（ヨハ 13:2）。しかし主は、弟子たちに対する愛を表す為に、またお手本を示すために、彼らに洗足を施された（マタ 12:20、エゼ 18:32）。

私たちが主に見習って永遠の愛、大きな愛をもってお互いに愛し合わなければな

らない(ヨハ 13:34~35、Iヨハ 3:16~18)。

2. 弟子たちが聖潔であるようにと表明する(ヨハ 13:10~11)

主は言った「すでにからだを洗った者は、足のほかは洗う必要がない。全身がきれいなものだから。あなた方はきれいなものだ。しかし、みんながそうなのではない」(ヨハ 13:10)。“洗足”は“洗礼”に喩えられる。その意味は、主を信じてバプテスマを受ければ罪が許される。もし、“足”(行いの象徴 - 箴 4:14、26~27)をきれいに保てれば、その人は聖潔な人となる。当時のユダはすでに汚れていたが、主は洗足を通して主の御旨を分からせて心の罪を取り除かせようとした。しかし、ユダは頑ななままついに滅びた(ヨハ 13:26~27)。

洗礼を受けて主に帰し、また主の洗足を受けた者は、「洗足式」の意義を知らなくてはならない。足を悪から離れる為に、歩む道に気をつけなければならない(箴 4:26~27)。誤って汚れたら、随時、御言による洗い(水は主の言の象徴)を受ける。それによって、全身が聖潔に保てる(エペ 5:26~27、ヨハ 17:17、19)。

3. 主のへりくだりと奉仕を表す(ヨハ 13:12~14)

足を洗った後、主は弟子たちに言った「主であり、また教師であるわたしが、あなた方の足を洗ったからには、あなた方もまた、互いに足を洗い合うべきである」(ヨハ 13:14)。当時、ユダが汚れていただけでなく、弟子たちの間でも高い地位を取るために、互いに妬み合っていた(マタ 20:20~28)。その為、主は僕の形をとって彼らの足を洗い、この手本を示した事によって、互いにへりくだって仕え合うよう彼らに教えた。

教会は、制度の面においても、精神の面においても、国家や社会と違い(マル 10:42~45)、また世の中の宗教団体とも違う(マタ 23:1~12)。その為、私たちは主の洗足から主の教えを学び、はかない名誉を貪らず、威張らず、謙虚に喜んで人に仕えなければならない(ガラ 5:26、ピリ 2:3、ロマ 12:16)。

4. 主の偉大な許しを表す

ユダは主に召され、彼に従い、特別主に愛されていたが、ユダは恩知らずで主を裏切って売ろうとした。それにも係わらず、主は彼を断らず、彼の足をも洗ってあげ、悔改めるようにしたのは、主が彼に対する偉大な許しを表している(参考—ヨハ 13:11~12、詩 41:9)。

神の大家族の中で、もめごとが起きたり、いら立ったり、濡れ衣を着せられたり、裏切られたりするのとは避けられないことである。そんな時、主が洗足のときに表した偉大な許しを思い出し、人の悪を計らずに、徹底的にその人を許すべきである(コロ 3:12~13、マタ 18:21~35)。

弟子たちが主と係わるようにする(ヨハ 13:8)。

ペテロが主の洗足を拒んだ時、主が「もし私があなたの足を洗わないなら、あなたは私と何の係わりがない」と言ったので驚いた。主の言葉は真実で、どの言葉

にも力があると信じていたからである（参考—マタ 5:37、24:35、ヨハ 12:48）。「主と係わらない」とは、主との関係がなく、救われまいと言う意味である（参考—エペ 2:12）。この言葉は、主の洗足が世の洗足と大いに違うことを示している。その為、主と係わりたいなら、主の洗足を受けなければならない。しかし、永遠に主の恵みにおいて神と係わりたいなら、洗礼（バプテスマ）を受けてから洗足式を受けなければならない。さらに、日常生活の中でもし過ちを犯したら、御言葉の勧告（御言の洗い）を受けなくてはならない（マタ 18:15～18、黙 22:14）。

三、 洗足式の方法

1. 洗足を施す人

洗足を施す者は、主を代表する者：洗足式は主の洗足を受ける為、洗足を施す者は、主を代表するのである（原則として長老、執事または伝道者によって行われる）。なぜなら、「わたしがつかわす者を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである」（ヨハ 13:20）。

主の手本に見習う（ヨハ 13:15～17）：自ら僕となり、へりくだって、たらいに水を入れ、一人ずつ洗い、最後に手ぬぐいで拭いてあげる（ヨハ 13:4～5）。

主の御名によらなければならない：主の御名によることは、主を代表することを表す（コロ 3:17）。洗足式は通常、兄弟は男の聖職者によって、姉妹は女の聖職者によって行われる。

2. 洗足を受ける人

主イエスを信じてから洗足式を受けることが出来る。この洗足式は一回しか受けられない。洗足式を受ける人は、洗足式の意義を理解しなければならない。感謝の気持ちで受け、しかも主イエスが洗足式で残した様々な教訓に見習い、それを守る志を立てなければならない。聖潔を保つために永遠に主と係わることが出来るようにするために、一生御言葉の洗いを受けなければならない（ヨハ 13:8、エペ 5:26）。

3. 互いに足を洗い合う

主の洗足は教訓のある儀式であり、これらの教訓は教会を設立する上で特に重要である。「互いに足を洗い合う」については、足を洗う習慣のあるところでは、へりくだった心と愛の心をもって互に行い、足を洗う風習がないところでは、日常生活において、洗足の意味と教訓を实践すべきである（ヨハ 13:14）。

第十二章 聖餐

一、 聖餐の設立

1. 聖餐は主イエスが自ら設立した（ルカ 22:19~20）

主イエスが売られる夜、エルサレムの広間にて弟子たちと共に過越の食事をした（ルカ 22:7~15）。

聖餐は過越の食事のなかで主イエスによって定められた。ルカ 22 章 17 節にある“杯”は過越祭の杯、19 節は“聖餐のパン”、20 節は“聖餐の杯”である。主がパンと杯を祝謝した後、聖餐式が成立した。

2. 主が設立したと同時に、弟子たちにも行うよう命じた（ルカ 22:19）。このように、教会も聖餐式を行わなければならない。

3. 主が昇天なされた後、再び聖餐についてパウロに啓示した（I コリ 11:23~25、参考—ガラ 1:11~12）。

二、 聖餐の意義

1. 主イエスの死を記念する（I コリ 11:26）

旧約時代に行われた過越の祭は、神がイスラエル人をエジプトから救われた恵みを記念する為に行われた（出エジ 12:21~27、13:3）。新約時代の聖餐は、私たちが救うために主イエスが苦難と死とを受けたことを記念する為に特別に行われる（ルカ 22:19、I コリ 11:24~25）。それゆえ、パンと杯を祝謝する前、聖職者は主イエスが受けた苦しみと死を会衆に説き、主の愛を思い起こさせる。

主は私たちのために馬小屋でお生まれ、貧しくなり、枕する所さえなかった（II コリ 8:9、ルカ 2:6~7、9:58）。主は私たちの罪過の為に死に渡され、むちで打たれ、嘲笑され、頭を叩かれ、つばをかけられ、いばらの冠をかぶらされ、十字架につけられた後、血を流し、死に至った（ロマ 4:25、マタ 27:18~50、詩 22:12~16）。

イエスは私たちの罪の為に、神に捨てられ、死を味わわれた（マタ 27:45~52、ヘブ 2:9、使徒 2:30~32）。

感謝な事に、イエスが刑罰を受けた事によって、私たちに平安が与えられ、彼が打たれた傷によって私たちは癒された（イザ 53:4~6）。

2. 主の血と体にあずかる（I コリ 10:16）

パンをさくことは主の体を捨てることを表す（I コリ 11:24、ルカ 22:19）。

杯は主の流された血を表す（I コリ 11:25、ルカ 22:20）。

パンと杯は祝謝された後、主のからだと血とになる（マタ 26:26~28、I コリ 11:29）。

主の肉を食べ、その血を飲む者には永遠の命があり、終わりの日によみがえる（ヨハ 6:53～54）。

聖餐を受ける事はとても神秘的なことである。パウロは当時のコリント教会にこう言った「病気になった者や死んだ者がいるのは、自分を吟味せず、ふさわしくないままで主のからだを頂いた為である」（I コリ 11:28～30）。それゆえ、罪を犯し、神に対して罪の自覚がある者は決して聖餐を受けてはならない。また、パウロはこの事と偶像に捧げる供え物とを比較した。前者は主との交わりであるのに対し、後者は“悪魔との交わり”（I コリ 10:19～20）である。イエスもこう言った「わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者はわたしにおり、わたしもまたその人におる」（ヨハ 6:56）。このように、聖餐は一種の神秘的な靈的交わりであり、自分を吟味して聖餐を受けることによって豊富な命を得られるだけでなく、主から見守られ、終わりの日に復活して霊体に変えて昇天する。その為、わたしたちは主の恩恵を認識し、感謝な気持ちをもって主の御再臨を待ち望むべきである。

三、 聖餐の施行

1 . 回数と時間

ある者は聖餐を年に一度、過越の祭の時に行えばいいと主張している。しかし、祭りは預表であって、私たちは守る必要はない（ガラ 4:10～11）。聖餐は“主を記念する”為に行い、これを通して主と靈的な交わりができる。それゆえ、イエスの御再臨まで回数の制限なしに幾度も行える（I コリ 11:26）。

聖餐の時間についてであるが、主が聖餐をおこなわれたのは夜であったが、昼間に十字架につけられた為、私たちは聖餐を行う時間を限定する必要はない。

2 . 聖餐の材料

種無パン：旧約時代の過越の祭では種を使用してはならなかった為、主は最後の晩餐の時も種無パンを用いた（レビ 23:4～6）。パン種は“悪意”と“邪悪”を意味する為、種入りのパンを主のからだの代わりに使ってはならない（I コリ 5:7～8、参考—マタ 16:5～12）。

一つのパン：主のからだは一つだけなので、人数が多い少ないにかかわらず、一つのパンだけを用いる。人数の多い時はパンを大きめに焼き、そのパンを会衆の人数に従って裂いて分ける（エペ 4:4、I コリ 10:16～17）。

ぶどう汁：ワインは既に発酵している為、これを無罪な主の血の代わりとして使用することはできない。また、聖餐の時に酒を使うのも好ましくない（レビ 10:8～9、エゼ 44:21）。主の杯はぶどう汁を用いなければならない（マタ 26:29、マル 14:25）。

3 . 聖餐を執る者

原則として聖典は、長老、執事、伝道者によって行われる(参考—出エジ 30:30)、主が聖餐の主人である為、主の御名によって行われる(マタ 18:20)。聖霊がある教会は神の国であり、その聖餐は主が共にいる宴である(マタ 26:29)。

聖餐の説教が終わった後、一同はひざまずき、主導者は知性の祈りによってパンを祝謝し、そして手で裂き、会衆に分配する(マタ 26:26)。また、杯もパンと同様に行う(マタ 26:27)。

4 . 聖餐を受ける心得

聖潔の準備：聖餐を行う1～2週間前に、予め会衆に通知し、この期間自分をよく吟味し、心身共に聖潔に保ち、古い種を取り除く(Ⅰコリ 5:6～8、11:27～28、10:18～21)。

主のからだと血であることをわきまえる：祝謝することによって、パンと杯が主のからだと血となる。それゆえ、聖餐を頂く者はみな、聖餐と普通の食事をはっきり区別する必要がある。さもないと、聖餐を軽い気持ちで受け入れた者には神の裁きが下される(Ⅰコリ 11:29～30)。

同じ場所で受ける：聖餐を受ける時、会衆は敬虔な態度で厳粛に受けなくてはならない。そして、パンや杯を決して会堂から持ち出してはならない。必ず一同が共に同じ場所で頂く(Ⅰコリ 11:33、10:16～17、参考—出エジ 12:46)。また、パンや杯を翌日まで残してはならない(参考—出エジ 12:10)。

本教会の信者のみ受けられる：まだ本教会のバプテスマを受けていない者は聖餐を受けてはならない。また、本教会の信者でも、死に至る罪を犯した者は、聖餐を受けてはならない(参考—出エジ 12:43、45、エズ 2:62～63、Ⅰコリ 11:27～30)。

5 . 聖餐を受けた後

主のために生きる志を立てる。なぜなら、主は私たちを愛し、私たちのために命を捨てたからである(Ⅱコリ 5:14～15、ロマ 14:7～8)。

聖潔な生活を送らなければならない。ちょうど旧約時代に、神の民が過越の祭の後種入れぬパンの祭りを守ったように(Ⅰコリ 5:6～13、出エジ 12:15～20)。

互いに愛し合う。主と結び合うだけでなく、主にあって一つのからだとなるように兄弟姉妹とも結合する。なぜなら、皆の者が一つのパンを共に頂いたからである(Ⅰコリ 10:17、12:12～27)。

主の御再臨、終わりの日の復活と天国に帰る事を待ち望む(Ⅰコリ 11:26、ヨハ 6:54、黙 19:7～9)。

第十三章 聖霊

一、聖霊とは

(一) 聖霊の性質

イエスが聖霊について論じた時、全て「それ」という代名詞を使ったことから（ヨハ 14:26、15:26、16:8、13～14）、聖霊にはパーソナリティー（人格）があることを証明している。

1. 「知能」の面から見ると、聖霊は証しができ（ヨハ 15:26）、善悪を見分けることができ（エペ 4:30）、万物を創造することができ（創 1:1～2）、また全てを極めることができる（I コリ 2:10）。
2. 「感情」の面から見ると、聖霊は悲しむことがあり（エペ 4:30）、人を慰め（使徒 9:31）、信者の代わりに求めてくれる（ロマ 8:27）。
3. 「決意」の面から見ると、聖霊は物事を決められ（使徒 15:28）、弟子たちがある所に行くのを禁止することができ（使徒 16:7）、働き人を遣わす事ができ（使徒 13:1～4）、また様々な賜物をそれぞれ思いのままに与える（I コリ 12:11）。

* 以上挙げた三つの面の事実は、聖霊の性質の信実性と正確さを十分証明することが出来る。

(二) 聖霊とは誰か

「聖霊」という言葉は、聖書の中で“神聖なる霊”又は“神の霊”と呼ばれている。これは、聖霊が神御自身であり、神と聖霊とは別々でない事を表している。また、神と聖霊は目には見えない。

1. 聖霊は唯一の真の神である

神は言われた「わたしはまたわが霊をあなた方のうちに置いて、わが定めに進ませ、・・・」（エゼ 36:27、参考—エゼ 37:14）。

イエスは言われた「神は霊であるから、礼拝をする者も、霊とまこととをもって礼拝すべきである。」（ヨハ 4:24）。

パウロは言った「働きは種々あるが、全てのものの中に働いてすべてのことをなさる神は、同じ（一つ）である。」（I コリ 12:6、ピリ 2:13）。

ペテロは言った「アナニヤよ、どうしてあなたは、自分の心をサタンに奪われて聖霊を欺いたのか...あなたは人を欺いたのではなくて、神を欺いたのだ。」（使徒 5:3～4）。

ヨハネは言った「神が私たちのうちにいますことは、神が私たちに賜った御霊によって知るのである。神は私たちのうちにおり、私たちも神のうちにおる。」（I ヨハ 3:24）。

2. 聖霊はイエス・キリストである

「あなた方は子であるのだから、神は私たちの心の中に、“アバ、父よ”と呼ぶ御子の霊を送って下さったのである。」（ガラ 4:6）。

「主は霊である。そして、主の霊のあるところには、自由がある。」（II コリ 3:17）。

使徒行伝 8:26～39：初めに、「主の使(聖霊)がピリポに向かって、“立って、南方に行き、エルサレムからガザへ下る道に出なさい。”(29)とあり、終わりに「主の霊が…」(39)とある。

使徒行伝 16:6：聖霊に禁じられた。7 節：イエスの御霊がこれを許さなかった。

「あなた方のうちには、キリストからいただいた油が留まっているので、誰にも教えてもらう必要はない。この油が、すべてのことをあなた方に教える。」(Iヨハ 2:27)。

「神の御霊があなた方のうちに宿っているなら、あなた方は肉におるのではなく、霊におるのである。もし、キリストの霊を持たない人がいるなら、その人はキリストのものではない。」(ロマ 8:9)。“神の霊”、“聖霊”、“キリストの霊”はもともと一つである。すなわち、聖霊は真の神であり、イエスである。

二、 聖霊の呼び名

1. 神の御霊；主の霊(マタ 3:16；イザ 11:2)。
2. 父の霊；主の御霊(マタ 10:20；ルカ 4:18)。
3. キリストの霊；イエスの御霊(ロマ 8:9；使徒 16:7)。
4. 真理の御霊；助け主(ヨハ 16:13；14:26)。
5. 聖なる霊；聖霊(ロマ 1:4；ルカ 2:26)。
6. 知恵の霊；知恵と啓示との霊(申 34:9；エペ 1:17)。
7. 滅亡の霊；主を恐れる霊(イザ 4:4；11:2)。
8. さばきの霊；正しい霊(イザ 28:6；詩 51:10)。

三、 旧約時代の聖霊の働き

(一) 創造について

1. 天と地が創造された時、神の霊が水のおもてをおおっていた。(創 1:2)。
2. 「あなたが霊を送られると、彼らは造られる。」(詩 104:30)。
3. 「その息をもって天を晴れわたらせる。」(ヨブ 26:13)。
4. 「神の霊はわたしを造り、全能者の息はわたしを生かす。」(ヨブ 33:4)。

(二) 人に力を与える

1. ヨセフに統治の能力をもたせる(創 41:38～41)。
2. ヨシュアに指導力を賜る(民 27:18～20、申 34:9、参考—ヨシュ 4:14)。
3. 七十人の長老に管理の才能をもたせる(民 11:16～17)。
4. ベザレルたちに特殊な能力を賜る(出エジ 31:2～6、35:30～31)。
5. サムソンに異常な力をもたせる(士 14:6、19、15:14、16:28～30)。
6. ダニエルに夢を解く力を賜る(ダニ 4:8～9、18、5:14、参考—ダニ 1:17～20)。

(三) 預言者を通して預言を伝えて警告する(ネヘ 9:30、ヘブ 1:1、ゼカ 7:12、II ペテ 1:21)

1. ダビデを通して伝える(サム上 16:13、サム下 23:2、歴代上 28:12)。

2. アザリヤを通してアサ王に勧告する（歴代下 15:1～7）。
3. ヤハジエルを通してヨシャパテ王に、必ず敵に打ち勝つことが出来ると預言する（歴代下 20:14～17）。
4. ゼカリヤに感動を与え、ヨアシに警告する（歴代下 24:20～22）。
5. ミカヤを通してアハブが負けることを預言する（列王上 22:13～25）。
6. エゼキエルは聖霊に導かれてカルデヤへ行き、そこで民に神の御言を伝えた（エゼ 11:22～25）。
7. ミカは主の御霊によって力に満ち、イスラエルの罪を指摘した（ミカ 3:8）。

四、 聖霊の象徴

（一）風の如く（使徒 2:2、ヨハ 3:8）

ヘブル語とギリシャ語の「風」、「息」、「霊」はみな同じで、一つの言葉を使う。次の教えによって、風が聖霊の象徴であることを知ることが出来る。

1. 風（息）は人間を生きさせる

人は息をして始めて生きられる。風は息である（エゼ 37:9～10）。

同様に、人の魂は神の霊があって始めて生きられる（エゼ 37:14）。

2. 風は雲と霧を吹き飛ばす（ヨブ 37:21）

風が吹けば雲は消え、空は晴れわたる。心に悩みや憂いがある時は、聖霊に満たされるように祈り求めれば、それらは解消され、心に明るさと喜びを取り戻すことが出来る（参考—ガラ 5:22、Iペテ 4:12～14、使徒 5:41）。

3. 人はその動きを見ることができる（ヨハ 3:8）

風自体は目で見ることが出来ないが、風に揺られている物を見ればその存在が分かる。聖霊もそれと同じである。聖霊を受けた時はその人の体の動き等を見れば分かる（使徒 2:33、例：使徒 8:18、10:44～47）。

（二）火の如く（使徒 2:3、イザ 4:4）

1. 火には熱がある

聖霊は人を熱心にさせる（使徒 2:44～47）。

エレミヤは聖霊に迫られ、心は火のように燃えた（エレ 20:9）。

2. 火には光がある（詩 105:39）

聖霊の光は私たちの心を照らす（II コリ 4:6）。

善悪を見分けることを教えてくれる（I コリ 2:10、エペ 1:17～18）。

私たちの道を導いてくれる（出エジ 13:21～22、40:38）。

3. 火には物を溶かす力がある

すべての汚れを洗ってくれる（イザ 4:3～4）。

それぞれの信者を一つの体にしてくれる（I コリ 12:13、エペ 4:3）。

（三）雨の如く（ゼカ 10:1）

1. 地を潤わす（イザ 55:10）

神（聖霊）は地を潤わす春雨の如く臨む（ホセ 6:3）。

人の心は元々“水の無い園”のようである（イザ 1:30）。

聖霊が上から降りてから、やせた荒野（人の心）は肥えた畑になって色々な素

晴らしい実を結ぶ（イザ 32:15～16、ガラ 5:22～23）。

2. 雨になる原因：神が水滴を吸い込んで雲にする（ヨブ 36:27）

雲が雨で満ちると、地にそれを注ぐ（伝 11:3）。

聖霊は、熱心に神に祈り求めた人に賜る（ルカ 11:5～13、使徒 1:14、2:1）。

（四）水の如く（ヨハ 7:37～39）

1. 渴きを潤す（ヨハ 4:13、詩 104:10～11）

聖霊は人間を永遠に渴かないようにする（ヨハ 4:14、黙 22:17、ピリ 4:11）。

2. 汚れを洗い落とす（民 31:23～24、ヘブ 10:22）

聖霊は人間を聖潔にする（ロマ 15:16、II テサ 2:13）。

水が低い所へ流れるのと同様に、聖霊はへりくだる人に与えられる（使徒 5:32、I ペテ 5:5）。

（五）注ぐ油（ヘブ 1:9、I ヨハ 2:27）

1. 油は神が聖別する為に使う（出エジ 30:25～29）

油が注がれて預言者になる（列王上 19:16）

聖霊を受けて始めて伝道が出来る（ルカ 4:18、使徒 1:4～5、8）。

油が注がれて祭司になる（出エジ 40:12～15）

聖霊の油を注がれた者は皆聖潔な祭司である（I ペテ 2:5）。

油が注がれて王になる（サム上 16:13）

聖霊を受けて支配権が手に入れられる（ヨハ 20:22～23、黙 5:10）。

2. ともし火の為に使う（レビ 24:2）

聖霊に満たされて始めて光を放つ事が出来る（マタ 25:1～13、5:16）。

（六）鳩（マタ 3:16）

1. 素直（マタ 10:16）

聖霊は人を平和、善意、柔和にする（ガラ 5:22～23、参考：イザ 65:25）。

2. ノアの放し出した鳩の預表（創 8:8～12）

一回目：水がまだ引いていない為に鳩が戻ったと言う事は、旧約時代にはまだ聖霊が世の中に留まらないことを預表している。理由は次の二つある。

1) まだ時が満ちていなく、主イエスがまだ人として来られていない為（ガラ 4:4）。

2) キリストはまだ世の人の為に死んでないので、人の罪はまだあがなわれていない為（ヨハ 7:37～39）。

二回目：オリーブの枝をくわえて戻った（参考：エレ 11:16、ホセ 14:6）のは、五旬節に聖霊が始めて下り、使命を果たして華麗なる実を持って戻る事を預表している（参考：ヤコ 1:18、黙 14:4）。

三回目：七日後（神が定めた一定の期間を預表する）、はとを放したが再び戻って来なかった。これは世の末に真の神が定めた時期が来ると、後の雨である聖霊が降り、真の教会が地上に建てられ、主の再臨の日まで働くことを預表している（参考：ヤコ 5:7～8、ヨエ 2:28～31）。

（七）証印（エペ 1:13）

1. 手続きができた事を証明する（エレ 32:10）

証印を押された事は、一定の要求が満たされた事を表す。聖霊の証印を押されたとは、救いの手続きを終えた証拠である。すなわち、信じて悔い改め、罪の許しのバプテスマを受けることだ（参考：マタ 3:15～17、使徒 2:38、19:2～7）。

2. すでに神に属する者である事を証明する（II テモ 2:19）

聖霊が無ければキリストに属さない（ロマ 8:9）。

3. 天国への保証を得る（エペ 4:30）

印を押した後、それを取り消す事ができない（エズ 8:8、ダニ 6:15～17）。

聖霊は天国をつぐことの保証である（II コリ 5:4～5、エペ 1:14）。

五、 聖霊を賜る約束

真の神が、御自身の栄光ある霊を罪を犯しかつ卑しい世人に賜わることは、とても尊い事である。それはいくら感謝しても足りない。以下に挙げるものは、聖霊に関する預言と預表である。

（一）預言者たちの預言

1. 明らかな約束

「私の戒めに心をとめよ。見よ、わたしは自分の思い（わが霊）を、あなた方に告げ、わたしの言葉を、あなた方に知らせる。」（箴 1:23）。

「わが霊をあなたの子らにそそぎ、わが恵みをあなたの子孫に与える。」（イザ 44:3、32:15）。

「わたしは彼らのうちに新しい霊を授ける。」（エゼ 11:19～20、36:26～27、37:14、39:29）。

「その後わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ。」（ヨエ 2:28～29、ゼカ 12:10）。

バプテスマのヨハネはこう言った：「この方は、聖霊と火とによっておまえたちにバプテスマをお授けになるであろう。」（マタ 3:11）

2. 隠された約束

「主はあなたがたの地に雨を、秋の雨、春の雨とともに、時にしたがって降らせる。」（申 11:14、ヨエ 2:23～24、エレ 5:24）。

「一つの川がある。その流れは神の都を喜ばせ、いと高き者の聖なるすまいを喜ばせる。」（詩 46:4、参考：黙 22:1、ヨハ 7:38、エゼ 47:9）。

「その日には、生ける水がエルサレムから流れ出て、その半ばは東の海に、その半ばは西の海に流れる。」（ゼカ 14:8）。

（二）主イエスの約束

1. 死を受ける前の約束

「私を信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その腹から生ける水が川となって流れ出るであろう。」（ヨハ 7:37～39）

「私は父にお願いしよう。そうすれば、父は別に助け主を送って、いつまでもあなたがたと共におらせて下さるであろう。」（ヨハ 14:16～18）。

「真理の御霊が来る時には、あなたがたをあらゆる真理に導いてくれるであろう。」（ヨハ 16:13、参考：ヨハ 14:26、15:26、16:7、16、ルカ 11:13）。

2. 復活後の約束

「彼らに息を吹きかけて仰せになった、“聖霊を受けよ”。」(ヨハ 20:21~23)。

「私の父が約束されたものを、あなたがたに贈る。」(ルカ 24:49)。

「あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう。」(使徒 1:4~5、8)。

六、 聖霊が降った

真の神は契約を守り、恵みを施す神である(申 7:9)。神は常に真実であり、偽る事が無い(II テモ 2:13)。神の約束は時が来ると必ず実現する。

(一) 先の雨が降る

1. ヨハネはイエスが聖霊によるバプテスマを授けることを知っていた(ヨハ 1:32~33、マタ 3:11)。
2. イエスがこの世にいた時、聖霊はまだ降っていなかった。なぜなら、彼はまだ罪人の為に死を受け、復活し、昇天なされていなかったからである(ヨハ 7:38~39)。
3. 主は言われた「もし私が去って行けば、あなた方のところに助け主が来る。」(ヨハ 16:7)。
4. 弟子たちは主の言いつけに従って、聖なる町で聖霊の降臨を待った(使徒 1:4~5、12~14)。
5. 五旬節の日(主が昇天なされてから 10 日目)に約束の聖霊が降った(使徒 2:1~4、16~18)。
6. 使徒時代では、イエスを信じて切々と祈り求める者はみな、聖霊を受ける事が出来た(使徒 8:14~20、10:44~47、11:15~17、15:8、19:1~7、エペ 1:13~14)。
7. 「彼は秋の雨と春の雨を時にしたがって降らせる。」(エレ 5:24)。“秋の雨”、“春の雨”と言うのは、聖霊の象徴であり、「先の雨」、「後の雨」とも訳されている。前者は秋の種まきの前に降り、後者は春の刈入れの前に降る。五旬節の聖霊降臨が最初であり、初期教会の種まきの時に降ったものである為(使徒 1:8)、それが先の雨の聖霊であることが分かる。

(二) 聖霊降臨が止まる

約束の聖霊はすでに降臨したが、教会に変節や異端がはびこり、俗化された教会から聖霊が離れていった。この事は偶然の事ではなく、神はあらかじめこの事が起こることを知っていた。以下がその証拠である。

1. 聖霊降臨が止まる事の預言

淫行(この世と妥協した為、神に対し不忠実になる)の故、雨はとどめられ、春の雨は降らなかった。(エレ 3:2~3)。

ぶどう畑に野ぶどう(変わった品種)を結んだ為、神は雲に命令をして雨を降らさないようにした。(イザ 5:3~7)。

住む者の悪のゆえ、神は川を野に変わらせ、泉を乾いた地に変わらせた(詩 107:33~34)。

「あなたは悪を行って主を捨てた為、主はあなたの地の雨をちりとほこりに変わらせる。」(申 28:20~24)。

エリヤの時代、アハブ王とイゼベルの背教により、神はイスラエルの国に雨を降らせなかった。(王上 16:29~17:7)。これは真の神が背教の教会には聖霊を降らせないことを預表する。

2. 使徒教会の墮落

使徒時代にすでに“違った福音”を伝える人がいた事により、本来の福音が変えられた。(ガラ 1:6~9)。

故にユダは聖徒たちに、ひとたび伝えられた信仰のために戦う事を熱心に勧めた(ユダ 3)。

黙示録二、三章にある 7 つの教会の内容から、使徒教会が確かに墮落して俗化していたのが分かる。

主の教えに従わない以上、主はどうやって教会と共にいられようか?(マタ 28:20、参考:ヨシュ 7:12)。

(三) 後の雨が降る

1. 後の雨が降る預言

「シオンの子らよ。主によって喜び樂しめ。主はあなた方を義とするために秋の雨を賜い、またあなた方のために豊かに雨を降らせ、前のように、秋の雨と春の雨とを降らせられる。」(ヨエ二:23、申 11:14、エレ 5:24)。

農夫は、地の尊い実りを、前の雨と後の雨とがあるまで、耐え忍んで待っている(ヤコ 5:7)。秋の雨は十月末から十二月下旬まで降り、春の雨は三、四月に降る。“雨”は聖霊を象徴しており、雨が二回に分けて降る事は、聖霊が二回に分けて下る事を預表している。使徒時代に神は聖霊を“先の雨”として降らせた。神は刈り入れ(世の末の前に人類を救う)仕事を全うする為に、“後の雨”の時に聖霊を降らせた(ヨエ 2:28~31)。

「あなた方は春の雨の時に、いはずまを造った主に雨を請い求めよ。」(ゼカ 10:1)。

2. 後の雨によって真の教会を再建する預表

エリヤが雨を求めた預表

エリヤは神に、三年半雨を降らせず、再び降らすよう祈った大預言者である。マラキ書四章五節には、「主の大いなる恐るべき日が来る前に、預言者エリヤを遣わす」と預言している。これは世の末にエリヤのように働く真の教会が出現する事を預言している。エリヤは民を導いて異端、邪道から離れさせ、神の怒りを沈ませ、神の慈しみによって雨が降った(列王上 17:1、18:1、21~22、41~45、参考:ヤコ 5:17)。同様に、世の末の真の教会も聖霊の力を頼りにし、ひとたび伝えられた信仰のために戦って、人々が偶像と邪道の道から離れるよう導き、父の心をその子供たちに向けさせ、約束の聖霊を賜る。これは主が来て、のろいをもってこの国を撃つことのないようにするためである(ミカ 3:8、マラ 4:6)。

エリヤもバプテスマのヨハネを預表した。ヨハネは主イエスがこの世に来られた時の先駆者であったように、世の末に主が再臨する前に真の教会が現れ、主の為に道を用意する(マタ 17:10~13、ルカ 1:15~17、イザ 40:3~5)。

聖なる宮を再建する預表

旧約時代にソロモン王が建てた宮殿は、王たちや民らがしばしば罪を犯したの
でついには敵によって焼かれ、残った民らもバビロンへ捕虜となって連れ去られ
た(列王下 25:8~12)。預言によると、彼らは70年間捕らわれの身となった。
満70年の時、真の神は預言を成就する為、ペルシャ王クロスを感動し、彼らを
帰国させ、聖なる宮を建て直すようにした(歴代下 36:17~23)。

霊的な聖なる宮、すなわち真の教会(I コリ 3:16~17、6:19、エペ 2:19~20、I
ペテ 2:5)も同じように、設立—破壊—再建を経ることを預表している。「70年」
は、真の神が定めたある時期を預表している。今は満70年になって、すでに
聖なる宮を再建するときが来た(参考:イザ 58:12、61:4、アモ 9:11)。古代の
物質的な聖なる宮を復興したとき、真の神の霊に頼った(ゼカ 4:6)。末の世に
は真の教会が建てられるが、神が聖霊を降らさないわけが無い。実際に、後の
雨の聖霊は既に降りてきた。神に属する民は、聖霊の力に頼って御働きを行う
のである(参考:ネヘ 6:3、使徒 1:8)。約束通り、主の家の後の栄光は、前の
栄光よりも大きい(ハガ 2:9)。

3. 後の雨によって建てられた真の教会はどこから出現するのか?

「主なる神は東のかた、エデンに一つの園を設けて、その造った人をそこに置か
れた」(創 2:8)。

「エデンの園の東に設け…そこに命の木があった」(創 3:24)。

「神の栄光が東の方からきたが、その来る響きは大水の響きのようで、地はその
栄光で輝いた」(エゼ 43:2、参考:黙 19:6~7、21:10~11)。

「また、もうひとりの御使いが生ける神の印を持って、日の出る方から上ってく
るのを見た」(黙 7:2、参考:エペ 1:13)。

イエスはベツレヘムで生まれ(マタ 2:5~6)、後にエジプトへ移られた(マタ 2:13)、
エジプトから戻られた後、一人も預言者が出た事の無いナザレでお育ちになられ
た(ヨハ 1:46、7:52、マタ 2:23)。

七、新約時代の聖霊の働き

1. 力を賜わる(使徒 1:8、ルカ 24:49、I コリ 2:4、エペ 3:16、使徒 4:13、31、13:9
~12)。
2. 人に罪を分からせる(ヨハ 16:8、使徒 2:37、参考:I ヨハ 2:27~28)。
3. 人を導いて主を認識させる(I コリ 12:3、ヨハ 15:26、使徒 16:14)。
4. 真理を啓示する(ヨハ 16:12~13、エペ 3:5、1:17~19、I コリ 2:11)。
5. 信者に代わって祈る(ロマ 8:26~27、ゼカ 12:10、I コリ 14:2、14、15、エペ 6:18、
ユダ 20)。
6. 人を聖別させる(ロマ 15:16、II テサ 2:13、I ペテ 1:2)。
7. 人に御霊の実を結ばせる(ガラ 5:22、23、黙 22:1、2)。
8. もろもろの霊的な恵みを賜わる(I コリ 12:4~11)。

八、聖霊と救いの関係

1. 神の国に入るには聖霊によって生まれ変わらなければならない(ヨハ 3:5、テト

- 3:5、使徒 2:38、サム上 10:6)。
2. 永遠の命を賜わる(ガラ 5:25、エゼ 37:14、I コリ 15:45、黙 22:17、I ヨハ 5:12、ロマ 8:2)。
 3. 聖霊がなければキリストに属さない(ロマ 8:9、II テモ 2:19、I ヨハ 3:24)。
 4. 神の子である事を証明する(ロマ 8:16、ガラ 4:6~7、マタ 3:16~17)。
 5. 天国を受け継ぐ保証である(エペ 1:13~14、II コリ 1:21~22)。
 6. 世の末に人を生き返らせる(ロマ 8:11、II コリ 5:1~5、ピリ 3:21)。

九、 聖霊を受けた証拠

主を信じる事と聖霊を受ける事は二つの違った事柄である(使徒 19:1~2、参考：使徒 1:4~5)。

同じように、水のバプテスマを受ける事と霊のバプテスマを受ける事は二つの違った事柄である(使徒 8:15~16)。

1. 使徒たちは異言を語ることによって聖霊を受けた証拠とした(使徒 10:44~46、2:4、19:6~7、マル 16:17)。
2. 聖霊が降った時、感動によって体が動く。これは目で見ることが出来る(使徒 8:18、2:33、参考：使徒 4:31、16:25~26)。聖霊に満たされた状態の時、酒に酔ったり(使徒 2:13)、或いは気が狂ったのかと勘違いされる場合がある(I コリ 14:23)。

十、 異言の解釈

1. 聖霊に感動されて出る言葉(使徒 2:4、19:6)。
2. 普通は誰にも理解できない(I コリ 14:2、14、16、使徒 2:13)。
3. この世の言葉ではない(I コリ 14:10、11、13)。
4. 聖霊は異言によって聖徒の代わりに祈る(ロマ 8:26~27、I コリ 14:15)。
5. 異言を語ることによって自分の徳を高められる(I コリ 14:4)。
6. 異言は元々意味があるものだから、必要な時に神は人に感動を与えてそれを解釈させる(I コリ 12:10、使徒 2:5~11)。
7. もし誰かが異言を通訳できれば、それをもって説教する事が出来る(I コリ 14:26~28)。
8. 「また他の人には種々の異言、また他の人には異言を解く力が与えられている」(I コリ 12:10)。ここで言う異言は人の徳を高める為に語る異言を指すものであって(I コリ 14:26~28)、訳せるものである。これは特別な賜物であり、聖霊を受けて異言を語る人の誰でも出来るわけではない(I コリ 12:30、14:5、13、28)。
9. ある時は霊の歌を歌うこともある(I コリ 14:15、コロ 3:16、エペ 5:19)。
10. 異言を語る事を妨げてはならない(I コリ 14:39~40、参考：I テサ 5:19)。

十一、 如何に聖霊を受けられるか

1. 正しい信仰を持つ(ガラ 3:14、エペ 1:13、ヨハ 14:15~16、21~22、使徒 5:32、10:44~48)。

2. 罪の許しを得るバプテスマを受ける（使徒 19:2～6、2:38）。
3. 油注がれた長老や執事に按手をしてもらう（使徒 8:14～17、19:6、参考：民 11:17～25）。
4. 切に祈り求める（使徒 1:14、2:1～4、ルカ 11:5～13）。
5. 聖なる都である真の教会で待つ（使徒 1:4～5、ルカ 24:49、ゼカ 14:17、参考：ヘブ 10:22、ガラ 4:26）。

十二、 聖霊と邪霊の見分け方（Iヨハ 4:1、Iコリ 12:10）

聖霊は人の体を振動させるが、邪霊もまた振動させる事ができる。しかし、これらの様子は大いに違いがある。

1. 聖霊を受けた時の振動は秩序がある。聖霊による祈りの時、しばしば、笑ったり、泣いたり、手を叩いたり、霊の歌を歌う人もいるが、祈りがいったん止まると態度が落ち着き、秩序が乱れない。異言や霊の歌には力があり、それは心から発するものである。聖霊に満たされると、言葉では言い表せないほど心は極めて楽しくなり、穏やかになる。（参考：ヨハ 7:38、ロマ 14:17、Iコリ 14:32、33、39、40）。
2. 邪霊にとりつかれると秩序がなく、泣いたり笑ったりし、挙動はおかしく、制止できない。また、偽の霊言を語り、それは短く微かで力が無い。唇から出る音は雑多で、自分を誇張し、時には自分を「イエス」、「聖霊」、或いは旧約聖書中の「偉大な聖徒」だと主張することもある。時には聖書に書いてある言葉によって光の天使に擬装する（IIコリ 11:14）。彼らはこの世の事に多く触れ、間違った聖書の解釈をする。また、偽の霊の歌を歌ったり、俗な歌を歌ったり、聞く人を嫌な気分にする。自分の意思によらず意識不明になることもあり、感動を受けた後息が苦しくなり、時には嘔吐したり、顔が青くなり手足が冷たくなる（参考：Iサム 18:10、イザ 8:19、マル 5:5、マル 9:18、ヨハ 3:31、Iヨハ 4:3、5、使徒 16:16～18）。

第十四章 聖日

一、 歴史上の安息日

1. 創造の時に設立された

「神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終わって休まれたからである。」(創 2:3)。

神が万物を創造した御働きは、六日において完成し、“第七日”を聖別して“安息日”と定め、この日を祝福した。これが安息日の由来である(創 2:1~2、出エジ 20:8~11)。

2. シンの荒野で再び示された

聖書には、アダムが罪を犯してから安息日についてとり上げる事は無かったが、イスラエル人がエジプトを出てシンの荒野に着いてから、モーセは始めて彼らに“あすは主の聖安息日で休みである。”(出エジ 16:1、23)と言った。このようにして、安息日はエジプトを出た後、荒野にてイスラエル人たちに知られるようになった。

イスラエル人が荒野にいた時、神はマナを降らせて彼らを養われた。その為、彼らはエデンの園にいたアダムのように食物の心配をすることは無かった(創 2:16)。しかし、彼らはこのような恵みを神から頂いたにもかかわらず、安息日を守らなかった(出エジ 16:25~30)。

3. シナイ山で十戒に加えられた

民は安息日を守らなかったの、神はシナイ山にて自分の指で十戒にそれを書きしるされた。これによって、この日を守る大事さが分かる(申 9:10)。十戒の第四戒は次のとおりである。「安息日を覚えて、これを聖とせよ。六日の間働いてあなたの全てのわざをせよ。七日目はあなたの神、主の安息であるから、主は六日のうちに、天と地と海と、その中のすべてのものを造って、七日目に休まれたからである。それで主は安息日を祝福して聖とされた。」(出エジ 20:8~11)。

真の神はイスラエル人に神の創造を記念するよう、この戒めを定められた。このように、神はアダムとエバがエデンの園にいた時も、安息を楽しむようにと願っていたことが推量できる。

4. 聖日を守らなかった為にバビロンへ捕虜となった

神の民は安息日を聖日としなかった(エレ 17:21~23、エゼ 20:12~13)。神はエレミヤを通して、厳重な警告を発した、「もしあなた方がわたしに聞き従わないで、安息日を聖別して守ることをせず、安息日に荷を携えてエルサレムの門に入るならば、わたしは火をその門の中に燃やして、エルサレムのもろもろの宮殿を焼き滅ぼす。その火は消えることがない。」(エレ 17:27)。残念なことに、民は

神に従わなかったので、ゼデキヤ王の時、とうとうカルデヤ人の王、ネブカデネザル王によって神の宮と宮殿が焼かれ、多くの者が殺され、生存者は捕虜となってバビロンへ連れて行かれた。こうして国はついにその安息を受け、七十年が満ちた(歴代下 36:17~21)。

5. 神の宮が再建してから厳しく安息日を守るようになった

神はエレミヤの口を通して言ったことを成就するために(エレ 25:11~12)、七十年が満ちた時に、ユダヤ人をエルサレムに帰らせて、神の宮を再建するようにペルシャ王クロスを感動させた(歴代下 36:22~23)。当時、民の中に安息日を犯す者がいた為、指導者ネヘミヤは彼らを責めて言った、「あなた方はなぜこの悪事を行って、安息日を汚すのか。あなた方の先祖も、このように行ったので、われわれの神はこの全ての災いを、われわれとこの町に下されたではないか。ところがあなた方は安息日を汚して、さらに大なる怒りをイスラエルの上に招くのである。」(ネヘ 13:15~18)。すると、レビ人に城門を閉めさせ、安息日が終わるまでこれを開いてはならないと命じた事によって、安息日を聖別した(ネヘ 13:19~22)。その時から、ユダヤ人は使徒時代に至るまで、絶えることなく安息日を守ってきた(使徒 15:21)。

二、 神が安息日を設けた目的

主イエスは言った「安息日は人のためにあるのである」(マル 2:27)。このように、安息日を設けたのは、人間の利得の為だと分かる。

1. 神が創造主であることを記念させる為

安息日は、神が万物を創造された記念の日である。神は人間に主が万物の創造主であることを分からせ、神のご恩を忘れたり、迷って偽の神を拜んで自分を苦しませたりしないようにこの日を定められた(参考—出エジ 20:8~11、エゼ 20:20)。

2. 心身ともに安息を得させる為

神は言われた「あなたは六日の間、仕事をし、七日目には休まなければならない。これはあなたの牛および、ろばが休みを得、またあなたのはしめの子および寄留の他国人を休ませる為である。」(出エジ 23:12)。聖書に、「主はとこしえの神、地の果ての創造者であって、弱ることなく、また疲れることが無い。」(イザ 40:28)とある。休みを必要としない神が安息日を定めたのは、世の人を愛するからである。それも、主人だけが休むのではなく、僕も家畜をも休ませるのである。

アダムの時代から休みが必要であった。なぜなら、彼は園を耕し、守る必要があったからである(創 2:15)。また、全地のすべてを治める責任があった(創 1:28)。故に、神は創造の時にこの日を設けてアダムに享受させた。この日は神が祝福さ

れた日で(創 2:3)、これを記念する人は、この日に仕事を休むからといって生活が苦しくなることはない(参考—出エジ 16:29)。

3 . 神の救いの恩恵を記念させる為

「あなたはかつてエジプトの地で奴隷であったが、あなたの神、主が強い手と、伸ばした腕とをもって、そこからあなたを導き出されたことを覚えなければならない。それゆえ、あなたの神、主は安息日を守ることを命じられるのである。」(申 5:15)。人は神の愛をすぐ忘れてしまうので、神はイスラエル人に安息日に特別集会をさせ、神が彼らをエジプトから救い出した恩恵を記念させた。新約時代の選民はなお更、この日に主イエスが尊い血を流して罪をあがなわれた恩恵を記念すべきである(レビ 23:3、詩 103:2~3、II コリ 5:14~15、使徒 26:18)。

4 . 神の民を聖別したことを彼らに知らせる為

「わたしはまた彼らに安息日を与えて、わたしと彼らとの間のしるしとした。これは主なるわたしが彼らを聖別した事を、彼らに知らせるためである。」(エゼ 20:12)。安息日は神から与えられるもので、それを受ける人にとっては一つの恵みである。神がこの世を創造された時、第七日を祝福してその日を“聖別”された(創 2:3)。すなわち、この日は他の日と違うのである。神は民にこの日を“聖別”させて、世俗の事をしないようにさせた(ネヘ 13:22、イザ 58:13~14)。安息日にみんなが集まるのにはいくつかの理由がある。即ち、神との霊的な交わりをし、神の御言を聞き、“すべての人と相和し、また、自らきよくなるように努めなさい。きよくならなければ、だれも主を見ることはできない。”(I ペテ 1:15、ヘブ 12:14)。それ故、安息日は神が民を聖別したことを彼らに知らせるのである(II テサ 2:13、ヘブ 10:10、14)。

5 . 天国の安息を仰がせる為

現在における安息日は、将来天国での永久の安息を預表している。聖書には「こういうわけで、安息日の休みが、神の民のためにまだ残されているのである。なぜなら、神の安息にはいった者は、神がみわざをやめて休まれたように、自分もみわざを休んだからである。」(ヘブ 4:9~10)。この世には安息の地がない(詩 90:10)。ただ、主イエスのみが私たちに安息をもたらす事ができる(マタ 11:28~29)。私たちが彼の安息に入る約束を得た以上、この世で聖日を守り、御再臨する主に永久の安息に連れて行かれることを仰ぎ見るべきである(ヘブ 4:1、ロマ 8:22~23)。

三、 初期の教会は週の初日を守っていたか？

安息日は七日目である(創 2:1~3)。すなわち、ローマのカレンダーによると土曜日である(ルカ 23:56~24:2)。今日、多くの教会が日曜日を守っているが、聖書によると初期の教会が日曜日を安息日として守っていたという証拠がない。以下の聖句は、日

曜日を守る人たちがよく“証拠として”使われる個所である。

1 . 日曜日を守る人たちは、主イエスが週の初めの日に復活した為この日を守ると言っているが、聖書には復活した日を安息日として守るとの記載はない。

四福音書の中の六ヶ所に“週の初めの日”と記載されている(マタ 28:1、マル 16:2、9、ルカ 24:1、ヨハ 20:1、19)。しかし、この日に弟子たちが主の復活を記念する為に集会を設けたとは書かれていない。

“マタイ 28:1、マルコ 16:2、9、ルカ 24:1、ヨハネ 20:1”。これらの聖句に“週の初めの日”と指摘しているが、それは主が死後三日目に復活するという預言の正しさを証明するものに過ぎない。

“ヨハネ 20:19”には、“週の初めの日”に主が弟子たちに現れたことが書かれている。しかし、この聖句を根拠に日曜日を守ることにはならない。なぜなら、主は初めの日だけに弟子たちに現れたのではない。聖書には、“八日の後”主が弟子たちに再び現れたと明瞭に書かれている(ヨハ 20:26、参考—使徒 1:3)。

ある者は“ヨハネ 20:19”をもとに、弟子たちが初めの日を礼拝していたことを主の復活を記念すると言っている。しかし聖書には、「弟子たちはユダヤ人を恐れて、自分たちのおる所の戸をみな閉めた」とあるだけである。また、主イエスが初めの日に現れた時、ある弟子(トマス)は主が復活したことさえ信じなかった(マタ 28:17、マル 16:14、ヨハ 20:25)。それなのに、どうやって彼らが主の復活を記念するために既にこの日を週の初めとして礼拝していたと言えるのだろうか？

2 . ある者は“使徒 20:7”を根拠として、日曜日を守っているがこれは十分な理由ではなかった。

第一に、当時パンを裂いて集会を行うことは、この日ではないと駄目だという制限がなかった。なぜなら、信者たちは宮と家で日々パンを裂いていたと聖書の記載がある(使徒 2:46~47)。

第二に、この日の集会は夜中まで続いていた。なぜなら、屋上の間にはたくさんの明かりが灯してあったからである(使徒 20:8)。

第三に、この集会が行われたのは、パウロが翌日旅に出る為であった(使徒 20:7、11)。すなわち、お別れの集会である。故に、この節を根拠として弟子たちが安息日を土曜日ではなく、日曜日としていたとは言えない。

3 . ある者は“I コリント 16:2”を根拠として、日曜日を守っている

「一週の初めの日ごとに、あなた方はそれぞれ、いくらでも収入に応じて手もとにたくわえておき、わたしが着いた時になって初めて集めることのないようにしなさい。」ここから、毎回週の初めの日に集会をして、献金をしていたのではないと分かる。ただここで言っているのは、一つ前の週に得た収入から献金する分を貯えておくようにと言っているだけである。そうすれば、パウロが来た時にその場で慌てて集める必要がないからである。

4 . ある者は“黙示録 1:10”を根拠として、日曜日を守っている。しかし、ここで言う“主の日”は“復活の日”を指すものではない。

日曜日を守る人たちは、“主の日”がすなわち“主の復活の日”だと解釈している。しかし彼らは推測によるだけで、聖書或いは他の方法で立証することが出来ない。

主は言われた、「人の子は安息日の主である。」(マル 2:28、マタ 12:8)。では、“主の日”とは安息日を指すはずである。預言者は言った、「もし安息日にあなたの足をとどめ、『わが聖日』にあなたの楽しみをなさず、『安息日を喜びの日』と呼び...」(イザ 58:13~14)。ここで、「安息日」を「我が(神の)聖日」と呼ぶのは、この日は神に聖別された日であり、神の日であるから、ヨハネが「主の日」に幻を見たのは、七日目の主の安息日になるはずである。

四、 クリスマンが安息日を守る必要はないか？

日曜日を守る者の多くは、クリスマンはユダヤ人に従って安息日を守る必要がないと主張している。彼らの理由は次の通りである：

1 . 安息日はユダヤ人に与えたもので、クリスマンとは何の関係もない。これに対する私たちの答えは次の通りである。

神はなぜ安息日を再びユダヤ人に指示したかと言うと、彼らは神に選ばれた民であり、彼らを通して神の御旨を伝える必要があるからである(参考—ロマ 3:1~2)。

主イエスは言われた、「安息日は人の為にあるものである」(マル 2:27)。その為、神は第六日に人間を創造してから安息日を設けられた。“人の為”であるのに、ユダヤ人だけに留まるのであろうか？ましてや、その当時、ユダヤ人はまだ存在してなく、また他の人種との区別もなかった。

聖書には、主に連なっている異邦人は、安息日の恵みを楽しむ権利があると明記している(イザ 56:2~7)。

神が安息日を設けた目的の一つは、人間に神の創造のわざを記念させるためである。神はユダヤ人だけの神であろうか？異邦人だからと言って、自分を創造した主を記念しなくても良いという事があるだろうか？(伝道 12:1、13、I コリ 8:6)。

2 . クリスマンは恵みによって救われる為、戒めを守る必要はない。これに対する私たちの答えは次の通りである。

私たちが救われるのは、律法の行いによるのではなく、主の血により、人の信仰によるのである。これは絶対的なものである(ロマ 3:28、25)。

しかし、恵みの下にいる人は、信仰によって律法を廃止したり、気軽に罪を犯したりしてはならない。パウロは更に律法を確立するように言った(ロマ 3:31、6:15、参考—マタ 19:17、I コリ 7:19、黙示 14:12、12:17)。律法の規定は主が十

十字架につけられた事によって取り除かれた(コロ 2:14、16、エペ 2:15、ヘブ 9:10)、それだから、私たちは守らなくても良いのである。けれども、十戒を勝手に犯しても良いと言うわけではなく、聖霊に頼って、律法時代の人たちよりも完璧に守らなくてはならない(参考—マタ 5:17~18、21~28)。

クリスチャンが安息日を守ることは、ユダヤ人が律法の下で恐怖を抱き(出エジ 35:1~3、民 15:32~36)、それに縛られるようなものではない(マタ 12:1~2、マル 3:1~2)。むしろエデンの園にいるように、怖いものがなく、楽しい気持ちで主からの恵みを楽しむ事である(参考：創 2:3、出エジ 16:23~25)。

3 . 安息日は「来るべきものの影」であるから、キリストが既に来られた以上、守らなくても良い。これに対する私たちの答えは次の通りである。

コロサイ 2:16~17 には、“食物、飲み物、祭り、新月、安息日はみな来たるべきものの影であって、その本体はキリストである”と書いてある。これらの「影」は、キリストが十字架に付けられた事にすべて取り除かれる。例えば、過越の祭りは、影から本体に至った(I コリ 5:7~8)。旧約時代の飲食における規定は、復興する時までと定められ、飲食自体は廃止してはいない。同じく、旧約時代には安息日の各種の規定を守らなければならなかったが、新約時代ではもうそれを守る必要は無くなった。この事について、人に裁かれてはならないが、安息日については、飲食と同じように廃棄してはならない。“きたるもの”と言うのは、キリストの御再臨の時、永遠の安息に入ることによって始めて実現するのである(ヘブ 4:10)。

4 . 日曜日を守る者は、「ガラ 4:10」と「ローマ 14:5~6」を根拠として、互いに日についてのことで争うのは止め、日曜日または安息日を守っても良いと言っている。なぜなら、これらの日を守ることはみな主の為だからと言う。これに対する私たちの答えは次の通りである。

ローマ書にある「この日」、「かの日」、「どの日」とは、そもそも“安息日”や“日曜日”を指しているのではない。前後の文では“食べる”ことを論じている。だから、飲食の規定(ヘブ 9:10)、或いは断食の日と祭りの日について語っているのだと分かる。旧約には、多くの祭りがあった他に、沢山の断食の日があった。例えば：

罪のあがないの日の断食(レビ 16:29~31、23:27~32)

プリムの日の断食(エス 9:31)。

その他、四月、五月、七月、十月の断食(ゼカ 8:19、参考—エレ 39:1~2、52:12~13、列王下 25:25)。

当時の信者はまだ旧約に従い、祭りと断食の日、祭りの期間、及び飲食の条例を謹んで守っていた。それ故、パウロは「あなた方の事が心配だ」(ガラ 4:11)と言った。「ガラ 4:10」と「ローマ 14:5~6」は安息日について書かれているのではない以上、それを引用して安息日を守ることを否認する根拠にすべきではない。

五、 キリストと安息日

日曜日を守る人は、キリストが既に安息日を廃止したと思い込んでいる為、私たちは「安息日の主」であるイエスが安息日にした行動と言論を調べなければならない（マタ 12:8）。

1．ユダヤ人は安息日を曲解した

ユダヤ人は捕虜としてバビロンに連れて行かれ、70年間そこで奴隷となった。それは、安息日を守らなかったからである（エレ 17:27、歴代下 36:17～21）。その為、彼らはバビロンから戻ってから、国が建てるか否かは、神の律法と安息日を守るかどうかにかかっていることが良く分かった（ネヘ 13:15～22）。彼らは今後必ず安息日を守らなければならないと誓った（ネヘ 10:29～31）。その後、ユダヤ人のラビたちも安息日の規則を多く追加した。安息日に禁止されている律法が併せて39個もあると言われる。もし違反したことがラビに知られたら、罰を受けるか、会堂から追い出されていた。

2．キリストは安息日を守った

主が世にいた時、「安息日にいつものように会堂に入り、聖書を朗読しようとして立たれた。」（ルカ 4:16）。また、「安息日になると、人々を教えになった。」（ルカ 4:31）。そればかりか、人の子としてイエスは地上における仕事も第六日に終わるように組んでいた（ヨハ 19:31）。そして、墓に安息して、第一日になって始めて死から復活して、引き続き、世を救う御業を行った（ルカ 23:55～56、24:1～2）。

3．キリストは安息日の守り方を弟子たちに指示した

イエス・キリストは安息日のことでよくパリサイ人と衝突を起こした。この事のために殺されるまでになった（マル 3:1～6、マタ 12:9～14）。その原因はイエスが安息日を守らない事ではなく、彼らの安息日に対する見解が違うからであった（参考—ヨハ 9:14～16）。当時ユダヤ人は、モーセの言いつけに従い、律法の下で生きていた。それにラビたちの規則を加えて安息日を守っていた。律法に従うと次のようになる：

安息日になんのわざもしてはならない（出エジ 20:10）。

この日に住まいのどこでも火をたいてはならない（出エジ 35:3）。

耕し時にも、刈入れ時にも、仕事を中止して安息日を守らなければならない（出エジ 34:21）。

もし安息日を犯したり、或いはこの日に仕事をする者は必ず殺されるであろう（出エジ 31:12～17、35:2、民 15:32～36）。

主イエスは安息日の主であり、彼は豊かな恵みをもたらした（ヨハ 1:14、17）、私たちが律法の下からあがない出された（ガラ 4:5）。その為、彼は安息日を守る事で律法に縛られず、神の恵みの中で神がエデンの園で人の為に安息日を設けた御旨に従ったものである。これは安息日を重荷として受け止めず、自由に喜んで感謝の気持ちで守った。（参考—創 2:3、出エジ 16:23～25、イザ 58:13）。守る日は同じだけれども、一

つは律法の下にあり、もう一つは恵みの下にある為、イエスがパリサイ人に神の律法を犯し、安息日を守らないと見なされるのを避けることが出来なかった。しかしイエスは、当時の間違っただけの受け継ぎに従わず、周りの脅威と迫害にも恐れず、且つ率先して神の子の安息日の守り方の手本を示した。

4 . パリサイ人とイエスとの論争

1 パリサイ人は主の弟子たちが安息日に稲穂を取って食べた事に反対した

ある安息日に、主と弟子たちは麦畑を通った時、弟子たちは空腹だったので稲穂を摘んで食べた為、パリサイ人はイエスに、あなたの弟子たちが安息日にはならない事をしたと攻撃した(マタ 12:1~2)。この質問に対し、イエスは次の二つの理由をもって無罪とした。

- a. ダビデと付き人は共に食べてはならぬ供えのパンを食べたが罪にはならなかった。これは空腹の時にしたことだからである(マタ 12:3~4、7)。
- b. 祭司は宮で安息日を犯しても罪にはならなかった。なぜなら、神殿でしたことは、全て神に仕えることだからである。神殿はイエスを預表している(ヨハ 2:19、21)。主の弟子はみな祭司である(黙 5:9~10)。つまり弟子たちはイエスの恵みの中で神に属する事をし、それが安息日であって仕事を止めなくても罪にはならない(マタ 12:5~6、8)。

2 パリサイ人はイエスが安息日に病気を癒したことに反対した

- a. ある安息日にイエスが片手のなえた人を癒そうとしたが、その時もパリサイ人に抗議された。主は彼らに言った、「あなた方のうちに、一匹の羊を持っている人があるとして、もしそれが安息日に穴に落ち込んだなら、手を掛けて引き上げてやらないだろうか。人は羊よりも、はるかに優れているではないか。だから、安息日に良いことをするのは、正しいことである。」(マタ 12:9~13)。
- b. 主は 38 年間病気に悩んでいる人を癒したことによって攻撃と迫害を受けた時にこう言われた、「モーセの律法が破られないように、安息日であっても割礼を受けるのなら、安息日に人の全身を丈夫にしてやったからと言って、どうして、そんなに怒るのか。」(ヨハ 7:22~23、5:5~18)。
- c. 主は 18 年間も病気の霊につかれている女を癒した時、会堂司は憤りをもって群衆に向かって、「働くべき日は六日ある。その間に、治してもらいにきなさい。安息日にはいけない。」と言った。主はこれに答えて言われた、「偽善者たちよ。あなた方は誰でも、安息日であっても、自分の牛やろばを家畜小屋から解いて、水を飲ませに引き出してやるではないか。それなら、十八年間もサタンに縛られていた、アブラハムの娘であるこの女を、安息日であっても、その束縛から解いてやるべきではなかったか。」(ルカ 13:10~16)。

以上のことから見ると、イエスとパリサイ人との論争の焦点は日にちのことではな

く（彼は安息日を変えるつもりがなかった）、安息日の守り方にあった。彼らは律法と伝統に従って守っていたが、イエスは“安息日は人のために設けたもの”という主旨を守っていた。主の指示は次の二点にまとめることができる。

安息日に神に関わる事を行っても良い（ヨハ 7:23、マタ 12:5）。

安息日に善を行うことや命を救うことはしても良い（マタ 12:12、マル 3:4）。

それ故クリスチャンはキリストの跡に従い、真の神が定めた聖なる日に世的な事を行わず、神の恵みを記念し、真の神を礼拝し、人の益になることをして神の栄光を表すべきである（マタ 15:9、創 2:3、イザ 58:13～14）。

六、使徒が安息日を守る

日曜日を守る人たちは、常に第一日に変えて守ることの責任を主と使徒たちに転嫁しようとした。しかし、聖書の中から見ると、主や使徒たちが第七日の安息日を廃止させた根拠が見つからないばかりか、パウロや使徒たちもみな例によって安息日を守ってきた事が分かる（使徒 17:1～2）。以下のものがその証拠である。

1. アンテオケでのパウロとバルナバ：「安息日に会堂に入って席につき、律法と預言書の朗読があった。」「次の安息日には、ほとんど全市をあげて、神の言を聞きに集まってきた。」（使徒 13:14、44）。
2. ピリピでのパウロとシラス：ある安息日に、私たちは町の門を出て、祈り場があると思って、川のほとりに行った。そして、そこに座り、集まってきた婦人たちに話をした。」（使徒 16:13）。
3. テサロニケでのパウロとシラス：「そこにはユダヤ人の会堂があった。パウロは例によって、その会堂に入って行って、三つの安息日にわたり、聖書に基づいて彼らと論じた。」（使徒 17:1～2）。
4. コリントでのパウロ：「パウロは安息日ごとに会堂で論じては、ユダヤ人やギリシヤ人の説得に努めた。」（使徒 18:4）。
5. ヤコブはエルサレムで、異邦人の中から神に帰依している人への規定を定め、安息日を守ることにについてこう言った、「古い時代から、どの町にもモーセの律法を宣べ伝える者がいて、安息日ごとにそれを諸会堂で朗読するならわしがある。」（使徒 15:21）。
6. 主イエスは弟子たちに、“エルサレムが壊されて逃げる日が安息日にならないように祈れ”と言われた（マタ 24:20）。西暦 70 年に、ローマ兵が聖なる宮を攻めた時でも、弟子たちはやはり安息日を守っていた。

七、誰が安息日を土曜日から日曜日に変えたか？

主と弟子たちは、安息日を廃止したことが無かった。では一体、誰が日曜日を守るように改めたのかについては、権威ある著作を参考に、以下の証拠を提供する。

- 1 . 1900年5月24日のニューヨーク週刊誌に次のような記載がある。「戒めの中に、第七日の代わりに週の初めの日を安息日として守れという明確な記載はなかるうか？いや、どこにもない。キリストにせよ、彼の弟子たちにせよ、或いは早期のクリスチャンにせよ、誰も週の初めの日を第七日に変わって安息日とする者はいなかった。」
- 2 . 浸礼会手引き (Baptist Church Manual) の著者である E.T.Hiscock, D.D. 博士はかつて、ニューヨークに集まった浸礼会の牧師たちに次のように講演したことがある。「昔も今も『安息日を守れ』という戒めがあるが、その安息日は日曜日ではない。しかし、安息日及びその義務と利益と認可は、すべて第七日から第一日に移転したと言う人がいる。この問題に私は長年研究を重ね、その知識も誠意をもって求めてきた。私はかつてどこでこの改められた記録を見つけることが出来るかと尋ねたことがあった。新約には絶対無い。安息日の制度を週の第七日から第一日に改める証拠は、聖書の中ではどこにも見つからないのだ。」(1893年11月16日の Examiner 新聞より)
- 3 . N.Summerbell 教授はアメリカの著名牧師で、彼はアンテオケ大学の学長になった
 ことがある。彼の著書「クリスチャン史」の中の 418 ページには、彼の証しがある:「ローマ教会はすでに第四の戒めを変更し、聖書に書かれている安息日を取り消して日曜日を聖なる日と定めた。」彼の著書“主日論文”の 163 ページには、ある者の言葉を引用して、「使徒と早期のクリスチャンはみな第七日を安息日として祝った。ラオデキヤ会議の時になって始めてこの日を取り消した。」とある。以上の引用文は、改正教会の言論からのもので、以下はカトリック教会の著作から選んだものである。
- 4 . オーストラリアのシドニーにあるカトリック教新聞 (Catholic Press) の 1900年8月25日号には次の記載がある。「日曜日はカトリック教の制度で、カトリック教の原則に従い、始めてこの日を守る主張を弁護することが出来る。聖書の最初から最後まで、毎週の集会在週末から初日に変えることについて授權する言葉は一切ない。」
- 5 . 次の問答はチルモン神父が書いた“信徒教義問題”からである。この本は、1910年に法王に祝福された。
 問：どの日が安息日なのか？
 答：土曜日が安息日である。
 問：なぜ私たちは日曜日を守り、土曜日を守らないのか？
 答：ラオデキヤ会議の時(西暦336年、或いは364年)、カトリック教会はこの儀式を土曜日から日曜日に変えたので、私たちは日曜日を守り、土曜日を守らないようになった。
- 6 . T.Enright 神父が Redemptorist Fathers College で校長をしていた時の講演で、次の内容のものがある(1893年)。「地上には、律法を定める事の出来る権利ある教会が一つだけある。その律法とはすなわち、心を制御し、神の御前で守るべきものであって、もしそれに背いたら、地獄で火の刑罰を受けるのである。例えば、日曜日の制度

であるが、他の教会がこの日を守る権利がどこにあるか。それは第四の戒め“安息日を覚えてこれを聖とせよ”を根拠としてだと言うかもしれない。しかし、日曜日は安息日ではない。・・・安息日を土曜日（週の第七日）から日曜日に変えたのはカトリック教会である。今日の文明世界が一体どの教会に従っているのか。聖書には『安息日を覚えてこれを聖とせよ。』とあるが、カトリック教会はこれを『いや、週の第一日を守らなくてはならない』と言っている。そして、全世界が頭を下げてカトリック教会の命令に従っているのである。」

以上の証拠の通り、聖なる安息日を守る事を廃止したのはカトリック教会である事は明白である。カトリック教会は安息日を廃止しただけでなく、それを勝ち誇ったように世界に宣告した。それ故クリスチャンは、イエスと使徒たちが第七日（土曜日）の安息日を週の初めの日（日曜日）に変えたのだと勘違いしてはならない。また、長年に渡るしきたりだと言って日曜日を安息日として守るのではなく、かえって真理に基づき、主の恵みのもとで本当の安息を守るべきである（参考：マタ 15:9、黙 22:18～19）。

八、 聖なる安息日をどう守るべきか？

クリスチャンが安息日を守る根拠と精神は前述の通りである。以下は、私たちが如何に安息日を守るべきかを聖書から教えられる。

1. 世的な事を止める：「安息日にあなたの足をとどめ、わが聖日にあなたの楽しみをなさず、安息日を喜びの日と呼び、主の聖日を尊ぶべき日となえ、これを尊んで、おのが道を行わず、おのが楽しみを求めず、空しい言葉を語らない。」（イザ 58:13）。
2. 聖なる集會に参加する：「六日の間は仕事をしなければならない。第七日は全き休みの安息日であり、聖会である。」（レビ 23:3）。「イエスは安息日に、いつものように会堂に入り、聖書を朗読しようとして立たれた。」（ルカ 4:16）。「次の安息日には、ほとんど全市をあげて、神の言を聞きに集まってきた。」（使徒 13:44）。
3. 伝道して善を行う：「彼らはカペナウムに行った。そして、安息日にすぐ、イエスは会堂に入って教えられた。」（マル 1:21）。「ある安息日に、私たちは町の門を出て、祈り場があると思って、川のほとりに行った。そして、そこにすわり、集まってきた婦人たちに話しをした。」（使徒 16:13）。主は言った、「安息日に良いことをするのは、正しいことである。」（マタ 12:11～12、マル 3:4～5）。

安息日を記念する時間について、聖書には、「その夕から次の夕まで」（レビ 23:32、参考—マル 1:21、32）とある。つまり、金曜日の夜から土曜日の夜までである。私たちは、“国際日付変更線”をまたぐ時、安息日を守るにはどうしたらよいか分からない時がある。そんな時は、その地のカレンダーに従えば良い。すなわち、その地の第七日を守れば良いのである。

第十五章 祈り

祈りはクリスチャンにとって霊的呼吸のようなもので、霊性を維持し、聖霊に満たされ、神から力を得るために大事なことである。

一、 祈りの意義

1. 真の神を賛美する

神が万物を与えてくださった（詩 103:1～2、5、歴代上 29:10～13）。

私たちの病気を癒してくださる（詩 103:3、イザ 38:9～20）。

私たちの罪を許してくださる（詩 103:3、黙 5:8～10）。

日々私たちを顧みてくださる（詩 121:7～8、103:4）。

神からの恵みが豊富な為、絶えず神を賛美する（詩 103:1～2、Iテサ 5:18）。

2. 神と霊的交わりをする

古代の聖徒たちは、鹿が谷川を慕いあえぐように心から真の神を慕った（詩42:1～2）。

聖霊に満たされるとは、神と深く交わる状態である（Iコリ 14:2、4、使徒 10:9～10、ユダ 20）。

思いによって主と深く交わる（詩 104:34）

神のすべてのみわざと力あるみわざを深く思う（詩 77:12）。

神の威厳の光栄ある輝きを深く思う（詩 145:5）。

神の悟しを思う（詩 119:15）。

3. 真の神に祈り求める

主の御名がすべての人にあがめられるように祈る（マタ 6:9、Iテモ 2:1～6）。

神の御働きにより力が増し加えられるように祈る：

より多くの働き人が増えるように（マタ 9:38）。

御言のために門を開いてくださるように（コロ 4:3）。

神の国民が増し加わるように（イザ 26:15）。

自分と聖徒の霊性のために祈る：

自分の為（詩 19:12～14、119:35～37）。

子供たちの為（歴代上 29:19、ルカ 23:28）。

神の働き人の為（サム上 12:23、エペ 6:18～19）。

肉体のために祈る：

日ごとの食物が与えられるように（マタ 6:11、箴 30:8～9）。

主によって病が癒されるように（ヤコ 5:14～16、参考—歴代下 16:12）。

主に守られ平安が得られるように（エズ 8:21～23、使徒 12:1～5）。

“事ごとに、感謝をもって祈りと願いとをささげる”（ピリ 4:6）。

4. 自分の罪を認め、神に告白する

シモンはペテロに、自分の罪のために主に祈ってもらおうよう頼んだ(使徒8:20~24)。
主に癒していただく前にまず互いに罪を告白し合い、お互いのために祈る(ヤコ
5:14~16)。
聖霊は至る所で教会が悔改めに至るよう督促している(黙2:4~5、3:2~3、15~19)。
罪を認めて悔改めないと祈りを主に聞いてもらえない(イザ59:1~3、詩66:18)。

二、 祈りの方法

1. 主イエスの御名による

「わたしの名によって願うことは、何でも叶えてあげよう」(ヨハ14:13、15:16)。
「全ての事につき、いつも、私たちの主イエス・キリストの御名によって、父なる神に感謝する。」(エペ5:20、コロ3:17)。

2. 祈る対象

天の父である真の神に対して祈る(マタ6:9、ピリ4:6)。
救主イエスに対して祈る(使徒7:59、IIコリ12:8~9)。
主と父は一つである為(ヨハ10:30、イザ9:6)、主イエスに対して祈ることは、すなわち真の神に祈ることである(Iヨハ2:23)。

3. 祈りの言葉

知性〔聞いて分かる言葉〕で祈る(Iコリ14:15)。
異言〔聖霊に感動されて言う言葉〕で祈る(Iコリ14:14~15、2、4、ロマ8:26~27)。
心で黙祷する(ネヘ2:4、ヨハ4:24)。

4. 祈る方式

ひざまずく(使徒20:36、ルカ22:41)。
ひれ伏す(黙4:9~10、民16:22)。
立つ(詩135:2、マル11:25)。

5. 祈る時期

朝(マル1:35、詩5:3)。
午後(詩55:17、使徒10:9)。
夜(詩77:2、ルカ6:12)。
仕事前(マタ4:1、箴3:5~6)。
仕事後(マタ14:13、23、ヨハ6:15)。
忙しい時(ルカ5:15~16、マル6:31)。
食事前(マタ14:19、使徒27:35)。
臨終時(ルカ23:46、使徒7:59)。
随時(ダニ6:10、Iテサ5:17、詩71:8)。

6. 祈る場所

聖なる宮(マタ21:13、使徒3:1)。

密室（マタ 6:6、使徒 9:40）。

山野（ルカ 9:28、5:16）。

随所（I テモ 2:8、ヨハ 4:21～23）。

三、 祈りの効果

1 . 自然界への効果

神はモーセの祈りを聞き入れて、紅海を分けた（出エジ 14:15～16）。

神はヨシュアの祈りを聞き入れて、月と日をとどまらせた（ヨシュ 10:12～14）。

神はエリヤの祈りを聞き入れて、三年半降らなかった雨を再び降らせた（列王上 18:37～45、ヤコ 5:17～18）。

2 . 人への効果

1 病気を癒す

神はヒゼキヤの祈りを聞いて、彼の寿命を 15 年延ばした（イザ 38:1～8）。

バルテマイという盲人は、主に求めて癒された（マル 10:46～52）。

パウロがポプリオの父親の為に祈り、彼の病が癒された（使徒 28:7～9）。

2 悪魔を追い出す

カナンの女は、悪魔に取りつかれた娘に平安を得るよう主に求めた（マタ 15:21～28）。

口を利けなくする霊につかれた子の父親が主に求めた為、その子は悪魔から解放された（マル 9:17～29）。

パウロは主イエスの御名によって、占いの霊を女の身から出させた（使徒 16:16～18）。

3 死人をよみがえらせる

エリヤは神に求めてザレパテの寡婦の子をよみがえらせた（列王上 17:17～24）。

エリシャは神に求めてシュネムの婦人の子をよみがえらせた（列王下 4:18～37）。

ペテロは神に求めてドルカスをよみがえらせた（使徒 9:36～42）。

3 . その他の効果

エズラは祖国へ平安無事に帰れるよう断食して神に求めた（エズ 8:21～23、7:8～9）。

教会はペテロの為に切々と祈ったので、彼を牢屋から救い出すことが出来た（使徒 12:1～10）。

主イエスの助禱により、ペテロの信仰がなくならなかった（ルカ 22:31～34、60～62）。

聖霊に満たされるよう祈り求める事によって、情欲と悪魔の試みに勝つことが出来る（ロマ 8:13、ピリ 4:13）。

四、 効能のある祈り

1 . 信仰による (マタ 21:22)

神がいるの信じ、彼を追い求める人には恵みを与えられる事を信じる (ヘブ11:6)。

12年間長血を患っている女が信仰によって癒されたように、神の力を信じる (マル5:25~34)。

神の約束が必ず全うされると心から信じる (ロマ4:20~21)。

ルステラにいる足なえの人は、信仰によって全治した (使徒14:8~10)。

2 . 誠実でいる (ヨハ4:24)

偽りの無い信仰をもって祈る (IIテモ1:3~5)。

祈りは誠実なものでなければならない。また、見せかけや不純な動機で祈ってはならない (マタ6:5~6、マル12:40)。

断食している事を人に知らせず、誠心誠意神に祈る (マタ6:16~18)。

神は御手を伸ばし、その力を彼に誠実でいる人に与える (歴代下16:9、詩145:18~19)。

3 . へりくだる (ヤコ4:6)

自分が微々たる者で、神に求める資格さえない事を知る (詩144:3、歴代上29:13~14)。

自分が弱いことを認め、ごう慢な態度で祈らない (ルカ18:9~14)。

マナセはかん難の中で身を低くして主に願い求めた為、神に祈りが聞き入れられ王位に復帰した (歴代下33:10~13)。

神は高ぶる者をしりぞけ、へりくだる者に恵みを賜う (Iペテ5:5)。

4 . 愛の心をもつ (Iヨハ3:22~23)

心に恨みを抱かず人と和解する者の祈りには効果がある (マタ5:23~24、18:35)。

貧しい人を顧みる人の祈りは必ず聞かれる (詩41:1、箴21:13)。

愛による祈りによってドルカスはよみがえった (使徒9:36~41)。

心を一つにすることは愛し合いの表れであり、心を合わせて祈れば必ず主に受け入れられる (マタ18:19、使徒1:14、出エジ17:8~13)。

5 . 義を行う (ヤコ5:16)

正しい者の祈りは神に喜ばれる (箴15:8、29)。

主の目は正しい人を顧み、その耳は彼らの叫びに傾く (詩34:15)。

神は罪人の祈りを聞き入れられない (ヨハ9:31、箴28:9)。

主の教えに従うのなら、その願いが叶えられる (ヨハ15:7、ゼカ7:13)。

6 . 切々と祈る (ロマ12:12)

しきりに願う (ルカ11:8、ロマ15:30~32)。

エリヤが雨を求めた時のように、絶えず祈り続ける (列王上18:42~45)。

あきらめずに祈れば必ず得られる（ルカ 18:1~8）。

主は肉においての生活の時、激しい叫びと涙とをもって祈った為、聞き入れられた（ヘブ 5:7）。

五、断食祈り（マタ 9:14~15）

1. 神の力を求める

主は伝道を始める前に、40日間断食した（マタ 4:1~2）。

使徒たちは、働き人を使わず前に心を合わせて断食した（使徒 13:1~3）。

病を癒し悪霊を追い出すには、断食祈りに頼らなければならない（マタ 17:19~21）。

2. 神の助けを求める

真の神の守りを求める為にエズラは断食祈りを宣告した（エズ 8:21~23）。

エステルは3日間断食した後、危険にさらされながらも王に会いに行った（エス 4:16）。

ネヘミヤは真の神から恵みを求める為、断食祈りをした（ネヘ 1:4~11）。

3. 真理を悟るよう求める

ダニエルは将来のことを明らかにしてもらおうよう断食した（ダニ 10:2~12）。

モーセは十戒の戒めを神から受ける為に、シナイ山で四十日四十夜断食した（出エジ 34:27~28）。

使徒たちは歩むべき道を神に示してもらおう為に断食した（使徒 13:1~2）。

4. 罪を認め、神の許しを求める

ニネベの人々は断食を宣告し、罪を認めて悔改めた為、神の許しを得た（ヨナ 3:5~10）。

イスラエル人は断食して罪を認め、真の神に立ち返った（サム上 7:3~6）。

イスラエル人は断食して罪を認め、神の哀れみを請うた（ネヘ 9:1~4）。

5. 断食するにあたっての注意事項

自分が断食していることを人に知られないようにする（マタ 6:16~18）。

利益を求めたり、悪を行ってはならない（イザ 58:3~5）。

人に善を行い、貧しい者を助ける（イザ 58:6~9）。

断食は祈りに専念する為であるから、よく祈り、神の御前に心を注ぎ出す（使徒 13:3、ダニ 10:12、詩 62:8）。

第十六章 奇跡（しるし）

一、 奇跡とは？

奇跡とは、真の神の御業である。本来、宇宙万物の現象はすべて奇跡といえるが、人間はそれを見慣れているので珍しいとは思わない。今現在、人力で出来ない極めて奇異な事だけを「奇跡」と称する。これから聖書によってその内容を次のように分類する：

（一）万物に現わす奇跡

紅海を分けさせた（出エジ 14:21～22）。

荒野で雲の柱と火の柱を顕せた（民 9:15～22）。

岩から水を流れさせた（出エジ 17:5～6）。

地を裂かせた（民 16:31～33）。

月日をとどまらせた（ヨシュ 10:12～14）。

三年半ぶりに雨を降らせた（ヤコ 5:17～18）。

風と波を静まらせた（マタ 8:23～26）。

わずかな物を多数の物に変わらせる（5つのパンと2匹の魚をもって5千人以上を満腹にさせる：マタ 14:16～21．参考：マタ 15:34～38、列王上 17:13～16、列王下 4:1～7）。

ペテロに網を引きなさいと命じると2艘の船満杯の魚が取れた（ルカ 5:4～7．参考：ヨハ 21:6～11）。

炎の舌と強風を顕した（使徒 2:1～3）。

（二）人の身に顕れた奇跡

1. 人の身に顕れた不思議な奇跡

40年間荒野に彷徨っても足が腫れず、服も破れなかった（申 8:4、29:5）

サムソンに超人の力が与えられた（士 15:14～16）。

エリヤは風に乗って昇天した（列王下 2:1～11）。

ゲハジがらい病にかかった（列王下 5:26～27）。

スリヤ兵の目をくらませた（列王下 6:18～19）。

三人は火の中に入れられてもかすり傷一つ負わなかった（ダニ 3:24～27）。

ネブカデネザル王の気が狂った（ダニ 4:24～33）。

ダニエルが傷つかないように、獅子の群れの口を封じた（ダニ 6:22）。

ヨナは大きな魚のお腹の中に三日三晩いても死ななかった（マタ 12:40、ヨナ 1:17）。

聖霊はピリポをさらって行った（使徒 8:39～40）。

2. 病を癒す奇跡

半身不随の人を癒した（マル 2:1～12）。

片手のなえた人を癒した（マル 3:1～5）。

十二年間長血にわずらっている女を癒した（マル 5:25～34）。

水腫をわずらっている人を癒した（ルカ 14:2～4）。

らい病にかかっている人を清くした（ルカ 17:11～14、マタ 8:3）。
目の不自由な人を見えるようにした（マタ 9:27～30、ルカ 18:35～43、ヨハ 9:1～7）。
耳の不自由な人と口のきけない人を癒した（マル 7:32～35）。
熱病を全治した（ヨハ 4:52～53、ルカ 4:38～39）。
マルコスの耳を癒した（ルカ 22:50～51、ヨハ 18:10）。
毒蛇にかまれた人を癒した（使徒 28:3～6、民 21:8～9）。

3. 悪魔を追い出す奇跡

口を不自由にさせる悪霊を追い出した（マタ 9:32～33、ルカ 11:14）。
悪霊につかれた口のきけない盲人を癒した（マタ 12:22）。
カナンの婦人の娘の悪霊を追い出した（マタ 15:21～28）。
カペナウムの会堂で汚れた霊を追い出した（マル 1:23～26）。
レギオンの群れの悪霊を追い出した（マル 5:1～13）。
口をきけなくする霊を追い出した（マル 9:16～27）。
マグダラのマリヤの身から七つの悪霊を追い出した（ルカ 8:2）。
十八年間悪霊につかれた女を癒した（ルカ 13:10～16）。
ピリポはサマリヤで悪霊を追い出した（使徒 8:5～7）。
パウロは占いの霊を追い出した（使徒 16:16～18）。

4. 死人が復活する奇跡

ザレパテのやもめの息子を生き返らせた（列王上 17:17～24）。
シュネムの婦人の子を生き返らせた（列王下 4:32～37）。
ヤイロの娘を生き返らせた（マル 5:35～43）。
ナインの町にいるやもめの一人息子を生き返らせた（ルカ 7:11～15）。
死んで四日後にラザロは復活した（ヨハ 11:39～44）。
主ご自身が復活された（ヨハ 20:1～18、参考：ヨハ 10:18）。
ドルカスを生き返らせた（使徒 9:40～41）。
ユテコを生き返らせた（使徒 20:9～10）。

二、 真の神はなぜ奇跡を顕すのか？

(一) 神に於いて

1. 救いを施す為

選ばれた民をエジプトから救い出す為に十の災いを下した（出エジ 3:20、7:20～12:36）。

選ばれた民を飢え死にさせない為に、荒野でマナを降らせた（出エジ 16:4～5）。

ペテロは海に溺れかけたが救われた（マタ 14:28～31）。

2. 裁きを行う為

ノアの時代、四十日四十夜雨を降らせ罪人を滅ぼした（創 7:4、17）。

天から硫黄と火を降らせてソドムを焼き尽くした（創 19:24～25）。

アナニヤ夫婦は聖霊を欺いたがため即死んだ（使徒 5:1～11）。

3. 神の栄光の為

奇跡によって主の名を顕す（歴代上 17:21）。

半身不随の人が歩けるようになった事によって真の神があがめられた（マル 2:12）。

ラザロの死は神の栄光を顕す為であった（ヨハ 11:4）。

(二) 人に対して

1. 真の神を信じるように人々を導く為

役人は息子の病が癒された事によって信じた（ヨハ 4:46～53）。

主は使徒たちを通して奇跡を行ったので、信じて主に帰する人が増した（使徒 5:12～16）。

サマリヤ人はピリポの行った奇跡を見て主を信じるようになった（使徒 8:5～8）。

総督は神の大いなる力を見て信じるようになった（使徒 13:12）。

パウロは、神が言葉とわざ、しるしと不思議との力、聖霊の力によって異邦人を従順にすると言った（ロマ 15:18～19）。

2. 伝える教えが全て正しいものだと証明する為

弟子たちは至る所で福音を宣べ伝えたので、主は御言に伴うしるしをもってその確かなことを示された（マル 16:20）。

主はしるしと奇跡を行わせることによって、パウロの伝える恵の言葉を証された（使徒 14:3）。

しるしと奇跡は救いを証する（ヘブ 2:3～4）。

3. 真の神から遣わされたものだと証明する為

真の神は奇跡によってモーセは神が選んだ者である事を証明した（民 16:28～30、17:1～11）。

主は奇跡をもって自分が真の神によって立てられたキリストである事を証明した（ヨハ 5:36、マタ 11:2～6、ヨハ 10:37～38）。

パウロはしるしや奇跡と力あるわざとによって使徒たるの実を顕した（II コリ 12:12、参考：ルカ 9:1～2）。

聖霊がある真の教会には必ず奇跡が伴う（I コリ 12:9、28、マル 16:17～18、ルカ 10:19）。

4. 奇跡によって弟子たちの信仰を頑なにする為

主は奇跡をもってバプテスマのヨハネの疑惑を晴らした（マタ 11:2～6）。

トマスは主が顕れたのを見て、彼の疑いが解かれた（ヨハ 20:24～28）。

奇跡は弟子たちに、真の神を恐れ、使徒を尊重する心を生じさせた（使徒 15:11～13）。

パウロは喜んで、しるしと奇跡のことをエルサレムの長老、使徒、会衆に説明した（使徒 15:12）。

5. 邪術を失敗させる為

アロンのつえが魔術師のつえを飲み込んだ（出エジ 7:10～13）。

魔術師はぶよを出すことが出来なかったので、アロンの行った奇跡が真の神の能

力だと認めた（出エジ 8:18～19）。

魔術を行うシモンは、ピリポの行った奇跡を見て納得した（使徒 8:9～13）。

魔術師エルマはパウロの邪魔をした為に目が見えなくなった（使徒 13:8～11）。

6. 悔い改めない人を裁く為

イスラエル人は神の大きな能力を見ても信じなかったため、多くの人は荒野で死んでしまった（詩 106:19～26）。

コラジン、ベツサイダ、カペナウムが裁きの日に、もっと重い刑罰を受けると主は言われた。なぜなら、彼らは主の行った奇跡を見ても悔い改め、信じようとしなかったからである（マタ 11:20～24）。

奇跡をみても真の教えを信じない者は罪と定められる（ヨハ 15:22～24）。

主イエスの復活は、今の時代の人々にしるしを見せる為である（マタ 12:39～41）。

今日、聖霊の降臨を通して、主が確実に復活したことを証明した（使徒 2:32～33）。

だから、聖霊の降臨を目にすることが出来る。すなわち、聖霊を受けた者は新しい異言を語るのである（マル 16:17、使徒 10:44～46、I コリ 14:22）。しかし、イエスを救い主として信じない者は罪から逃れることが出来ない（ヨハ 16:8、使徒 17:30、31）。

三、 奇跡を顕すときに備えるべき幾つかの要件

1. 主イエスの御名によらなければならない

わたしの名によって奇跡を行うようにと主は言われた（マル 16:17）。

主の御名によって、悪魔が弟子に服従した（ルカ 10:17）。

ペテロは主の御名によって足の不自由な人を歩かせた（使徒 3:6、16）。

勝手に主の御名によって悪魔を追い出そうとしても効果は無い（使徒 19:13～16）。

主の御名によって奇跡を行う人は、信じて頼る心を持たなければならない。また、神の御旨が如何であるか察する必要がある、やたら主の名をみだりに唱えてはならない（Iヨハ 5:14）。

2. 大いに信仰心を持たなければならない

奇跡を行う人に信心がなくてはならない

a. エリヤはまだ雨を見ていなかったが、真の神が必ず雨を降らせると信じていた（列王上 18:41）。

b. モーセが窮地に追いやられても、真の神が必ず道を開いて下さると確信していた（出エジ 14:13～14、21）。

c. 主は弟子たちに、あなた方に信仰心があれば出来ないことはないと言われた（マタ 17:19～20）。

癒されたい者はイエスが救い主である事と彼の大いなる力を信じなければならない

a. ふたりの盲人は、イエスがダビデの子孫〔救い主の意〕であることを認め（マタ 22:41～42）、しかも主が自分たちを癒すことが出来ると信じた（マタ 9:27～

29)。

- b. 主は百卒長に、あなたの信じたとおりになるようにと言われた(マタ 8:13)。
- c. パウロは足の不自由な人を見て、いやされるほどの信仰が彼にあるのを認めた(使徒 14:9)。

もし患者(例えば幼い子や悪霊につかれた人)が信じることを知らない場合、家族や患者を助ける人たちは信仰心を持たなければならない

- a. カナンの婦人は悪霊にとりつかれた娘の為に救いを求めた(マタ 15:22)。
- b. 百卒長は僕の為に癒しを求めた(マタ 8:5~13)。
- c. 四人の人は中風の人を担いで主に癒しを求めた(マル 2:3~5)。
癒しを求める人の信仰心がないとき、先ず彼らの信仰心を強める
- a. 主は教会堂の管理人に、怖がるな、信じるがよいと言われた(マル 5:36)。
- b. 主はマルタに、あなたがもし信じるなら神の栄光を見るであろうと言った(ヨハ 11:39~40)。
- c. 主は口をきけなくする霊につかれた子の父親に、「もしできれば、と言うのか。信ずる者には、どんな事でもできる」と言われた(マル 9:23~24)。

3. 真の神の霊に頼る

主は真の神の霊によって悪霊を追い出した(マタ 12:28)。

神が共にいることによって、はじめて奇跡を行うことができる(ヨハ 3:2、使徒 10:38)。

パウロは聖霊に満たされて魔術師を制した(使徒 13:9~11)。

病気を癒したり奇跡を行ったりするのは、自分によるものではなく、聖霊の賜物によるものである(Ⅰコリ 12:9~10)。

4. 切々に祈る

エリヤはやもめの子のために、三度祈った(列王上 17:21~22)。

雨を求める為に、切々に七度祈った(列王上 18:42~43)。

カナンの婦人はあきらめずに懇願し、はじめて許された(マタ 15:22~27)。

エリコの盲人は切々とイエスに癒されることを求め、目が見えるようになった(ルカ 18:38~43)。

「このたぐいは、祈りと断食とによらなければ悪霊を追い出すことができない」と主は言われた(マタ 17:21)。

5. 罪を認め、悔い改める

主イエスはまず中風の者の罪を許し、それから彼の病を癒した。この事によって、病気は罪から来たものだと分かる(マル 2:5~12、参考:ヨハ 5:5~9、14)。

癒しを求める前に、まずお互いの罪を認め合わなければならない(ヤコ 5:14~16)。

民がバアルの偶像を捨ててから、エリヤは彼らの為に雨を求めた(列王上 18:39~44)。

真の神は罪人の祈りを聞き入れない(ヨハ 9:31、詩 66:18、イザ 59:1~2)。

義人の祈りは、大いに力があり、効果がある(ヤコ 5:16)。

四、 神の権力が奇跡を行う方法

聖書の記載により、病気を癒す方法を次のようにあげる。

(一) 手によって行う

1. 按手

イエスは彼らの上に手を置いて、彼らの病を癒した（ルカ 4:40）。
18年間も病に侵された女の人の上に両手を置かれた（ルカ 13:11、13）。
パウロは手をポプリオの父親の上において病を癒した（使徒 28:7~8）。
主は弟子たちに、按手をして病気を癒す権力と能力を与えた（マル 16:18）。

2. 触れる

イエスがらい病患者に触れたことによって、彼は清くなった（ルカ 5:13）。
主は二人の盲人にさわり、彼らは癒された（マタ 9:29）。
エリコの盲人の目にさわると、彼らの目がすぐ見えるようになった（マタ 20:34）。

3. 手を取る（人の助けによって立ち上がる意味が含まれる）

主はヤイロの娘の手を取って、彼女を死から生き返らせた（ルカ 8:54~55）。
ペテロのしゅうとめの手を取って起こされると、彼女の熱が引いた（マル 1:30~31）。
ペテロは足の不自由な人の右手を取って彼を起こしてやった（使徒 3:7）。

4. 油を注ぐ（祝福されたオリーブ油を用いる）

弟子たちは大勢の病人に油をぬって癒した。（マル 6:13）。
油を病人に注ぎ、彼らの為に祈った（ヤコ 5:14）。
以上、四種類の方法はみな手で行ったものである。これを見て分かるように、奇跡は度々手によって全うされるのである（使徒 5:12、19:11）。しかし、さらに信仰心に頼り、癒しを求める者の信仰心の強さによって、癒される方法にも様々ある。

(二) その他の活用方法

1. 重い病気である上に信仰心の弱い人に対して

ベツサイダの盲人の目につばきを付けた（マル 8:22~25）。
つばきと泥を盲人の目に塗り、池に行って洗わせた（ヨハ 9:6~7）。
ペテロは人々を外へ出させ、一人で祈ってドルカスを生き返らせた（使徒 9:40~41）。

2. 信仰心の強い人に対して

主の一言によって中風の者は起き、床を取りあげて歩いた（マル 2:10~12）。
主の一言によってエリコの盲人の目が見えるようになった（ルカ 18:41~43）。
主は言われた、「そうしてあげよう」。すると、らい病は清められた（マタ 8:3）。

3. 大衆が大いに信仰心のある時に対して

イエスのみ衣のふさに触っただけで、患者の病が治った（マル 5:25~34）。
ペテロの影にさえかかれば治ると信じたため、連れて来た病人と悪魔につかれた

人はみな癒された（使徒 5:15～16）。

人々がパウロの身につけている手ぬぐいや前掛けを取って病人にあてると、その病気が除かれ、悪霊が出て行った（使徒 19:12）。

特別な事例：彼らの信仰によるのではなく、ただ神の慈愛と憐みによって奇跡が行われた。例として：

a．ナインという町のやもめの一人息子を生き返らせた（ルカ 7:13～15）。

b．三十八年もの間下半身不随だった人を歩かせた（ヨハ 5:5～9）。

（三）悪霊に取り付かれ、悪霊を追い出す

1．悪霊に取り付かれた様々な状況

マグダラのマリヤは七つの悪霊につかわれていた（ルカ 8:2）。

たくさんの悪霊につかわれて気が狂った（ルカ 8:27～30）。

悪霊につかわれててんかんになる（マタ 17:15、18）。

悪霊につかわれて口がきけない（マタ 9:32～33）。

光の天使にみせかけた偽の者が人々に、パウロはあなた方に救いの道を伝える方だと言った（使徒 16:16～17、参考：II コリ 11:14）。

占いをする者、ト者、易者、魔法使、呪文を唱える者、口寄せ、かんなぎ、死人に問うことをする者等、みな悪魔がよく使う手段だ（申 18:10～12、参考：使徒 8:9～11）。

2．悪霊を追い出す方法

聖書の記載によると、悪魔を追い出す時手を使う必要はなく、厳しく叱り、悪魔の要求に従ってはいけない。

主は汚れた悪霊に「黙れ」と責めた（ルカ 4:33～35）。

主は悪霊の群れが人の体から出てくるようにと命じた（マル 5:8）。

主は汚れた霊を叱って言った、「言うことも聞くこともさせない霊よ、わたしが おまえに命じる。この子から出て行け。二度と、入ってくるな。」（マル 9:25）。

主の一言だけで、悪霊を人の体から追い出した（マタ 8:16）。

パウロは主イエスの御名によって悪霊を追い出した（使徒 16:18）。

悪霊は人の体から出ることを望まない（マル 5:7～10）。それゆえ悪霊を追い出すには信仰により、主イエスの御名により、しかも断食をしなければならない（マル 9:28～29）。

五、奇跡を行う際に注意しなければならない幾つかの事項

（一）悪魔の抵抗に備えよ

奇跡はそれが真か偽りかを顕すことができる。悪魔につかれた人を解放させ、真の神に帰せることができる（ルカ 13:11、16）。それ故、恵の門が開かれて多くの病人が癒され、悪霊が追い出される時こそ悪魔の反抗と妨げとにあう（I コリ 16:9）。

以下に挙げるものがその証拠である：

1．そしり

主が口をきかなくする悪霊を追い出した時、パリサイ人は「彼は悪霊のかしらによ

って悪霊を追い出しているのだ」と言った(マタ 9:34、12:22~24)。

主が生まれつき盲人の人を癒したとき、パリサイ人はイエスの事を罪人だと言った(ヨハ 9:24)。

2. 憎み

主が右手のなえた人を癒したとき、律法学者は激しく怒った(ルカ 6:10~11)。

使徒たちが病人を癒した後、大祭司たちは嫉妬の念に満たされた(使徒 5:16~18)。

3. 排斥

主は悪魔に附かれた人を解放してから、町中の人たちはイエスを出迎えて自分たちのところを離れるよう頼んだ(マタ 8:34)。

バルイエスは使徒たちを阻み、総督を真理からそらそうとした(使徒 13:6~8)。

4. 殺害

主はラザロを生き返らせたが、祭司長たちはイエスとラザロを殺害しようと協議した(ヨハ 11:47、53、12:10)。

パウロは足の不自由な人を癒したけれども、ユダヤ人は群集を仲間に引き入れ、パウロを石で打った(使徒 14:9~10、19)。

パウロが占いの霊につかれた女奴隷の悪霊を追い出したため、彼女の主人たちは群衆を煽ってパウロを長官に渡し、パウロは打たれ、牢屋に入れられた(使徒 16:19~24)。

(二) 全ての栄光を真の神に帰するように

1. 奇跡の顕れるのは、真の神の権能と恵みによるもので、自分の力や信心によるものではない(使徒 3:12)。
2. エリヤはナアマンのらい病を治したが、彼からの謝礼を受け取らなかった(列王下 5:15~17、参考:マタ 10:8)。
3. パウロは足の不自由な人を癒したが、ルカオニヤの地方の人々の尊敬を決して受けなかった(使徒 14:11~15、参考:詩 115:1、ルカ 2:13~14)。
4. 神の僕たる者は奇跡を行うことが出来ることで密かに喜び自己満足して同働者を軽蔑してはいけない。なぜなら、人それぞれ与えられた賜物が違うからだ(Iコリ 12:28~30、マタ 7:22~23、ルカ 10:20)。

奇跡によって入信した信者に対して、聖霊を求め、真理に浸透させるように導き、また信仰の基を築く様にしなければならない(使徒 8:5~8、14~17、14:19~22)。

病が癒された者に主はこう言われた「もう罪を犯してはいけない。何かもっと悪いことが、あなたの身に起こるかも知れないから。」(ヨハ 5:14、参考:IIペテ 2:20)。

六、 偽のしるしと奇跡

真の神の御旨と力によって顕れたものだけがしるしである。聖書には、「ただ主のみ、くすしきみわざをなされる。」(詩 72:18、136:4)とある。テサロニケ人への第二の手紙 2章9節には、「不法の者が来るのは、サタン働きによるのであって、あらゆる偽りの

力と、しるしと、不思議とを行う...」とある。新改訳聖書には、「主が来られるとき、サタンは色々な方法を使って偽りの力と霊的な体験を行う」とある。そのような力はサタンの偽りのしるし、異能、奇怪なことから来たにすぎない。古代からサタンは世の人々を困惑させ、真理を混乱させるために常に彼の特有の力を顕わした。立証は次の通りだ。

(一) 邪教の魔術師によって顕れる

1. エジプトの魔術師らは杖を蛇に変えたが、アロンの杖は彼らの杖を呑みつくした（出エジ 7:11～12）。
2. エジプトの魔術師らも邪術を使って川の水を血に変えた（出エジ 7:20～22）。
3. 邪術の力によって蛙を川や池から上らせた（出エジ 8:6～7）。
4. シモンがサマリヤの町にいた頃、彼は邪術を行って人々を驚かせていた為、人々から『大能と呼ばれる神の力』と言われた（使徒 8:9～11、参考：使徒 13:6～7、19:19）。

(二) にせキリストとにせ預言者を借りて顕れる

1. マタイによる福音書 24 章 24 節に、「にせキリストたちや、にせ預言者たちが起こって、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば、選民をも惑わそうとするであろう」とある。ここから分かるように、彼らはサタンの力によってしるしと不思議を行う（II テサ 2:9）。
2. 小羊のような角が二つあって、龍のように物を言う獣（にせキリスト）が地から上って来た。それには、権力があり、大いなるしるしを行って、人々の前で火を天から地に降らせることさえした（黙 13:11～13）。
3. にせ預言者は悪霊によってしるしを行う（黙 16:13～14、19:20）。

「御霊は明らかに告げて言う。後の時になると、ある人々は、惑わす霊と悪霊の教えとに気を取られて、信仰から離れ去るであろう。」(I テモ 4:1)。それ故、これらのしるしを見たからと言って、本来の信仰を変えてはならない。もし、伝える教えが聖書に合わないのなら、いくら大いなるしるしを行っていても、それに惑わされてはならない（申 13:1～5、参考：ガラ 1:6～9、II コリ 11:3～4）。

第十七章 教会

一、教会の重要性

1. 教会の意義

“教会”（ecclesia）という言葉のギリシャ語原文では、“召された会衆”、または“集会”と言う意味がある（使徒 20:28）。新約時代における教会は特に主イエスの御血によってこの世からあがなわれた聖なる者の集まりを指す（参考：使徒 20:28、黙 5:9～10）。

旧約時代に神はかつてイスラエルの民を“他の民から区別”した。これは新約の教会の預表である（申 14:2、民 23:9、レビ 20:26）。

旧約時代は割礼を受けることによって神の民となった（創 17:9～14）。しかし新約時代では、主を信じてバプテスマを受けることによって始めて、キリストに帰する教会の肢体になる事ができる（ガラ 3:27、コロ 1:12～14、ヨハ 3:5、I コリ 12:13）。

2. 教会の尊さ

教会はキリストの肢体であって、全てのものを、全てのもののうちに満たしている方が、満ち満ちているものにほかならない（エペ 1:23、コロ 1:24）。

イエス・キリストは教会の頭で信者はその肢体である。教会を迫害する者は主を迫害することになる（エペ 5:23、I コリ 12:27、使徒 9:1～5）。

教会はキリストの代表であり、聖霊を通して罪を許すかまたは罪をそのまま残すかの権限を持っている。教会に服従することは主に服従することであり、教会を拒む者は主を拒むのである（マタ 18:17～18、ヨハ 20:22～23、ルカ 10:16）。

3. 教会と救い

教会は神が恵みを施し、彼の権限を表し、御旨を伝え、栄光を神に帰する所である（エペ 1:23、3:10、21）。

教会は生ける神の家である。それ故、教会に入る事はすなわち神の家に入るのである（I テモ 3:15、エペ 2:17～19）。誰でもこの家を離れるなら必ず命を落とす（参考：ヨシュ 2:18～19）。

教会は唯一の真のぶどうの木であり、信者はその枝であるから、木から離れたら必ず枯れ、焼かれてしまう（ヨハ 15:16）。信者は教会を離れたら滅びることになる（参考：I ヨハ 2:19、列王上 2:36～37、39～46）。

教会は主の羊の囲いである為、その囲いに入る事によって主の羊となり、命を得る事が出来る（ヨハ 10:1、7～10、16、I ペテ 2:25）。

二、教会の組織

1. 各地の教会の組織

どの教会も、聖徒、監督、執事から成り立つ。このようにして始めて健全になる

(ピリ 1:1、I コリ 1:2)。

それ故パウロは教会の中で長老を立てた(使徒 14:23)。テトスに各町に長老を設けるようにと言いつけた(テト 1:5)。

執事はもともとは使徒たちの手伝いをする為に設けられた(参考:使徒 6:1~6、21:8)。この役職は神の家の中で欠かせないものであるから、パウロはテモテに教会における執事の選び方を教えた(I テモ 3:14~15、8~13)。

2. 長老・執事の資格と職責

長老も監督と呼ばれる(使徒 20:17、28、I テモ 3:1~7、テト 1:5~8)。“長老”という呼び名は特に霊的な進歩を指すものである。テモテ第一の手紙 5:1 に書かれている“老人”は、ギリシャ語の原文では“長老”と書かれている。“監督”という呼び名は教会を管理する者の意味を指す(使徒 20:28、I テモ 3:5)。

長老と執事の資格

長老と執事の資格について、テモテ第一の手紙 3:1~3 とテトス 1:5~9 にパウロは詳しく示した。使徒が始めて役職を立てる時にまとめた三ヶ条は以下の通りである。

- a. 聖霊に満たされる(使徒 6:3、参考: I テモ 3:13、テト 1:9、使徒 6:10)。
- b. 知恵に満ちる(使徒 6:3、I テモ 3:4~5、9、12、テト 1:9)。
- c. 良い名声がある(使徒 6:3、I テモ 3:2~3、8、11、テト 1:6~8)。

入信して間もない人は監督になってはならない(I テモ 3:6)。

執事もまず調べられて、もし責められるところがなければ、接手して執事として立てることが出来る(I テモ 3:10)。

長老の職責

- a. 健全な教えによって人をさとし、主に帰するよう導く(テト 1:9、I テモ 3:2)。
- b. 主の羊の群れを牧する(I ペテ 5:1~4、使徒 20:28)。
- c. 神の家の世話をよくし、教会の管理をする(I テモ 5:17、3:5、テト 1:7)。

長老が行う教会の仕事はすべて神の御旨に従わなければならない。嫌々ながらするのではなく、喜んでする。また、財産を貪る為ではなく、本心からする。それ故、長老は力づくで信者を支配するのではなく、良い模範を信者に示すべきである(I ペテ 5:2~3、使徒 20:28)。

信者は長老の教えに従うべきである(I ペテ 5:5、ヘブ 13:17)。また、長老を尊敬しなければならない(I テモ 5:17~19、I テサ 5:12~13)。

執事の職責

- a. “執事”の原文の意味は「人に仕える者」、「使用人」等の意味がある。新約聖書では、“仕える者・僕”(マル 9:35、ロマ 15:8、I コリ 3:5、コロ 1:7) “執事”(I テモ 3:8) と訳されている。
- b. エルサレム教会は七人を選んだ。その当時彼らは執事と呼ばれなかった

が、その仕事は執事の仕事である（使徒 6:1～3）。

- c. 執事は事務的な仕事を分担するばかりではなく、直接主の為の証しをして、主からの恵みの力を得、めざましい奇跡とするしとを行う（使徒 6:8～10）。
- d. 七人の執事の中のピリポは、その後専ら各地で福音を宣べ伝えた（使徒 8:5～13、26～40、21:8）。
- e. パウロは「執事たる者は信仰の奥義を保ち、真理における大きな確信を得るだろう」と言った（Iテモ 3:9、13）。

婦人から女執事を選ぶことが出来る（Iテト 3:11～12、ロマ 16:1）

長老と執事は神の管理人である以上、教会で自分の得た賜物を尽くして主に仕えるべきである（参考：Iペテ 4:9～11、Iコリ 4:1、2）。

3．教会間の連絡

各地に散在する教会はみなキリストの肢体であるから、お互いに主にあって一つの体と同じように密接に連絡し合うべきである（Iコリ 12:12～17）。

使徒時代、各地の教会間に親しい交わりがあった（コロ 4:15～16、ロマ 16:1～2、16、21～24）。

各地域の教会は互いに連絡を取り合わなければならない

- a. 使徒時代は伝道者によって幾つかの地域を分けていた（IIコリ 10:13～16、ガラ 3:8）。
- b. 各地域は経済の面において互いに助け合わなければならない（使徒 11:27～30、ロマ 15:25～27、Iコリ 16:1～3）。

各地域の教会は連絡センターを設ける

- a. ユダヤ教区域の連絡センターはエルサレムであった（使徒 8:14～15）。
- b. 異邦人区域の連絡センターはアンテオケであった（使徒 13:1～3、14:26～28、15:30～41）。

各地域の教会に連絡センターの本部を設ける

全区域の総本部はエルサレムにあった（使徒 15:1～4、18:22、21:17～20）。

使徒時代の教会はパウロの言っていたように、キリストを基として、全身はすべての節々の助けにより、しっかりと組み合わされ結び合わされ、それぞれの部分は分に応じて働き、からだを成長させ、愛のうちに育てられていった（エペ 4:16、コロ 2:19）。

4．聖霊の賜物と教会の中の職務

聖徒たちをととのえて奉仕のわざをさせ、キリストのからだを建てさせるため（エペ 4:12）聖霊によって各教会の長老と執事が任命される（参考：使徒 20:28）。その他、教会の中に使徒、預言者、福音伝道者、牧者、教師等を任命された（エペ 4:11、Iコリ 12:28～31、ロマ 12:4～8）。これらの人たちは聖霊が賜わった恵みによって決められた所で働いた者もいれば、全体の教会の為に働いた者もいた。

使徒：当時十二人の使徒以外に、パウロとバルナバも使徒と呼ばれた（使徒 14:14）。彼らは預言者たちと一緒に教会の基を築いた（エペ 2:20、I コリ 3:10、マタ 16:18）。使徒は教会全体に特別な権威を持っていた（マタ 16:19、使徒 15:22～33、16:4～5、I コリ 5:4～5、II コリ 10:6、8、13:10、III ヨハ 9～10）。彼らは福音を宣べ伝えるのに全力を尽くして教会を建設した（コロ 1:23、25、ロマ 15:22～23）。使徒となる条件は賜物によるものばかりではなく、歴史の根源にもよるものである。主を見たことがあり（使徒 1:21～22、I コリ 9:1、15:8）、直接主に召され（ガラ 1:1、12、I コリ 1:1、ロマ 1:1）、奇跡や異能を行える者（II コリ 12:11～12）でなければならない。

預言者：預言者は神の啓示を受けて人に伝達する者で、それは聖霊の特別な賜物である（I コリ 12:10、14:2、6、30、エペ 3:5～6）。啓示の中で、将来起きる意外な事を預言する。例えば：将来起こる飢饉やパウロが牢屋に入れられる事等（使徒 11:28、20:23、21:4、8～11）。預言者の職務は預言するばかりではなく、人を教え導き、慰め、戒める事も含まれる（I コリ 14:3、31、使徒 15:32）。預言は聖霊の感動によるものであるが、聖霊の感動を受けた者でも時には人の意志や願望が混じる可能性もある（使徒 21:4、10～14）。故に、預言に対して私たちは気を付けて見きわめる必要がある（I テサ 5:20～21、I コリ 14:29）。

福音伝道者：福音を伝える人は伝道者である（エペ 4:11、II テモ 4:5）。原文の意味は「良き訪れを告げる者」という意味がある（ロマ 10:15 参考）。彼らは聖霊から特別な弁舌と能力を得た（使徒 6:9～10）。神は彼らをもっと能率良く働かせるために、常に異能と病気を癒して悪魔を追い出す能力を与える（ロマ 15:18、I コリ 12:28、使徒 6:8）。ピリポは福音を述べ伝える者で知られ（使徒 21:8）、聖霊によってキリストの福音をサマリヤで宣べ伝え、様々なしるしや奇跡を起こし、多くの者がバプテスマを受けて主に帰するように導いた（使徒 8:5～13）。主も彼を導いてエチオピアの宦官に救い主を受け入れさせた（使徒 8:26～40）。伝道者の仕事は「世界に出て行って、すべての造られたものに福音を宣べ伝える」のである（マル 16:15）故、彼らはたいてい同じ所に長期間滞在しない（ロマ 15:20、マル 1:38）。

牧者：パウロは言った「わたしは植え、アポロは水を注いだ。しかし成長させて下さるのは、神である。」（I コリ 3:6）。「植える」とは外へ伝道することを表し、「注ぐ」は牧者の仕事を表す。アポロは良い牧者であった。これは教会の牧羊においてとても重要な役割である。主が昇天なされる前、ペテロに三度も主の羊を養いなさいと言われた（ヨハ 21:15～17）。人が生まれるのは一度だけだが、それを養うのは一生のことであるから、その仕事は生易しいものではない。愛、柔和、誠実、忍耐は牧者にとって不可欠である（I テサ 2:7～11、II テモ 2:24～25、4:2、5）。各教会の長老はそれぞれの教会の牧者である（使徒 20:28、I ペテ 5:1～3）。またペテロやパウロのように、一個所に限らず各教会で牧養の仕事を行う（ヨハ 21:15～17、II コリ 11:28、使徒 20:31、18:11、8:14～17）。

教師：教師の仕事は、信仰と真理とを教えることである（Iテモ 2:7、ガラ 6:6）。聖書は彼らにとって最も良い教科書である（IIテモ 3:16～17）。彼らの与えられた賜物は霊的知識で真理の言葉を正しく教える（Iコリ 12:8、IIテモ 2:15）。アポロはこの賜物に富んだ人であった（使徒 18:24～28）。パウロは最初、アンテオケ教会の教師であったが、その後神の教会全体の教師となった（使徒 13:1、IIテモ 1:11）。信者は聖書の知識があつて始めて、「だまし惑わす策略により、人々の悪巧みによって起こる様々な教えの風に吹きまわされたり、もて遊ばれたりする事がない。」（エペ 4:14、ホセ 4:6）。教会の徳を高める面において、教師の働きはとて重要である（Iテモ 4:13、IIテモ 2:2）。

5. 教会管理の精神

主イエスは言われた「異邦人の支配者たちはその民を治め、また偉い人たちは、その民の上に権力をふるっている。あなたの方の間ではそうであってはならない。かえって、あなたがたの間で偉くなりたいと思う者は、仕える人となれ」（マタ 20:25、26）。教会は神の家である為（Iテモ 3:15）、誰も“王様”や“政治家”となって教会を統治してはならない。

神の家の主は主イエスであつて、彼は唯一の元首である。誰も彼に取つて代わつてはならないし、そんな必要もない。彼は生きていて教会と共にいるからである（コロ 1:18、エペ 4:15、マタ 28:20、参考：Iサム 8:4～9、12:19）。

信者はみな兄弟である（マタ 23:8）。パウロ（IIペテ 3:15）、アポロ（Iコリ 16:12）、シラス（Iペテ 5:12）、テモテ（ヘブ 13:23）はみな兄弟と呼ばれ、フィベは姉妹と呼ばれた（ローマ 16:1）。エルサレムの使徒たちは兄弟と自称した（使徒 15:23、黙 1:9）。

長老たる者（Iペテ 5:1～3）、伝道者たる者（IIコリ 1:24）、及びすべての牧者は、権力を握つて信者を統轄するのではなく、むしろ信者の僕とならなければならない（IIコリ 4:5、マタ 20:26）。

年配者は若者に対し、わが子のように扱うべきである（Iテモ 1:2、IIテモ 1:2、テト 1:4、Iヨハ 2:1、12、18、3:7）。同様に、若者も年配者に対し、父母のように尊敬しなければならない（ピリ 2:22、Iテモ 5:1、2）。

パウロは、教会内に教師たる者が多く、父母たる者が少ないことに嘆いた（Iコリ 4:15）。パウロ自身、全ての事において“父母の愛”を以つて信者に接した（Iテサ 2:7～11、IIコリ 12:14～15、使徒 20:31～35）。これこそ教会管理の手本である。

三、 真の教会の備えるべき条件

主イエスはかつて、偽預言者や偽キリストが出現し多くの人を惑わすであろうと預言した（マタ 24:4～5、11、23～24）。だから私たちは真の教会かそれとも偽りの教会かを見極めなければならない。さもなければ、だまされて偽物を本物として自他とも誤らせることになる（参考：箴 14:12）。真の教会は次の条件を備えなければならない。

1. 聖霊が共に働くこと

教会は主の体である以上、主の聖霊が共にいなければならない。聖霊の無い教会はキリストに属する教会ではない。人数がいくら多くても、組織がいくら固くても、人間の意志によって出来た社会団体に過ぎない(ロマ 8:9、I コリ 12:13、I ヨハ 3:24)。

聖霊が共にいることによって神から来た事を証明することが出来る(ヨハ 1:32~33、3:34)。

聖霊が共にいて始めて罪を許したり、罪を残す力を持つことになる。この聖霊も信者が天国の嗣業を受け継ぐ証拠にもなる(ヨハ 20:21~23、エペ 1:13~14)。

2. しるしと奇跡が伴うこと

主は、「信じる者にはしるしが伴う」と約束した。しるしは真の神が共に働く証拠である(マル 16:17~20)。

しるしは宣べ伝える教えが本物だと証明している(ヘブ 2:1~4、使徒 14:3)。

しるしは神に遣わされる証拠である(II コリ 12:12、マタ 11:2~6)。

3. 宣べ伝えている教えが聖書に一致すること

教会はイエスと使徒、及び預言者たちの教訓を基にすべきである(エペ 2:19~20)。

宣べ伝えるものはキリストの教訓を越えたり、聖書にしるされている定めを越えてはならない(ヨハ 9~11、I コリ 4:6)。

パウロは、誰でも宣べ伝える福音が彼らと異なるなら、彼は人を救えないばかりか、人々を墮落へ導くため、彼は呪われると言った(ガラ 1:6~9、II コリ 11:4)。聖霊が共にいて、しるしが伴う教会でも、宣べ伝える福音に“古い種”が入っていたら、その教会は完全とは言えない(イザ 8:20、マタ 28:20、黙 22:18、19)。

四、 世の末における真の教会の使命

1. 使徒時代の教会を復興する

旧約時代の聖なる宮の崩壊と再建は、新約時代の教会の墮落と復興を預表する後の雨の聖霊降臨は、真の教会を復興するためである(ゼカ 10:1、4:6、参考：使徒 1:8)。

聖なる宮がもとの所に再建されたのは、世の末の真の教会は全てのことににおいて使徒時代の教会と同じように回復しなければならない事を預表している(エズ 3:3、エペ 2:19、20、ガラ 1:8、アモ 9:11、エレ 33:7)。

世の末の真の教会の栄光は、前の栄光よりも大きい(ハガ 2:9)。

2. 墮落した教会を改める

エリヤは世の末の真の教会を預表している：エリヤは神に求めて、三年間降らせなかった雨をその後降らせるようにと祈った。彼は天に上げられる前、神の道のために奮戦して神の教えに背くイスラエル人を責め、神に立ち返り恵みを受けられるようにさせた。将来天にあげられる教会も、道理から外れた教会にその

過ちを指摘し、彼らが真の神に立ち返って再生の洗いと更新した聖霊を受けるように導かなければならない(列王上 18:17~40、ミカ 3:8、マラ 4:5~6、テト 3:5)。

主イエスは十二使徒を遣わした時、彼らに「イスラエルの家の失われた羊の所へ行け」と言いつけた(マタ 10:6)。

パウロは主の御旨に従って、まずイスラエル人にキリストを証しした(使徒 13:44~46)。彼が神に祈り求めたのはイスラエル人が救われる事であった。彼らは確かに神に対して熱心であったけれど、真の知識によるものではなかったのだ(ロマ 10:1~3)。現在、多くの教会は、道に迷っていた当時のイスラエル人と同じである。彼らは自分と他人の救いの為に多くの犠牲を払い、苦勞するのを惜しまないが、残念ながら彼らは聖書の指示通りにしないのである。だから私たちはまず彼らに救い得る真の教えを伝え、聖霊の感動によって彼らが悟り、信じ、一つの群れに帰するよう求めるべきである(ヨハ 10:16、エレ 23:3~4)。

3. 偶像崇拜と神を信じない異邦人に警告を発する

主イエスは弟子たちに、聖霊が降った後エルサレムとユダヤの全土に福音を宣べ伝えるだけでなく、異邦人の地であるサマリア、更に地の果てまで宣べ伝えよと指示した(使徒 1:8、マル 16:15)。

世の末の使者は万民に、偶像を離れ、真の神を礼拝するように警告すべきである(黙 14:7~8、9:20~21、Iテサ 1:9)。

神の裁きの日が近づいている為、神に属するすべての民はバビロン(罪深い淫乱の世界)から早く出てくるべきだ。さもなければ彼らと共に滅びると宣告(黙 18:1~5、エレ 51:6~9、イザ 52:11、使徒 17:29~31、参考:黙 21:8)。

4. 真の教会の建設を全うする

ノアの時代に真の神が世界を滅ぼしたことは、世の末に人類が滅亡する事を預表している。ノアは箱舟を作りながら義の道を宣べ伝えた。真の教会は、外に対して伝道活動を行い、内に対して信者の徳を高める働きを同時に行い、主の御再臨までに教会建設の大いなる仕事を全うする(マタ 24:37、IIペテ 2:5、創 6:13、14、黙 21:1、2)。

真の教会は主の御再臨までに、聖霊の一致により道理の上でも一つにまとまって主の御旨を全うすることが出来る(エペ 4:3、Iコリ 12:13、エペ 4:13、1:10、ヨハ 17:11、21~23、10:16)。

羊の婚礼の前、新婦(教会)はすでに着飾って用意を整え(黙 21:2)、信仰にせよ、愛にせよ、聖潔にせよ、火に鍛えられ完全になって新郎である主イエスを迎えることが出来る(マラ 3:2~3、Iペテ 1:7、4:7~8、IIペテ 3:11~14、黙 19:7~8)。

第十八章 捧げもの

一、なぜ捧げものをするのか？

1. なぜなら全ては神の物であるから

世界とそのすべての物は神のもの（詩 50:10~12、89:11）。

富を得る力は神が与えてくれた（申 8:18、歴代上 29:12、サム上 2:7）。

生命、即ち働きの原動力は神が私たちにくれたもの（ヤコ 4:13~15、申 32:39）。

私たちは神の家令である為、常に主人の意志どおりに動く（ルカ 16:1~2）。

2. 神が私たちに捧げ物をするように言われた

「あなたの財産と、すべての産物の初なりをもって主をあげめよ。」（箴 3:9、申 26:1~3、10）。

主は言われた「あなた方は自分の為に、地上に宝を蓄えてはならない。むしろ自分の為に、天に宝を蓄えなさい。」（マタ 6:19~20）。

神は言われた「わたしの宮に食物があるように、十分の一全部をわたしの倉に携えてきなさい。」（マラ 3:10）。

「善を行うことと施しをすることとを、忘れてはいけない。」（ヘブ 13:16）。

3. 神の御恵みをお返しするため

神はそのひとり子を賜ったほどに、この世を愛して下さった（ヨハ 3:16、Iヨハ 3:16）。

神の御恵みにより、私たちはキリストのあがないを通して価なしに罪を許して頂いた（ロマ 3:23~25、詩 103:2~3、参考：使徒 2:38、22:16）。

私たちが神の子であるのは、聖霊が証ししている（ガラ 4:6、エペ 1:13~14、ロマ 5:5、8:15~16）

神は私たちの病を癒し、日ごとの食物を与えて下さる（詩 103:3、使徒 14:15~17）。

イスラエル人はらい病が治ると、雄の子羊2頭、雌の子羊1頭、麦粉十分の三エパに油を混ぜたものと油一ログを捧げた（レビ 14:1~2、10~11）。私たちのらい病（すなわち罪）が清くされてから、私たちはこれら以上の物を神に捧げているだろうか？（参考：ルカ 17:12~19、IIコリ 5:14~15）。

二、如何にして捧げものをするのか？

（一）十分の一献金をする

1. 十一献金の由来

アブラハムは持っている全ての物の内の十分の一を、いと高き神の祭司であるメルキゼデクに捧げた（創 14:18~20）。

アブラハムの子であるなら、彼の行った業をすべきである(ヨハ 8:39)。
バプテスマを受けて神に帰した者は皆アブラハムの子孫である(ガラ 3:27~29)。

ヤコブも十分の一を捧げる事を神に誓った(創 28:22)。

モーセの時代、十分の一献金が法律で定められていた。それは“神の物”と呼ばれ、人々はそれを守った(レビ 27:30、32)。

ヒゼキヤ王が国民の信仰を高めた時、国民に十分の一献金を施すよう命令した(歴代下 31:4~8)。

ネヘミヤがバビロンからエルサレムに帰った時、彼は国民に十分の一献金を施すよう命じた(ネヘ 10:37~38、12:44、13:10~12)。

マラキの時代、国民が十分の一献金を施さなかった為、神から叱られた(マラ 3:8~10)。

イエスが世に来られた時、ユダヤ人は十一献金を常にしていた(ルカ 18:18)。

十一献金の問題について主は、「律法の中で最も重要なこと(十一献金のこと)を見逃してはならない」(マタ 23:23、ルカ 11:42)と言われた。また、「神の物(十一献金)(レビ 27:30)は神に返しなさい。」(マタ 22:21)と言われた。

2. 十分の一献金の使い道

十分の一は神の仕事をしている人が受けるべき分である

- a. アブラハムは十分の一を神の祭司に捧げた(創 14:18、20)。
- b. 神は十分の一をレビの子孫に与えた。なぜなら、彼らは幕屋の仕事をしてきたからである(民 18:21、24)。

イスラエル人の長子は、主に帰せしめなければならない(出エジ 13:12~13)。しかし神は、レビ人を選んでイスラエル人のういごの代わりとし、神の幕屋の仕事を彼らにさせた。その為、イスラエルの十一部族は十分の一をレビ人に与えるのである(民 3:40~41)。レビ人もまた、もらった十分の一の中から十分の一を取り出して神に捧げるのである(民 18:25~26、ネヘ 10:38)。

- c. パウロは言った：旧約時代のレビ人と同じように、主は福音を宣べ伝えている者たちが民の捧げ物(十分の一やその他)によって生活すべきことを定められたのである(I コリ 9:13~14。参考：I コリ 9:11、ルカ 10:7、I テモ 5:17~18)。

パウロは今までに人から援助を受けてなかったので、彼は天幕造りの仕事をしてきた(使徒 18:1~3、20:32)。しかし彼はテモテにこう言った：「兵役に服している者は、日常生活の事に煩わされてはいない。ただ、

兵を募った司令官を喜ばせようと努める。」(II テモ 2:4~7)。彼はまた言った：「いったい、自分で費用を出して軍隊に加わる者があろうか。」(I コリ 9:7)。

神は言われた：「慎んで、あなたが世に生き長らえている間、レビ人を捨てないようにしなければならない。」(申 12:19、14:27)。

十分の一の一部分は神を恐れ、祭りをを行う為に使ってよい(申 14:22~26)。

十分の一の一部分は孤児や寡婦、寄留の他国人の為に使ってよい(申 14:28~29、24:12~13)。

(二) 心から喜んで捧げる

十分の一献金をすることは当然の事であって、捧げなくてはならないのである。もし捧げなかったら、それは“神の物を盗む”罪を犯すことになる(マラ 3:8)。また、ういごと木の実の初なりを捧げることも神が定めたことである(出エジ 13:12~13、23:19、ネヘ 10:35~36)。燔祭、素祭、酬恩祭の供え物はイスラエル人が神に捧げる重要なものである(参考：レビ 1~3 章)。これ以外に、イスラエル人は聖所を建てたり、貧しい人を助ける為にも非常に熱心に献金をしていた。この二種類の献金はクリスチャンにとって不可欠なものである。しかし、これらは自発的にするものである。以下のものは、旧約と新約時代にこの二種類の献金にまつわる事例と教訓とである。

1. 幕屋や聖殿を建てる為

イスラエル人は幕屋を作る為に、心から捧げ物をした(出エジ 25:1~7、35:5~9)。

ダビデ王と族長たちは、聖殿を作る為に力を尽くして捧げた(歴代上 29:1~9)。

ヨアシ王は主の宮を修繕する為、人々に捧げるよう勧めた(列王下 12:4~5)。

ヨシヤ王は民から銀を集めて宮の破れを繕った(列王下 22:3~5)。

民は宮の再建に喜んで金銀財物を捧げた(エズ 1:4~11、2:68~69)。

ネヘミヤは城壁工事のため、財力、人力を尽した(ネヘ 5:14~19)。

2. 孤児や寡婦や貧しい人を助ける為

神は特別にイスラエル人に、外国の寄留者、貧しい人、また孤児や寡婦を助けなさいと言われた(出エジ 22:21~24、ヤコ 1:27、ガラ 2:10)。

貧しい兄弟の為に、七年の終わりごとにゆるしを行う(申 15:1~11、参考：ロマ 12:13)。

刈入れの時、畑の隅から隅まで刈り尽くしてはならない。貧しい者や、寄留者、また孤児や寡婦との為に、これを残しておかなければならない(レビ 19:9~10、申 24:19~22)。

七年目になったら、地を耕やさず、この年にこの地で出来た産物は、全ての民の中の貧しい者に残す（出エジ 23:10～11）。

主イエスはこう言われた「もしあなたが完全になりたいと思うなら、帰ってあなたの持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。…そして、私に従って来なさい。」（マタ 19:21）。

ザアカイは自分の財産の半分を貧民に施した（ルカ 19:8）。

マケドニヤ教会の信者はエルサレムの聖徒を援助するために、自分のもっている能力以上に施した（II コリ 8:1～5）。

（三）捧げる時の精神

1．心から喜んで捧げる

神は言われた：「心から喜んでする者から、私に捧げる物を受け取りなさい。」（出エジ 25:2、5）。

「そこで氏族の長たち、イスラエルの部族の司たち、千人の長、百人の長及び王の工事を司る者たちは喜んで捧げ物をした。」（歴代上 29:6～9）。

「あなた（主）の民は、あなたがその軍勢を聖なる山々に導く日に心から喜んで己を捧げるであろう。」（詩 110:3）。

「各自は惜しむ心からでなく、また、強いられてでもなく、自ら決めた通りにすべきである。神は喜んで施す人を愛して下さるのである。」（II コリ 9:7、8:3）。

2．真心から捧げる

ダビデ王と民は、真心から自ら進んで捧げた（歴代上 29:9、11）。

マケドニヤの教会は、「聖徒たちへの奉仕に加わる恵みに預かりたい」と熱心に願い出た。この事から、誠心誠意だった事を表している（II コリ 8:4）。

主は言われた：「あなたは施しをする場合、右の手のしていることを左の手に知らせるな。」（マタ 6:3～4）。

アナニヤ夫婦は真心から捧げなかったので、逆に呪われて死んだ（使徒 5:1～11）。

3．最も良い物を捧げる

全き物を捧げる（レビ 22:17～25、マラ 1:6～8）。

初なりの物を捧げる（箴 3:9、出エジ 24:26）。

ういごを捧げる（創 4:4）。

アブラハムは、もっとも良い品を捧げた（ヘブ 7:4）。

4．力を尽くして捧げる

マケドニヤ教会は、患難の中、極貧の状態にも関わらず、自分の能力を超えて施しをした（II コリ 8:1～3）。

マリアは、出来る限りの事をして香油を捧げた（マル 14:8、1～9、ヨハ 12:1

～8)。

貧しいやもめは、持っている生活費全部を捧げた(ルカ 21:1～4)。

使徒時代の信徒は、聖霊によって感動され、全ての財産を捧げた(使徒 2:44～45、4:32～37)。

主は言われた：「多く与えられた者からは多く求められ、多く任された者からは更に多く要求されるのである。」(ルカ 12:48)。

5. 適切な時に捧げる

富んでいるうちに(イテモ 6:17～18)。

災いがまだ臨んでいないうちに(伝道 11:2、参考：エゼ 7:19)。

金銭がまだ使えるうちに - 主が再来すれば、金銭は無用になる(ルカ 16:9)。

まだ生きているうちに(伝道 9:10)。

主が必要とされているうちに：

- a. ヨセフは主イエスの死体をいち早く墓へ納めた(ルカ 23:50～53、マル 15:42～46)。
- b. ニコデモは捧げものの没薬と沈香をもっていち早く主の体に塗った(ヨハ 19:39～40)。

女たちは、主イエスのために、香料と香油を用意し墓に持って行って主の身体に塗ろうとしたが、その必要は無かった。なぜなら、主は既に復活していたからである(ルカ 23:56、24:1～2)。

三、 捧げることの益

1. 神の奉仕の仕事に対して

神の宮に食物があるように(マラ 3:10)。

もっとたくさんの働き人が出て来て、神の仕事が専念出来るように(参考：II テモ 2:4、I コリ 9:7～11、ピリ 4:15～16、ネヘ 13:10～11、マタ 9:37～38)。

すべての御業、例えば—働き人の養成、福音伝道、文字伝道、会堂建設等の仕事が順調に推行され、神に栄光をもたらし、人の益になるように。ゼルバベルの時代、民が自分の事だけを顧みていたので、神殿を建てるという奉仕の仕事が阻止されるに至った(参考：ハガ 1:2～8)。

2. 恵みを受けるものに対して

貧しい者や困っている者の生活に補助が得られるように(I ヨハ 3:17～18、ヤコ 2:15～16、申 15:7)。

彼らの信心に励ましが得られ、ますます神に感謝し、神をたたえるように(II コリ 9:12～13)。

彼らが寄付者の為に祈り、祝福を得られるように(II コリ 9:14、ヨブ 29:13、31:20)。

3. 捧げる者に対して

肉体が恵まれる

「人を見て恵む者は恵まれる。自分のパンを貧しい人に与えるからである。」(箴 22:9)。

「貧しい者を憐れむ者は主に貸すのだ。その施しは主が償われる。」(箴 19:17)。
十分の一を捧げる者は、神が、天からあふるる恵みを彼らに注がれる(マラ 3:10 ~ 12)。

神は、彼らが全ての事に満ち足りるようにされる(II コリ 9:8、申 15:10、箴 3:9 ~ 10、11:24 ~ 25)。

患難に遭った日は、主が必ず彼を救う(詩 41:1)。

ドルカスは数々の良い働きや施しをしていた為、神から特別な恩が得られ、死から復活した(使徒 9:36 ~ 41)。

霊的に恵まれる

コルネリオは数々の施しを成した為、神に記念され、救われた。 - 聖霊を受けて命が得られ、そして、罪の許しのバプテスマを受けた(使徒 10:1 ~ 8、44 ~ 48)。

「彼は貧しい人たちに散らして与えた。その義は永遠に続くであろう。」(II コリ 9:9)。

施しとは、自分の為に良い土台を築き上げ、真の命を得る事である(I テモ 6:17 ~ 19、マタ 6:20)。

金銭が無用になった時、永遠の天幕(天国)に連れて行かれる(ルカ 16:9、参考：マタ 19:20)。

主は言われた：「あなたの宝のある所には、心もあるからである。」(マタ 6:21)。

捧げる事は、人を更に神の事に関心を持たせ、神に近づかせる。

4. 捧げない人の結果

かえって貧しくなる(箴 11:24)。

祈りが神に受け入れられない(箴 21:13)。

神を憤らせる：

- a. 民は十分の一を納めなかった為、神に呪われた(マラ 3:8 ~ 9)。
- b. 神の家に関心を寄せていなかった為、神の恵みを失った(ハガ 1:9 ~ 11)。
- c. ベルシャザル王は神の恵みを軽く見てしまい、さらに神の宮の器を汚した為、神の罰に遭って死に、国も滅んだ(ダニ 5:27 ~ 30、18 ~ 24)。
- d. ヒゼキヤ王は、受けた恵みに報いる事をしなかった為、神を憤らせた(歴代下 32:25)。

私たちは、主イエス様の言われた言葉“受けるより与える方が幸いである。”を記念すべきである。また、志を立てて、力を尽くして捧げ、神の恵みに答え、人々

に益があるようにすれば、主に喜ばれる（使徒 20:35）。

クリスチャンは力を尽くして金銭を捧げるべきであり、奉仕の仕事で捧げる以外に、それぞれ自分の身体を捧げるべきである。そして、自分の出来る限り努力して奉仕の仕事をし、主の為に生きるべきである（ロマ 12:1、14:7～8）。

第十九章 クリスチャンの道德観

一、クリスチャンの家庭生活

ダビデはこう言った、「わたしは直き心をもって、わが家のうちを歩みます。」(詩 101:2)。主イエスは言った、「あかりをつけて、それを柵の下に置く者はいない。むしろ燭台の上において、家の中の全てのものを照らせるのである。」(マタ 5:15)。クリスチャンの靈的な責任は、その家族の救いを全うすることである。クリスチャンは神の教えに従い、その光を放つことによって、未信者である家族を感動し信じさせ、また信者である家族を更に熱心になるようにさせる。家庭に関する教えや家庭において各自の本分を聖書に基づき、以下に述べる。

(一) 婚姻の制度

1. 婚姻は神によって設立された

「神は言われた、人がひとりであるのは良くない。彼のために、ふさわしい助け手を造ろう。」(創 2:18~23、参考—マル 10:9、I コリ 11:11、創 24:12~14)。

2. 結婚はすべての人に尊ばれるべきである(ヘブ 13:4)

結婚相手を慎んで選ぶこと(創 6:2)。

不品行をしてはならない(ヘブ 13:4)。

ヤコブがラケルと婚約してから七年経つが、結婚するまで彼女に近づかなかった(創 29:21、参考：マタ 1:18~19、II コリ 11:2)。

3. 未信者と結婚してはならない(申 7:3、ヨシュ 23:11~13)

アブラハムは僕のエリエゼルに、息子の嫁をカナン人の娘から娶らせないように誓わせた(創 24:2~4)。

ソロモンは異邦の女たちと結婚したため、神に対して罪を犯した(ネヘ 13:23~27)。

未信者と結婚してはならない戒めは新約にも適用している(I コリ 7:39、II コリ 6:14~18)。

4. 一夫一婦制

神は初めに一人の男と一人の女を創造した(創 2:25、参考：マラ 2:15)。

二人が一体となる(創 2:24、エペ 5:31)。

信仰に入る前に二人の女を娶った人は監督(聖職者)になってはならない(I テモ 3:2、12、テト 1:6)。

5. 離婚の可否

「もし不信者の方が離れて行くのなら、離れるままにしておくがよい。」(I コリ 7:15)。しかし、パウロは続けて言った、「あなたが夫(或いは妻)を救いうるかどうかが、どうして分かるか。」(I コリ 7:16、参考：I ペテ 3:1)。ここでパウロは、信者の中で、もし相手が自分から離れて行った場合、忍耐してほしいとパウロは願った。そして、別れた妻は単身のままでいるか、或いは夫のもとへ帰るべきだとパウロは勧めた(マル 10:11~12、I コリ 7:11)。離婚は神に憎まれるからである(マラ

2:16)。

唯一信者が離婚できる正当な理由は、配偶者が姦淫を犯した場合に限る(マタ 5:31 ~ 32、19:8 ~ 9、参考:申 22:20 ~ 21)。

6. 夫が死去した後、妻は再婚できる(ロマ 7:2 ~ 3、I コリ 7:8 ~ 9、39)

7. 独身について

独身は神に奉仕する者にとっては有利である。しかし、それは神からの賜物を受けた者だけができることである(I コリ 7:25 ~ 35、参考:マタ 19:10 ~ 12)。

強制的に結婚を禁じたりすることは誤りである(I テモ 4:1 ~ 3)。

8. 親が子供の婚姻に関心を持つべきである

子供の婚姻の道を導くよう親が心がけるべきである(創 24:1 ~ 6、28:1 ~ 3)。

あなたの娘に遊女のすることをさせるのは罪である(レビ 19:29、申 23:17)。

娼婦や男娼の得た価を神の宮に携えてはならない(申 23:18)。

(二) 夫婦関係について

1. 妻に対して夫はどうすべきか

キリストが教会を愛するように、夫は妻を愛すべきである(エペ 5:25、28 ~ 29)。

夫は妻の弱さをわきまえて尊敬しなさい(I ペテ 3:7)。

妻をいじめてはならない(コロ 3:19、マラ 2:16)。

妻の意見を軽んじてはならない(I コリ 7:3 ~ 5)。

妻と楽しく生活する(伝 9:9、参考—創 24:67、雅 4:7 ~ 15)。

賢い妻は神から賜わるものである(箴 18:22、19:14)。

2. 夫に対して妻はどうすべきか

教会がキリストに従うように、妻は夫に服従すべきである(エペ 5:22 ~ 24、コロ 3:18、I ペテ 3:1 ~ 5)。

妻は夫を敬うべきである。サラがアブラハムを主と呼んだように(エペ 5:33、I ペテ 3:6)。

夫が自分の体を意のままにする権利を持たないように、妻も自分の体を意のままにする権利がない(I コリ 7:3 ~ 5)。

エバがアダムの助け手になったように、妻は夫の助け手になるべきである(創 2:18)。

箴言 31:10 ~ 31 には賢い妻について以下のように述べられている。

生き長らえている間、その夫の為に良いことをする(12 節)。

勤勉である(13、18、19、24 節)。

家事をうまくやりこなす(15、16、21、24、27 節)。

やさしい(20 節)。

賢い(26 節)。

神を恐れる(30 節)。

* すべて妻たる者は賢い妻に見習うのではないが。

婦人はうわべの飾りを気にするのではなく、つつましい身なりをし、慎みと貞淑をもって身を飾るべきである(I テモ 2:9 ~ 11、I ペテ 3:3 ~ 5)。

恥をもたらす妻は夫の骨に生じた腐れのようなものである（箴 12:4、21:9、士師 16:15～21）。

（三）親子関係について

1. 親が子に対する責任

家庭は宗教教育を発揮するところである。親の最大の責任は子供の信仰の育成である。

子供に神を恐れることを教える（創 18:19、詩 71:18、78:3～8）。

- a. ダビデが死ぬ前にその子ソロモンに、神を恐れ、その道を歩むようにと戒めた（列王上 2:1～4）。
- b. コルネリオは一家そろって神を恐れるよう導いた（使徒 10:1～2）。
- c. ノア、ヨシユア及び多くの者が全家族で神を礼拝した（創 7:1、ヨシユ 24:15、II ペテ 2:5）。

主の訓戒によって子供を育てよ（エペ 6:4）。

- a. 子供は主からの嗣業である（詩 127:3）。共に命の恵みを受け継ぐ（参考：I ペテ 3:7）。子供を尊重すると共に、いらだせてはならない（コロ 3:21、参考 - マタ 19:13～14、ミカ 2:9）。
- b. 親は、子供が幼い時から聖書を教え、信仰の基礎を築くべきである（II テモ 3:15、参考 - 申 6:6～7、箴 22:6、II テモ 1:5）。ヨセフとダニエルは少年の頃から信仰の基礎ができていて、素晴らしい人となった（参考—創 37:2、28、39:9、ダニ 1:4、8）。

子供の過ちを随時直す（箴 13:24、19:18、22:15、23:13～14）。

- a. エリがその子らを懲らしめなかったため、彼らは自らの罪で亡くなった（サム上 2:12～25、29～34）。
- b. ヨブは子供たちとの宴会の後、彼らと呼び寄せ聖別し、彼らの為に燔祭をささげた。なぜなら、彼は子供たちが罪を犯してその心に神を呪うのを恐れたからである。ここから、子供たちの信仰に対するヨブの関心が良く分かる（ヨブ 1:5）。
- c. 「あなたの子を懲らしめよ。そうすれば彼はあなたを安らかにし、またあなたの心に喜びを与える。」（箴言 29:17）。

子供の為に祈る（歴代上 29:19、ルカ 23:28）。

子供を育てる最終的な目標は、彼らを主のために生きる聖なる器として育成することである（サム上 1:28、ロマ 12:1、14:7～8、I コリ 6:20、II テモ 2:21）。

2. 子供は親に対してどうすべきか

親を尊敬すべきである（出エジ 20:12）。子供たちに、親を尊敬するよう身につけさせるべきである。なぜなら、親は彼らを生み、養い、教育させたからである。それ故、子供たちは親を愛し、尊重し、尊敬し、顧みるべきである（I テモ 5:4）。

親孝行の教え

主あって両親に従いなさい（エペ 6:1、コロ 3:20、箴 6:20～22、参考—ルカ 2:51）。もし両親の言うことが主の教えに反するなら（例えば、悪事を行って神から離れる等）、それに従う必要はない。

親の教訓を受け入れるべきである（箴 13:1、15:5、ヘブ 12:7～9）。

親に暴力を振るってはならない(箴 19:26)。

親を侮ってはならない(箴 15:5、23:22)。王様としてのソロモンは母親をよく尊敬した(列王上 2:19)。

親を呪ってはならない(レビ 20:9、マタ 15:4)。

子供は親の面倒をみるべきである

ルツは貧しい中、麦を拾って義理の母親であるナオミを養った(ルツ 2:2)。

献金をして、親を養う責任は果たすべきだとイエスが教えた(マル 7:10~12)。

十字架の上で死ぬ前に、イエスは母親の面倒をヨハネに頼んだ(ヨハ 19:26~27)。

親と共に天国の喜びを味わうために彼らを信仰に導くべきである(参考:マル 5:19、使徒 16:31、ロマ 9:1~3)。

親を侮る者は呪われる(申 27:16)

「自分の父母をののしる者のともしびは暗闇の中に消える」(箴 20:20、参考:30:17)。

アブサロムが父ダビデの王座を盗み、ダビデを殺そうとした結果、自分が刺されて殺された(サム下 15:13~14、18:9~15)。

6 親を敬う者は祝福される(出エジ 20:12、エペ 6:2~3)

親孝行をするヨセフは、エジプトで兄弟と再会した時、父親が元気かどうか早く知りたかった(創 43:27~28)。ヨセフは地位の高い人であったが、羊飼いである父親を連れて来て養った(創 46:29~30)。

ルツは、貧しいやもめである義理の母を敬い養った(ルツ 1:16~17、2:2~18、3:11)。神は彼女を祝福し、金持ちでやさしいボアズと結婚させた(ルツ 2:1、4:13)。ダビデ王はルツから数えて第三代目の子孫である(ルツ 4:17、参考:サム下 15:1~5)。

(四) 兄弟関係について

1 . 兄弟と和合して共にいるべきである(詩 133:1)

兄弟が和合して共にいると、親は幸いである(創 27:41~42、サム下 13:37)。

兄弟の和合の秘訣とは:

嫉妬しない(創 37:11、使徒 7:9)。

憎しまない(創 37:4、レビ 19:17)。

寛容でいる(創 13:8~9、Iコリ 6:7~8)。

許し合う(創 50:15~21、コロ 3:13)。

2 . 兄弟が困難に会った時助け合う(箴 17:17)

兄弟が必要とするものを十分に貸し与えるべきである(申 15:7~11)。

「兄弟に金や食物を貸す場合、利子や利息を取ってはならない。」(レビ 25:35~37、申 23:19~20)。

病気の時、兄弟を助け、その面倒を見るべきである(ヨブ 42:11、参考:19:13、マタ 25:36)。

アブラハムは危険にさらされながらもロトを救った(創 14:13~16)。

自分の家族を顧みない者はその信仰を捨てたことになる(Iテモ 5:8)。

3. 兄弟の為に子孫を残す（申 25:5～10、参考：マタ 22:24）

旧約時代、死んだ兄弟の為にそのやもめを娶って子供を残す習慣があった。クリスチャンはこのように行う必要はないが、この事は兄弟の間にある責任を示す（創 38:7～8）。

ラハブがイスラエルの探り人に自分の親戚を保護するよう願った（ヨシュ 2:12～13、6:23）。

パウロは兄弟の名が天に書かれて救われる為、自分がキリストから離されて犠牲になってもかまわないと思った（ロマ 9:3、参考：黙 21:27、ルカ 10:20）。

（五）人々に及ぶクリスチャンの家庭愛

主イエスはこう言われた、「神の御言を聞いて行う者こそ、わたしの母、わたしの兄弟なのである。」（ルカ 8:21）。パウロもこう言った、「老人をとがめてはいけない。むしろ父親に対するように、話してあげなさい。若い男には兄弟に対するように、年取った女には母親に対するように、若い女には真に純潔な思いをもって、姉妹に対するように勧告しなさい。」（I テモ 5:1～2）。それ故わたしたちは、他の信者や社会に大いなる家庭愛を広げよう（II ペテ 1:7）。

1. ヨブは、やもめや孤児や貧しい者を自分の家族のように扱った（ヨブ 31:16～22）。
2. パウロとテモテの関係は親子のようだった（I テモ 1:2～4、II テモ 1:2、I コリ 4:17）。
3. 苦しんでいる孤児ややもめを特に顧みるべきである（ヤコ 1:27、I テモ 5:16、申 10:18、27:19、エレ 49:11）。
4. 兄弟愛を続けよう（ヘブ 13:1、マタ 23:8、ロマ 12:10、I ヨハ 4:20～21）。

二、クリスチャンの社会生活

主イエスはこう言われた、「あなた方は、地の塩である。あなた方は、世の光である（マタ 5:13～14）。主は決して弟子たちに、世の人々から離れて俗世の生活を送らせなかったのではなく、むしろ、彼らにこの邪悪な世界において真理を实践させ、世の塩となって社会の腐敗を阻止させ、また世の光となって、人々を公明正大な道に導くようにさせたのである（ピリ 2:14～16）。それでは、クリスチャンはこの世においていかにして生活を送れば、主の重大な使命に応えることができるのだろうか？これらのことを聖書の教訓に基づいて以下に例を挙げる。

- （1）**教育についてのクリスチャン生活の原則**：神に栄光を帰し、人々に幸を与えることだ（I コリ 6:20、10:24、ロマ 15:2）。教会は人が高等教育を受けるのを決して阻止したりはしない。両親または青年自身が神に栄光を帰し人に益を与えるという原則の下にある学校を選び、そして自分の利益だけのために選ぶということさえしなければ、学校で学習することは彼を害することはない。そして信仰が応用できれば、主のために更に光を出すことができる。

例：

1. モーセはエジプト人の全ての学問を学んだ（使徒 7:22）

モーセは元々、エジプトの王宮で大いに楽しい生活を過ごしていたが、同胞を救うためにパロから迫害を受け、そしてそれから逃れて、全ての富と享楽と権力とを喜んで捨てた（ヘブ 11:23～27、使徒 7:24）。

神は彼を通してイスラエル人をエジプトから救い出し、荒野においては彼を通して「モーセの五書」—創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記を授けた。彼が指導と著作に長けていたことと、彼がエジプトにいた頃に習得した学問とが決して無関係だった訳ではない。（参考：使徒 7:22、ヨハ 1:17）

2. ダニエルはカルデヤの学問を学んだ（ダニ 1:3～5、17）

ダニエルは少年時代から信仰が厚かった（ダニ 1:8）。後に王に選ばれてバビロンの最高教育を受けた。その時、神は彼らに（他に 3 人の聖徒がいた）特別に智恵と賢さを賜り、また、様々な文字と学問においても異邦人の他の学生よりも十倍優れさせた（ダニ 1:17～21）。

卒業後は王宮で奉仕し（参考：ダニ 1:4）、メデア人のウリヤ王の頃、王に忠信であったために総監に躍進した（ダニ 6:1～5）。後に、同僚の嫉妬と陰謀によって獅子の穴に投げ入れられたが、神が彼を助けられたのでウリヤ王に更に神を認識させた。このように学問と地位、また信仰と徳があるダニエルは異邦の地において神に大いなる誉れを帰させ、また異邦の地で囚われている同胞たちに大いなる益をもたらした（ダニ 6:6～10、16～18）。

3. パウロはガマリエルの弟子だった（使徒 22:3）

ガマリエルは当時の最も有名な律法の教師であり、人々の尊敬を集めていた（使徒 5:34～40）。パウロはかつて彼の下で教育を受け有名な学者となった（参考：使徒 26:24）。しかしまだ主を信じていなかった頃は、彼の知識は彼を傲慢な者にさせていた（参考：I コリ 8:1、使徒 9:1～2）。

主イエスに帰した後、彼は自らを義の器として捧げ、主のために福音を広く宣べ伝えた。また主はいにしえから隠されていた奥義を彼に啓示され、彼を通して数多くの書簡を書いて聖書とされた（ロマ 16:25、ガラ 1:11～12、参考：マタ 13:52）。

(2) 職業について

1. 正当な事業をする（エペ 4:24）

聖書は言う：「すべてのことは許されている。しかし、すべてのことが益になるわけではない。すべてのことは許されている。しかし、すべてのことが人の徳を高めるのではない。」（I コリ 10:23）。職業は人の肉体と霊性に益さえあれば、尊い卑しいは関係なく、肢体にそれぞれの働きがあるように尊卑の差別はないのだ。しかし、賭博場、娼家、ダンスホールなどの正当ではない事業は経営してはならない。（参考：テト 3:8、14、申 23:17～18）

イエスの時代、大工は人々から蔑まれていたが、神は彼のひとり子を大工ヨセフの家にお生まれにならせた（参考：マタ 13:55）。クリスチャンは世の人が蔑む職業の人々を尊重せねばならない。例えば、道路清掃員、清掃員、運転手、肉体労働者等。なぜなら、彼らはこの社会において必要不可欠な人々だからである（参考：I コリ 12:22～23、ルカ 16:15）。

2. 奴隷問題

パウロは奴隷にこう言った「召されたとき奴隷であっても、それを気にしないがよい。」（I コリ 7:21）。「何事についても、肉による主人に従いなさい。」（コロ 3:22）

～24)。また一方で、主人に対して僕を合理的に公平に扱うように命じた(エペ 6:9、コロ 4:1)。

しかし、パウロは僕たる者にこう望んだ「もし自由の身になりうるなら、むしろ自由になりなさい。」(I コリ 7:21)。これは僕の仕事と地位を軽んじているからではなく、彼は主人たる者も僕たる者もキリストにあってはみな一つだ、と考えているからである(ガラ 3:28)。

3. 労働問題

聖書は言う「六日のあいだ働いてあなたのすべてのわざをせよ。」(出エジ 20:9)。パウロは教会にこう指示した「働こうとしない者は、食べる事もしてはならない。」(II テサ 3:10)。彼はまた教会に、あのような働きもせず飯を食べるような者を罰するべきだと命じた(I テサ 4:11、II テサ 3:8～14)。パウロは自ら天幕を作って皆に模範を示した(使徒 18:3、20:34、I テサ 2:9)。信者は働きもせずに飯を食べる事を恥や罪悪と考えるべきだ。家が裕福な者は遊びにふけて豪華で贅沢な暮らしをすべきではなく(ルカ 16:19、22、25)、むしろ生活が安定である以上、心身ともに主に捧げるべきである(ロマ 6:13、12:1)。

(3) 人に対して

1. 誠実であるべき

人に対して誠実であって偽ってはならない(ゼカ 8:16、エペ 4:15 箴 3:5)。

商売をする時は不正をしてはならない(箴 11:1、申 25:13～16、箴 21:6)。

役人たる者は収賄してはならず、また汚職してはならない(申 16:19、ミカ 7:3、参考：ダニ 6:4、22)。

一度言った事は損をしても変えてはならない(詩 15:4、参考：士師 11:30～40)。

アブラハムは心が誠実であったために選ばれた(ネヘ 9:7～8)。

神は心が誠実である者を必ず助けられる(歴代下 16:9)。

誠実な者は神の真の民である(ヨハ 1:47)。

2. 慈しみがある

クリスチャンは決してナバルのように悪をもって善に報いてはならない(サム上 25:21)。また目には目を歯には歯を、ということもしてはならない(マタ 5:38)。

善をもって悪に勝つべきである(ロマ 12:21)。誰に対しても恨みを抱いてはならず、主やヨセフのようにただ愛を持つべきである(ルカ 23:34、創 50:15-21、I コリ 13:4-9)。

孤児や寡婦、貧しい人や病人、患難に遭っている人たちには憐れみの心をふさいではならない(I ヨハ 3:17)。また、彼らが必要とする物を与えるべきである(ヤコ 2:14-16)。祭司やレビ人のように、死にかけて助けを求めている人に対して見て見ぬふりをしてはならない(ルカ 10:30-32、申 22:1-4)。

善を行うことは神が特別に言いつけたことだ(申 15:7～8、ガラ 2:10)。昔の聖徒たちはみな貧しい人を救済することを美德として熱心にこれを実践した。例：ドルカス(使徒 9:36)、コルネリオ(使徒 10:2～3)、悔い改めて主に帰したザアカイ(ルカ 19:8)。

3. 公平を行う

「外見で分け隔てをしてはならない」(ヤコ 2:1)。「貧しい人を偏ってかばってはならない」(レビ 19:15)。しかし、裕福な者を重んじて貧しい者を軽んじることはなおさらよくない(申 1:17)。「主が見るところは人とは異なる。人は外の顔かたちを見、主は心を見る。」(サム上 16:7、参考：ルカ 16:15)。

裁きは公正でなければならぬ(箴 24:23～24)。「先に訴え出る者は正しいように見える。しかしその訴えられた人が来て、それを調べて、事が明らかになる。」(箴 18:17)。ダビデはかつてデバだけの話を聞いて是非を判定したため、メピボセテに無実の罪を着せてしまった(サム下 16:1、4、19:24～30)。たとえ証人がいたとしても安易に信じてはならない。イゼベルはかつて二人の証人を通してナボテに害を与えたからだ(列王上 21:8～14)。ユダヤ人たちが主イエスを陥れようとした時も同じ手段を使った(マタ 26:59～62)。また物的証拠でもって事件を判定してもならない。誠実なヨセフは主人によって投獄された。というのは、彼の主人は妻がなぜヨセフの衣服を手を持っていたかを追求して調べなかったからだ(創 39:11～20)。

正義を主張することに勇敢でなければならぬ：歴代の預言者たちは神の義を広めるために権勢と威嚇を恐れず、罪悪を指摘し、人々を義に導いた。例：ダニエル(ダニ 4:27)、ゼカリヤ(歴代下 24:20～21)、バプテスマのヨハネ(マタ 14:3～11)、主イエスもこのようであった(ヨハ 7:7、マタ 23:13～39、21:12～14、ルカ 19:45～47)。

義を行うことは、冤罪を減らすだけでなく、更に人々に善を行うことによって喜び、仕事において忠実であるように激励することができる。上に立つ者がもし義を行うならその位は堅く立つ(箴 16:12)。民がもし義を行うなら、その国は高く挙げられる(箴 14:34)。また裁きの日には必ず救われる(箴 11:4)。

(4) 社交について

1. 悪い交わりをしてはならない(I コリ 15:33)

交わってはならない者：不信の者、不義の者(II コリ 6:14～18)、世の友(ヤコ 4:4)、怒る者(箴 22:24)、歩き回って人のよしあしを言う者(箴 20:19)、不従順な者(箴 24:21)、酒を愛す者(箴 23:20)等。

親しくすべき者：教会の者(I ペテ 2:17、ロマ 12:10)、清い心で主に祈る者(II テモ 2:22)、知恵のある者(箴 13:20)、主イエス(ヨハ 15:14)、神はアブラハムを友と呼んだ(ヤコ 2:23、歴代下 20:7、イザ 41:8)。

ヨナタンとダビデの友情：ヨナタンは一番大事な物をダビデに贈った(サム上 18:1～4)。ダビデのために弁護し、とりなしをした(サム上 19:1～7)。喜んでダビデを主人として譲った(サム上 23:15～18)。ダビデはヨナタンの死を非常に悲しみ、泣いて断食をした(サム下 1:11～12)。ヨナタンへの愛は女の愛にも勝ると歌った(サム下 1:26)。ヨナタンの死後、彼との友情を記念し、彼の子メピボセテによくした(サム下 9:1～8)。

2. 酒を飲んではいけない

酒の害：酒の強さは人を病気にする(ホセ7:5)。酒を愛す者は貧しくなる(箴23:21)。しまいには子供を売って酒を飲むようになる(ヨエ3:3)。酒は人に争いを生じさせる(箴23:29)。淫乱になる(創19:30~38)。裸になる(創9:21)。身と国は滅びになる(ダニ5:1~9、25~31)

聖書の教訓：幕屋に入る(幕屋は真の教会を預表する：ヘブ8:2)時、死を避けるために酒を飲んでではない(レビ10:9~10 エゼ44:21)。主に帰したナジル人は(信者はみな主に帰したのである：ガラ3:27)ぶどう酒、濃い酒のどちらも飲んでではない(民6:1~3、士師13:4、7、14)。預言者、王たる者(信者はみなこれに当たる：Iコリ14:31、黙5:9~10)。ぶどう酒、強い酒のどちらも飲んでではない(ルカ1:15、箴31:4)。酒に酔う者は神の国を受け継ぐことはできない(Iコリ6:10、ガラ5:21)。イスラエル人は荒野での40年間、ぶどう酒も濃い酒も飲まなかった(申29:5~6)。聖書は言う：「酒は赤く、杯の中にあわだち、なめらかにくたる、あなたはこれを見てはならない。これはついに、へびのようにかみ、まむしのように刺す。」(箴23:31~32)。

3. 娯楽

踊り：踊りは両性の本能を放縦させ、また悪の念を生じさせ、ついには罪を犯させる。淫乱の悪を避けるために聖潔な心を守り、クリスチャンは踊りに賛同してならない。(参考：マタ5:27~30、Iコリ7:1、IIテモ2:22)

賭博：賭博とは一種の窃盗行為である。それは負けた者を苦しませ、また失ったお金を補うために盗みを働かせ、様々な違法行為をさせる。勝った者には酒と色情の宴に溺れさせ、平和な家庭を混乱させる。聖書は言う：「隣人の家を貪ってはならない。彼の所有物全てでもある。」(出エジ20:17)。また言う：「金銭を愛することはすべて悪の根である...」(Iテモ6:10)。それゆえ、クリスチャンは自分を害し神の御旨に背く賭博行為は行ってはならない。

映画と芝居：映画、テレビ、または演劇は、もし良い方に利用すれば、教育に有益である。しかし今日の人たちの心は邪悪な方へと傾いているため、企業は観衆の心理に迎合して、金もうけのために様々な内容を作り出しているが、その多くは性に関する淫らなものや悪巧みのものだけである。このような状況の下で自分や他人にその悪を染まらせずパウロの精神を保って行動すべきである(Iコリ8:13)。

□ 聖書は言う：「神の目は清く悪を見られない、また不義を見られない。」(八バ1:13)。昔の聖徒は神に言った「私の目をほかにむけて、むなしいものを見させず、目を閉じて悪を見させないでください。」(詩119:37、イザ33:15)。エバとダビデの罪を犯した原因はどちらも目と関係があった(創3:6、サム下11:2~8)。目の情欲は神から来たものではないので、私たちはヨブのように自分の目と約束をして、不正な本や写真などは見ぬべきである。また敬虔ではない歌、曲、CDは聞かないように志すべきである(Iヨハ2:15~16、ヨブ30:1)。

装飾：女性はわざと艶やかな格好をして人目を引くようなことはしてはならな

い。聖書は言う「女はつつましい身なりをし、髪を編んだり、金や真珠をつけたり、高価な着物を着て着飾るべきではない。(Iテモ 2:9~10、Iペテ 3:3)。「女は男の着物を着てはならない、また男は女の着物を着てはならない。」(申 22:5)。「柔和でしとやかな霊を飾りとすべきである。」(Iペテ 3:4~5)。清潔で簡素な身なりをすべきであって、過度に着飾ってお金を無駄遣いして不徳を着るべきではない(参考:ルカ 16:19、25、黙 17:3~5)。

(5) 国家に対して

国家とは人民の安全と利益のために組織されたものである。その立法の原則は公正と正直と仁愛に基づくべきである。クリスチャンがいかにして自国に本分を尽くすべきかが聖書にはっきりと記載されている。

1. 全ての人の立てた制度に従う

「あなたがたはすべての人の立てた制度に主のゆえに従いなさい。あるいは悪を行う者を罰し善を行う者を賞するために王からつかわされた長官であろうと、これに従いなさい。」(Iペテ 2:13~14、ロマ 13:1~5、テト 3:1)。

2. 国家が定めた規定のあらゆる税を納めなければならない

「あなたがたは、彼らすべてに対して、義務を果たしなさい。貢を納むべき者には貢を納め、税を納むべき者には税を納めなさい。」(ロマ 13:6~7)。主イエスはこう言われた「カイザルのものはカイザルに返しなさい。」(マタ 22:20~21、参考:マタ 17:24~27)。

3. 王たちと上に立っているすべての人たちを尊び、彼らのために祈りなさい(Iペテ 2:17、Iテモ 2:1~3)。

4. 政府の法令と神の御旨が相反する場合は神に従うべきである

もし権力者が権力を濫用する方向へ向かい、神の御旨に背いて人権を軽んじ、人民に正当な信仰と宣教を禁ずるならば、クリスチャンは昔の聖徒を倣うべきである:ダニエルと3人の友人や使徒ペテロとヨハネたちのように威武に屈さず、ただ神の命令に従って主に忠実であるべきだ(ダニ 6:4~10、3:1~18、使徒 5:29、4:18~20)。

国家には司法機関があるが聖書ではクリスチャンに法廷で互いに訴え合うことを許していない。これは決して法廷を軽視しているのではなく、彼らに争うことが名誉に関わる事にせよ財産に関わる事にせよ、常に主の愛を思い出させるためだ。損をすることをむしろ願い、また侮られることをむしろ願い教会の仲裁に聞き従って、兄弟を心から許すべきだ。天国の生活の根本的な原則である“愛”を暗黒な社会において実践させよう!(Iコリ 1~8、13:4~8、マタ 18:21~35、コロ 3:13)。

第二十章 再臨

イエス・キリストの再臨はクリスチャンの最大の望みであり、なぜなら主の再臨によって全ての望みは実現されるからである（テト 2：13、ピリ 3：20～21、II テモ 4：8）。

一、聖書の論拠

1. 旧約聖書の預言

「主は来られる、地をさばくために来られる。」（詩 96：13）。「あなたがたの神、主はこられる、もろもろの聖者と共にこられる。」（ゼカ 14：5～6）。

「見よ、主は火の中にあらわれて来る。」（イザ 66：15）。

参考：ダニ 7：13～14、詩 98：9、50：3、イザ 35：4、40：10、マラ 3：1～2、申 33：2）。

2. キリスト自らの約束

「人の子は父の栄光のうちに、御使いたちを従えて来る。」（マタ 16：27、マル 8：38、ルカ 9：26）。

「あなたがたのために、場所を用意しに行く。行って場所の用意ができたならば、またきて、あなたがたを私のところに迎えよう。」（ヨハ 14：2～3）。

再臨についての詳しい事は、マタイ 24 章、マルコ 13 章、ルカ 17 章と 21 章に記載されている。

再臨の喩えについては：十人のおとめが花婿を迎える（マタ 25：1～13）、それぞれの能力に応じて責任を授かる（マタ 25：14～30）、羊とやぎを分ける（マタ 25：31～46）、主人の帰宅を待つ僕（ルカ 12：35～40）、銀と十人の僕（ルカ 19：12～27）とがある。この他に主の昇天後、ヨハネに啓示して書かれた「黙示録」には、主の御再臨が近い事が書いてある（黙 1：7、3：11、16：15、22：20）。

3. 天使と使徒の証言

天使が言った：「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなた方が見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう。」（使徒 1：10～11）。

ペテロが言った：「あなた方にゆだねられている神の羊の群れを牧しなさい。... そうすれば大牧者が現れる時には、しばむことのない栄光の冠を受けるであろう。」（I ペテ 5：2～4）。

ヨハネが言った：「愛する者たちよ。わたしたちは今や神の子である。しかし、わたしたちがどうなるのか、まだ明らかではない。彼が現れる時、わたしたちは、自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿をみるからである。」（I ヨハ 3：2）。

パウロが言った：「わたしたちの国籍は天にある。そこから、救い主、主イエ

ス・キリストの来られるのを、私たちは待ち望んでいる。」(ピリ 3:20)。
ヤコブが言った：「兄弟たちよ、再臨の時まで耐え忍びなさい。」(ヤコ 5:7~8)。
「キリストもまた、多くの人の罪を負うために、一度だけご自身をささげられた後、彼を待ち望んでいる人々に、罪を負うためではなしに二度目に現れて、救いを与えられるのである。」(ヘブ 9:28)。

二、再臨の光景

1. 無数の天使を率いて炎の中に現れる

「アダムから七代目にあたる子孫エノクも彼らについて預言した：見よ、主は無数の聖徒たちを率いてこられた。」(ユダ 14)。

「主イエスは炎の中で力ある天使たちを率いて天から現れる。」(II テサ 1:7)。

2. 聖徒は先に復活し、空中で主と現れる

「私たちが信じているように、イエスが死んで復活されたからには、同様に神はイエスにあって眠っている人々をも、イエスと一緒に導き出して下さるであろう。...ご自身が天から下ってこられる。...そしてキリストにあって死んだ人々がまず最初によみがえる。」(I テサ 4:14、16)。

3. 私たちは姿を変えられて天に上げられ、主と空中で会う

「終わりのラッパの響きと共に、またたく間に一瞬にして変えられる。ラッパが響いて、死人は朽ちない者によみがえらされ、私たちは変えられるのである。」(I コリ 15:52)。

「それから生き残っている私たちが、彼らと共に雲に包まれて引き上げられ、空中で主に会い、こうしていつも主と共にいるであろう。」(I テサ 4:17)。

4. 全ての人の目は彼を仰ぎ見、地上の諸族は嘆くであろう

「見よ、彼は雲に乗ってこられる。全ての人の目、ことに、彼を刺し通した者たちは、彼を仰ぎ見るであろう。また地上の諸族はみな、彼のゆえに胸を打って嘆くであろう。」(黙 1:7)。

「その時人の子のしるしが天に現れるであろう。またそのとき、地の全ての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とをもって人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るとであろう。」(マタ 24:30)。

三、再臨の結末

キリストの再臨の目的は人々を裁くためである。善人には褒美を与え、悪人には罰を与える。聖書に基づいて簡略に述べる。

1. 聖徒は天国に入り永遠の命を受ける

「そのとき王は右にいる人々に言うであろう。“私の父に祝福された人たちよ、さ

あ、世の初めからあなた方のために用意されている御国を受け継ぎなさい”。」(マタ 25 : 31 ~ 34)。

「今や、義の冠が私を待っているばかりである。かの日には、公平な審判者である主が、それを授けて下さるであろう。」(II テモ 4 : 7 ~ 8)。

「そうすれば、大牧者が現れる時には、しばむことのない栄光の冠を受けるであろう。」(I ペテ 5 : 4)。

2 . 悪人は地獄へ落ち永遠の刑罰を受ける

「それは、主イエスが炎の中で力ある天使たちを率いて天から現れる時に実現する。その時、主は神を認めない者たちや、私たちの主イエスの福音に聞き従わない者たちに報復し、そして、彼らは主のみ顔とその力の栄光から退けられて、永遠の滅びに至る刑罰を受けるであろう。」(II テサ 1 : 7 ~ 9)。

「おくびょうな者、信じない者、忌むべき者、人殺し、姦淫を行う者、まじないをする者、偶像を拝む者、すべて偽りを言う者には、火と硫黄の燃えている池が、彼らの受くべき報いである。これが第二の死である。」(黙 21 : 7 ~ 8)。

「王は左にいる人々にも言うであろう、“のろわれた者どもよ、私を離れ、悪魔とその使いたちのために用意されている永遠の火に入ってしまったえ”。」(マタ 25 : 41 ~ 46)。

3 . 悪魔は火の池に投げ入れられ永遠の苦しみを受ける

「彼らを惑わした悪魔は、火と硫黄の池に投げ込まれた。そこには、獣もにせ預言者もいて、彼は世々限りなく日夜、苦しめられるのである。」(黙 20 : 10)。

「悪魔とその使いたちのために用意されている永遠の火に入ってしまったえ。」(マタ 25 : 41)。

4 . 古い天地は消え去り新しい天と地が現れる

「また見ていると、大きな白い御座があり、そこにいますかたがあった。天も地も御顔の前から逃げ去って、あとかたもなくなった。」(黙 20 : 11)。

「天地は滅びるであろう。しかしわたしの言葉は滅びることはない。」(マタ 24 : 35)。

「主の日は盗人のように襲って来る。その日には、天は大音響をたてて消え去り、天体は焼けくずれ、地とその上に造り出されたものも、みな焼きつくされるであろう。しかし、わたしたちは、神の約束に従って、義の住む新しい天と新しい地とを待ち望んでいる。」(II ペテ 3 : 10 ~ 13)。

四、再臨の予兆

主は言われた「その日、その時は、だれも知らない。天の御使いたちも、また子も知らない。ただ父だけが知っておられる。」(マタ 24 : 36)。キリストの再臨の日はいつであるかは人にははっきりとは教えていない。しかし、再臨の前に起こる様々な前兆によって、再

臨の日が遠いか近いかが分かる。再臨の前の予兆に関する事を下に列挙する：

(一) 世界において

1. 罪は積み積もって天に達す

ノアの時代とソドムとゴモラの滅亡は全て「罪悪のはなはだしさ」による（創 6：11～13、18：20）。将来の世界の滅亡の根本的原因も罪悪がはびこることによる。

「このことについては知っておかねばならない。終わりの時には、苦難の時代が来る。その時人々は自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者、高慢な者、神をそしめる者、親に逆らう者、恩を知らぬ者、神聖を汚す者、無情な者、融和しない者、そしめる者、無節制な者、粗暴な者、善を好まない者、裏切り者、乱暴者、高言する者、神よりも快楽を愛する者、信心深い様子をしなながらその実を捨てる者となるであろう。こうした人々を避けなさい。」（II テモ 3：1～5）。

「これらの災害で殺されずに残った人々は、自分の手で造ったものについて、悔い改めようとせず、また悪霊のたぐいや、金、銀、銅、石、木で造られ、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を礼拝して、やめようとしなかった。また、彼らは、その犯した殺人や、まじないや、不品行や、盗みを悔い改めようとしなかった。」（黙 9：20～21）。

「わたしはまた、もうひとつの声が天から出るのを聞いた、“わたしの民よ。彼女から離れ去って、その罪にあずからないようにし、その災害に巻き込まれないようにせよ。彼女の罪は積み積もって天に達しており、神はその不義の行いを覚えておられる”。」（黙 18：4～5）。

2. 知識が増す

「ダニエルよ、あなたは終わりの時までこの言葉を秘し、この書を封じておきなさい。多くの者は、あちこちと探り調べ、そして知恵が増すでしょう。」（ダニ 12：4）。

「また私に言った、“この書の預言の言葉を封じてはならない。時が近づいているからである”。」（黙 22：10）。 - 霊的知識が増す。

3. 世界が分裂する

「あなたが鉄と粘土が混じったのを見られたように、それらは婚姻によって、互いに混ざるでしょう。しかし、鉄と粘土とは相混じらないように、かれとこれと相合することはありません。」（ダニ 2：43～44）。

「わたしはエジプトを奮いたたせて、エジプト人に逆らわせる。彼らはおのおのその兄弟に適して戦い、おのおのその隣に敵し、町は町を攻め、国は国を攻める。」（イザ 19：1～2）。

「民は民に、国は国に敵対して立ち上がるであろう。またあちこちにききんが起こり、また地震があるであろう。」（マタ 24：7～8）。

4．大戦が発生する

「小羊が第二の封印を解いた時、第二の生き物が『きたれ』と言うのを、わたしは聞いた。すると今度は、赤い馬が出てきた。そしてそれに乗っている者は、人々が互いに殺し合うようになるために、地上から平和を奪い取ることを許され、また、大きなつるぎを与えられた。」(黙6:3~4)。

「わたしはその悪のために世を罰し、その不義のために悪い者を罰し、高ぶる者の誇りをとどめ、あらぶる者の高慢を低くする。わたしは人を精金よりも、オフルのこがねよりも少なくする。」(イザ13:11~12)。

「その時には、世の初めから現在に至るまで、かつてなく今後もないような大きなかん難が起こる。...その時に起こるかん難の後、たちまち日は暗くなる、...そのとき、人の子のしるしが天に現れるであろう。またそのとき地の全ての民族は嘆き、そして力と大いなる栄光とをもって、人の子が天の雲に乗って来るのを、人々は見るとであろう。」(マタ24:21~29)。

5．飢饉、疫病、地震がある

「小羊が第四の封印を解いた時、第四の生き物が『きたれ』と言う声を、わたしは聞いた。そこで見ていると、見よ、青白い馬が出てきた。そしてそれに乗っている者の名は『死』と言い、それに黄泉が従っていた。彼らには、地の四分の一を支配する権威、および、つるぎと、ききんと、死と、地の獣らとによって人を殺す権威とが、与えられた。」(黙6:7~8)。

「また大地震があり、あちこちに疫病やききんが起こり、いろいろ恐ろしいことや天からのものすごい前兆があるであろう。」(ルカ21:11)。

「地に住む者よ、恐れと、落し穴と、わなとはあなたの上にある。恐れの声のをがれる者は落し穴に陥り、落し穴から出る者はわなに捕らえられる。天の窓は開け、地の基が震い動くからである。地は全く砕け、地は裂け、地は激しく震い、地は酔いどれのようによろめき、仮小屋のようにゆり動く。そのとがはその上に重く、ついに倒れて再び起きあがることはない。」(イザ24:17~20)。

(二) 霊界において

1．後の雨の聖霊が降る

真の神の経緯によると、約束の聖霊は二回に分かれて降る。すなわち、先の雨(秋の雨)は使徒時代に降り、後の雨は主の再臨の前に降る聖霊である。

「シオンの子らよ、あなたがたの神、主によって喜び楽しみ。主はあなた方を義とするために秋の雨を賜い、またあなた方のために豊かに雨を降らせ、前のように、秋の雨と春の雨とを降らせられる。」(ヨエ2:23、参考：申11:24)。

「われわれのために秋の雨と、春の雨を時にしたがって降らせる神を恐れるべきである。」(エレ5:24)。

「その後わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ。その日わたしはまたわが霊を僕、はしために注ぐ。これらは主の大いなる恐るべき日が来る前に起こる。そして全て主の名を呼ぶ者は救われる。」(ヨエ 2 : 28 ~ 32)。

2 . 霊的なイスラエルが復興する

「わたしはあなた方を諸国民の中から導き出し、万国から集めてあなた方の国に行かせる。私は新しい心と新しい霊をあなた方に与える。」(エゼ 36 : 24 ~ 27)。

「終わりの日に次のことが起る。主の家の山は、もろもろの山のかしらとして堅く立ち、もろもろの峰よりも高くそびえ、すべての国はこれに流れてき、多くの民は来て言う、『さあ、われわれは主の山に登り、ヤコブの家に行こう』と。」(イザ 2 : 1 ~ 3)。

「主なる神はこう言われる。見よ、わたしはイスラエルの人々を、その行った国々から取り出し、四方から彼らを集めて、その地に導き、その地で彼らを一つの民となしてイスラエルの山々におらせ、一人の王が彼らの全体の王となり、彼らは重ねて二つの国民とならず、再び二つの国に分かれぬ。」(エゼ 37 : 21 ~ 22)。

3 . 異邦の邪教が栄える

「また彼らの国には偶像が満ち、彼らのその手のわざを拝み、その指で作ったものを拝む。こうして人はかがめられ、人々は低くされる。どうか彼らをおゆるしにならぬように。」(イザ 2 : 8 ~ 9)。

「その水の上に、ひでりが来て、それはかわく。それは、この地が偶像の地であって、人々が偶像に心が狂っているからだ。」(エレ 50 : 38)。

「この三つの災害は人間の三分の一を殺した。...これらの災害で殺されずに残った人々は、自分の造ったものについて、悔い改めようとせず、また悪霊のたぐいや、金、銀、銅、石、木で造られ、見ることも聞くことも歩くこともできない偶像を礼拝して、やめようとしなかった。」(黙 9 : 18 ~ 20)。

4 . にせ教会が多くなる

「人に惑わされないように気をつけなさい。多くの者が私の名を名のって現れ、多くの人を惑わすであろう。」(マタ 24 : 4 ~ 5)。

「また多くのにせ預言者が起って、多くの人を惑わすであろう。そのときだれかがあなた方に『見よ、ここにキリストがいる』『あそこにいる』と言っても、それを信じるな。にせキリストたちや、にせ預言者たちが起って、大いなるしるしと奇跡とを行い、できれば選民をも惑わそうとするであろう。」(マタ 24 : 11, 23 ~ 24)。

「わたしはまた、ほかの獣が地から上って来るのを見た。それは小羊のような角が二つあって、龍のように物を言った。そして先の獣の持つすべての権力を

その前で働かせた。また、地と地に住む人々に、致命的な傷がいやされた先の獣を拝ませた。また、大いなるしるしを行って、人々の前で火を天から地に降らせることさえした。」(黙 13 : 11 ~ 13)。

5 . 敵キリスト者が現れる

「わたしはまた、一匹の獣が海から上がって来るのを見た。それには角が 10 本、頭が七つあり、それらの角には十の冠があって、頭には神を汚す名がついていた。そこで彼は口を開いて神を汚し、神の御名と、その幕屋、すなわち天に住む者たちとを汚した。そして彼は、聖徒に戦いをいどんでこれに勝つことを許され、さらに、すべての部族、民族、国語、国民を支配する権威を与えられた。」(黙 13 : 1 ~ 7)。

「この王は、その心のままに事をおこない、すべての神を越え、自分を高くし、自分を大いにし、神々の神たる者に向かって、驚くべきことをかたるでしょう。...彼はその先祖の神々を顧みず、また婦人の好む者も、いかなる神をも顧みないでしょう。彼はすべてにまさって、自分を大いなる者とするからです。」(ダニ 11 : 36 ~ 37)。

「かの日の前には、まず背教のことが起り、不法の者、すなわち、滅びの子が現れるにちがいない。彼は、すべて神と呼ばれたり拝まれたりするものに反対して立ち上がり、自ら神の宮に座して、自分は神だと宣言する。...その時になると、不法の者が現れる。この者を、主イエスは口の息をもって殺し、来臨の輝きによって滅ぼすであろう。」(II テサ 2 : 3 ~ 10)。

6 . 御国の福音が全世界に宣べ伝えられる

「そしてこの御国の福音は、すべての民に対してあかしするために、全世界に宣べ伝えられるであろう。そしてそれから最後が来るのである。」(マタ 24 : 14)。

「わたしは御使いの手からその小さな巻物を受け取って食べてしまった。すると、わたしの口には蜜のように甘かったが、それを食べたら、腹が苦しくなった。その時『あなたはもう一度、多くの民族、国民、国語、王たちについて、預言せねばならない』という声が出た。」(黙 10 : 10 ~ 11)。

「そしてわたしは、わたしのふたりの証人に、荒布を着て、千二百六十日のあいだ預言することを許そう。彼らは全地の主のみまえに立っている二本のオリブの木、また二つの燭台である。...そして、かれらがその証を終えると、底知れぬ所からのぼって来る獣が、彼らと戦って打ち勝ち、彼らを殺す。」(黙 11 : 3 ~ 7)。

7 . 教会が大迫害を受ける

「その時、人々はあなたがたを苦しみにあわせ、また殺すであろう。またあなた方は、わたしの名のゆえにすべての民に憎まれるであろう。その時、多くの

人がつまずき、また互いに裏切り、憎みあうであろう。」(マタ 24:9~10)。
第五の証印を解いた時、神の言のゆえに、また、そのあかしを立てたために、
殺された人々の霊魂が、祭壇の下にいるのを、私は見た…「彼らと同じく殺さ
れようとする僕仲間や兄弟たちの数が満ちるまで、もうしばらくの間、休んで
いるように」と言い渡された(黙 6:9~11)。

「千年の期間が終わると、サタンはその獄から解放される。そして、出て行き、
地の四方にいる諸国民、すなわちゴグ、マゴグを惑わし、彼らを戦いのために
召集する。その数は、海の砂のように多い。彼らは地上の広い所に上ってきて、
聖徒たちの軍営と愛されていた都とを包囲した。」(黙 20:7~9)。

8. 花嫁が準備を整える

「キリストがそうなさったのは水で洗うことにより、言葉によって、教会をき
よめて聖なるものとするためであり、またしみも、しわも、そのたぐいのもの
がいっさいなく、清くて傷のない栄光の姿の教会を、ご自分に迎えるためであ
る。」(エペ 5:26~27)。

「わたしたちは喜び楽しみ、神をあがめまつろう。小羊の婚姻の時がきて、花
嫁はその用意をしたからである。彼女は、光輝く、汚れのない麻布の衣を着る
ことを許された。この麻布の衣は、聖徒たちの正しい行いである。」(黙 19:7
~8)。

「また聖なる都、新しいエルサレムが、夫のために着飾った花嫁のように用意
をととのえて、神のもとを出て、天から下ってくるのを見た。」(黙 21:2)。

五、 再臨に対する準備

主イエスは、ご自分の再臨の際のあらゆる前兆をマタイ 24 章にて示された後、25 章で
は引き続き三つの喩え話を話された。それらの喩え話は我々に、再臨の前は、自分、神、
人に対してどうすべきかを教えられている。

(一) 自分に対して——聖潔を追い求める

1. 油を用意する——聖霊に満たされる

「思慮の浅い者たちは、あかりは持っていたが、油を用意していなかった。し
かし、思慮深い者たちは、自分のあかりと一緒に、入れものの中に油を用意し
ていた。」(マタ 25:3~4、参考: Iヨハ 2:27—“油”は聖霊を指す)

「もしキリストの霊をもたない人がいるなら、その人はキリストのものではな
い。」(ロマ 8:9)。

「この聖霊は神の国をつぐことの保証であって、やがて神につける者が全くあ
がなわれ、神の栄光をほめたたえるに至るためである。」(エペ 1:14)。

2. あかりをともす——良い行いを現す

「ところが、思慮の浅い女たちが、思慮深い女たちに言った、『あなた方の油を

わたしたちにわけてください。わたしたちのあかりが消えかかっていますから。』」(マタ 25 : 8)。

「あかりをつけて、それを枡の下に置くものはいない。むしろ、燭台の上において、家の中のすべてのものを照らせるのである。そのように、あなた方の光を人々の前に輝かし、そして、人々があなた方のよいおこないを見て、天にいますあなた方の父をあがめるようにしなさい。」(マタ 5 : 15 ~ 16)。

「すべての人と相和し、また、自らきよくなるよう努めなさい。きよくならなければ、だれも主を見ることは出来ない」(ヘブ 12 : 14)。

3 . 目を覚まして待つ——最後まで耐え忍ぶ

「花婿が来るのが遅れたので、彼らはみな居眠りをして、寝てしまった。夜中に、『さあ、花婿だ、迎えに出なさい』と呼ぶ声がした。」(マタ 25 : 5 ~ 6)。

「あなたがたが放縦や、泥酔や、世の煩いのために心が鈍っているうちに、思いがけないとき、その日がわなのようにあなたがたを捕えることのないように、よく注意していなさい。その日は地の全面に住むすべての人に臨むのであるから。これらの起ろうとしているすべての事からのがれて、人の子の前にたつことができるように、絶えず目をさまして祈っていなさい。」(ルカ 21 : 34 ~ 36)。

「最後まで耐え忍ぶ者は救われる。」(マタ 24 : 13)。

(二) 神に対して——努めてみわざのために働く

1 . 使命を自覚しなければならない

「また天国は、ある人が旅に出るとき、その僕どもを呼んで、自分の財産を預けるようなものである。すなわち、それぞれの能力に応じて、ある者には 5 タラント、ある者には 2 タラント、ある者には 1 タラントを与えて旅に出た。」(マタ 25 : 14 ~ 15)。

「わたしたちは与えられた恵みによって、それぞれ異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、信仰の程度に応じて預言をし、奉仕であれば奉仕をし、また教える者であれば教え、勧めをする者であれば勧め、指導する者は熱心に指導すべきである。」(ロマ 12 : 6 ~ 8)。

「わたしが福音を宣べ伝えても、それは誇りにはならない。なぜなら、わたしはそうせずにはおれないからである。もし福音を宣べ伝えないなら、わたしはわざわいである。進んでそれをすれば報酬を受けるであろう。しかし、進んでしないと、それはわたしにゆだねられた務めなのである。」(I コリ 9 : 16 ~ 17)。

2 . それぞれの賜物に応じて尽くす

「5 タラントを渡された者は、すぐに行ってそれで商売して、ほかに 5 タラントをもうけた。2 タラントの者も同様にして、ほかに 2 タラントをもうけた。」(マ

タ 25:16~17)。

「主のこころを知っていながら、それに従って用意もせず勤めもしなかった僕は、多くむち打たれるであろう。...多く与えられた者からは多く求められ、多く任された者からは更に多く要求されるのである。」(ルカ 12:47~48)。

「ある時、もろもろの木が自分たちの上に王を立てようと出て行ってオリブの木に言った『わたしたちの王になってください。』しかしオリブの木は彼らに言った『わたしはどうして神と人とをあがめるために用いられる油を捨てて行って、もろもろの木を治めることができますよ。』...しかしいちじくの木は彼らに言った『私はどうして私の甘味と、私のよい果実とを捨てて行って、もろもろの木を治めることができますよ。』。(士 9:7~13)。

3. いたずらに神の恵みを受けてはならない

「1 タラントを渡された者は行って地を掘り、主人の金を隠しておいた。...主人は彼に答えて言った『この役に立たない僕を外の暗い所に追い出すがよい。彼は、そこで泣き叫んだり、歯がみをしたりするであろう。』」(マタ 25:18、26~30)。

「神と共に働く者として、あなたがたに勤める。神の恵みをいたずらに受けてはならない。」(II コリ 6:1~2)。

「あなたがもし、このような時に黙っているならば、ほかの所から、助けと救いがユダヤ人のために起るでしょう。しかし、あなたとあなたの父の家は滅びるでしょう。あなたがこの国に迎えられたのは、このような時のためでなかったとだれが知りましょう。」(エス 4:14)。

(三) 兄弟に対して——互いに愛し合う

1. 兄弟を愛することは神を愛することである

「すると王は答えて言うであろう『あなたがたによく言うておく。わたしの兄弟であるこれらの最も小さい者のひとりにしたのは、すなわち、わたしにしたのである。』」(マタ 25:40)。

「神を愛する者は、兄弟をも愛すべきである。この戒めを、わたしたちは神から授かっている。」(Iヨハ 4:20~21)。

「貧しい者をしえたげる者はその造り主を侮る、乏しい者をあわれむ者は、主をうやまう。」(箴 14:31)。

2. 愛を行う人は救いを得る

「そのとき、王は右にいる人々に言うであろう『私の父に祝福された人たちよ、さあ、世の初めからあなたがたのために用意されている御国を受けつぎなさい。あなたがたは、わたしが空腹のときに食べさせ、かわいていたときに飲ませ、旅人であったときに宿を貸し、裸であったときに着せ、病気のときに見舞い、獄にいたときに尋ねてくれたからである。』」(マタ 25:34~36)。

「わたしたちもこの世にあって彼のように生きているので、さばきの日に確信を持って立つことができる。そのことによって、愛がわたしたちに全うされているのである。」(Iヨハ 4:17)。

「キリスト・イエスにあっては、割礼があってもなくても、問題ではない。尊いのは、愛によって働く信仰だけである。」(ガラ 5:6)。

3. 自分を愛すように他人を愛せよ

「律法の全体は『自分を愛するように、あなたの隣り人を愛せよ』というこの一句に尽きるからである。」(ガラ 5:14)。

「互いに愛し合うことの外は、何人にも借りがあってはならない。人を愛する者は、律法を全うするのである。」(ロマ 13:8~10)。

「万物の終わりが近づいている。だから、心を確かにし、身を慎んで、努めて祈りなさい。何よりもまず、互いの愛を熱く保ちなさい。愛は多くの罪をおおふものである。」(Iペテ 4:7~8)。

六、再臨に対する様々な説

以上のキリストの論拠に関する事は、すべて聖書の指示に従ったものであり、人間の考えによる理論や憶測ではない。一般の教会は聖霊の導きがないため、再臨に対する見方が様々で、聖書から外れている。ここにいくつかそれらを紹介する。

1. 霊の再臨説

彼らは五旬節の聖霊の降臨がキリストの再臨だと考えている。彼らは、将来キリストが無数の天使を率いて雲に乗って来られ審判を行うということを信じていない。この説を信じている多くの人々は科学の立場で聖書を判断している不信派—新神学派である。

2. イエスはすでに降臨したという説

この説はアメリカの聖書研究会から出たものである。彼らは、イエスは終わりの日に再臨するが、その再臨はすべての人に見られるのではなく、彼は密かにそして突然来られるので、それを知る人は少ないと言う。彼らの計算によると、イエスは1874年にすでに再臨し、収穫の任務を遂行され、そして1914年には王位につき1918年には神の宮に入られたと言う。彼らによると、主が1874年に再臨したことによって、世界が彼の光によって照らされたので、知識が増えて科学が進歩し、世は次第に希望が見えはじめた。よって彼の再臨をもう待つ必要はないと考えている。彼らはやがてキリストと共に地上において千年王国を建て、エデンの国の幸福の状態に回復し、神の救いの経論を完成すると言う。

3. 千年の喜びの年の前の再臨説

この説によると、世界は次第に悪くなり、教会は突然天に上げられる。その後、大患難が地上に臨み、イスラエル人や地上にまだ残っている一部分の異邦人たちは

この時に悔い改めてキリストを受け入れる。そしてキリストと教会は天から降り、サタンは縛られ、地上に千年の栄光の王国を築く。千年の期間が終わると、悪魔は解き放たれて列国を惑わし、聖徒たちの陣営と愛されていた都を取り囲む。しかしその時、天から火が下って彼らを焼き滅ぼし、キリストが最後の審判を行って、この世を終わらせる。

4 . 千年の喜びの年の後の再臨説

彼らの説によると、福音は世界中に広まり、人類の大多数はキリストを主として受け入れる。よって世界はキリストに統治され、千年の平和な国家が現れる（教会の黄金の時代）。しかし、千年が終わろうとする時、悪事が再びはびこるので、キリストが天から再臨して世を裁き、善人は天国に入って祝福を得、悪人は地獄に投げ込まれて苦しみを受ける。